

[176]

水 稻  
陸 稻

三、五〇〇  
四、八〇〇

其の外、將來開墾さるべき面積は、農作地として、現在の數百倍の廣さなるを以て、前途の有望なること想像以上といふべきである。

但し海倫以北の地にありては、栽培し能はざる種類のものがある。瓜類、茄子の如きこれで、折角、花開き實結ぶも、俄然秋冷襲ひ降霜を見、收穫を全うし得ない。また此の地方一帯の農家は、多少に拘らず粟稷の栽培をなすが之れは支那としては禁止されあるもので、ひとりこの地方に默許される所以は、移住者獎勵の一方法であるといふ且つ粟稷はその利益比較的多き上に、本來早熟のものであるから、その收穫後に白菜類を作るを得、農家によろこばれる。

また農家の副業として養蜂、養鶏も行はれる。移住農民は極めて勤勉にして、男子は固より婦女に至るまで、星を頂いて野に出で、夕陽没してのち家路に歸るを常とし、炎熱の日中も約二時間も休むのみにて一日營々として倦まず、働いてゐる。しかもその粗食驚くべきものあり、強雨を除く外は夏日の間寧日なくしむ。また繁農期には山東を第一とし、河北、河南等よりの出稼苦力が陸續として來り、南北滿を合して毎年十萬人を下らないといふ。黑龍江省も吉林省と共に森林地帯極めて廣大である。即ち西部はハクト附近及び興安驛地方に松、落葉松の如き針葉樹林多く、大なるは直径一尺内外より小なるは三四寸のもの密生する。そしてこの地方の産材は主として南滿地方の需用に應ずるが、通北を過ぎ龍鎮地方より漸次北部一帯および東部の一地方にかけて全く山岳となるや、大森

林を以て滿地を掩ふに至る。殊に大興安嶺の北部山脈は鬱蒼たる大森林をなし、白樺、黒樺、柞、落葉松を主とし黄花松、エゾ松、滿洲楓、柏、朝鮮樅その他數十種の実林を以て全山を覆ひ、晝なほ暗いところが多い。

千古斧鉞を加へざる山々が重疊して壯觀言語に絶する。小興安嶺山脈もまた同様な大森林地帯である。古來有名な香窩集あり、滿々菁々たる美景、眞に天下の奇である。たゞこれまでは殆ど交通の便なかつたために、伐採の方法なかつたが今後は開發が試みられるであらう。但しこれまでも東支鐵道沿線附近には、諸所に伐採及び製材の設備があつて、着々として營業される。殊に興安驛附近なる免渡河には日本人經營の採木公司があり、多數の日本人の指揮により採木を行つてゐる。

### 五 鑛業及び工業

黑龍江省は鑛産物にもめぐまれてゐる。殊に金鑛は最も有名で各所に鑛務局あり、これを管理する。概ね砂金にして興安嶺の支脈たる漠河、烏瑪河、呼瑪、愛琿、奇克特觀音山、太平溝、綏東、湯原等から産出する。また湯原縣には炭鑛もある。然し何れも採鑛の規模小にして又語るに足りない。おそらく今後有志者の努力によつて大に開發せられるであらう。

[177]  
工業は未だ著しいものがない。齊々哈爾、安達、大興、拜泉、克山、呼蘭、綏化、海倫、通河、巴彥等の各地に於て豆油の搾取業及び製粉の工場あれど、何れも南滿地方に於ける如き大規模のものでない。然し齊々哈爾、安達、拜泉、海倫等の工場は比較的秩序がある。又燒鍋と稱する滿洲特殊の燒酎製造業は、主要地帯に必ず一場を構へ傍ら地方の金融機關となつてゐる。製材業者の各地にあること既に述べたが、その外縣廳所在地等には銃砲製造業者



が多い。勿論規模は大きくないが二三名乃至数十名の職工を使役し、相當に製造及び修理を營んでゐる。これ各地方が常に土匪の出沒になやんでゐることを證するものである。

尙ほ牧畜は此の地方に専業者殆どなく、主として農家の副業の程度である。綿羊、山羊の類大部分を占め牛、馬、騾等之に次ぎ駱駝は少い。元來此の地方に移住する者は農業を目的とするが、また土地の牧畜にも適し且つ牧草の發育良好なるため、漸次牧畜にも及ぶものである。これまた今後有望なる事業たるに違ひない。

#### 六 地方的特産物

尙ほ産業と言ふほどではないが地方の特産物に就て一言せんに、人蔘、砂金、蜂蜜、烏刺草、貂皮、海東青（鷹の一種）の如きが知られる。人蔘は其の種類幾つかあるが山中に自然生ずるものを第一とする。然しこれを發見することは極めて困難で、その大なるもの一根を得れば一生坐食するに足るといはれ、昔或る農民が山に入りて糞食せしに、神夢あつて人蔘の所在を知らせたので掘りたるに、果せるかな大なる人蔘を得、一家の福を招いたといふ。元來人蔘は日光の直射を忌み日蔭を好むので、今も北部地方の大森林内殊に大興安嶺、小興安嶺、長白山脈の深奥には天然産の優物があると傳へる。

又砂金は別項に記した如くであり、蜂蜜も農家の副業として支那人よりもロシア系の人々に試みられ、ハルビン地方に販賣するもの少くない。北滿の貂皮に至つては世界的に愛好されるものである。その産地によつて若干毛色を異にし、森山幽谷のもの最も良質である。その多く日光を受けざるものは黒色を呈し、高原地帯などで日光の照射強き地方のものは黒褐色或は茶褐色を呈するといふ。然しこれも現今では發見されること稀にして容易に手に入り

難い。需要極めて多いこと故奥地で適當の方法により養殖を試みたならば、一種の産業となるであらう。烏刺草は一種の水草で一見、糸薄の如く細い葉が二三尺にのびてゐる。これは一の保温草にして滿洲の勞働者は烏刺と稱する皮靴を穿ち、其の内にこの草の乾燥せるものを湯に浸して柔軟にして入れておく。これは防寒のためと共に長途の旅等足に疲勞せざるためであるといふ。

#### 七 住民と風俗

黒龍江省地方には古來、支那五族以外の諸族即ち索倫、オロチヨン、キリギス等が森林、及びその縁邊の地帯に住居し、別天地をなしてゐる。かれらの多くは家屋らしいものもなく、白樺樹の皮を剝いで屋上へ列べ雨露を凌ぎ或はこれを継ぎ合せて方錐形の天幕代りとなして住む。そして他種族との交際をいと自分らは時に隔れて出で來り獸皮その他の品物とかれら自身の需要品とを交易することがある。然し異種族がかれらの勢力圏内に入れば、忽ち襲撃してしばしば生命を奪ふのである。彼等はこれを以て一種の自衛權行使と心得、敢て惡事とは感じないらしい故に支那人でも彼等の意向をよく理解し懐柔を施して、物々交換などを行ふを専業とするものすらある。

また彼等をして木材を伐採せしめ解氷期に至つて河川を利用し、筏流しをなして一定の場所に運び取引を行ふこともある。殊に省内東北部地方ではこれが普通に行はれるけれども、大興安嶺北部奥地の如きは實査困難にして、住民に關する研究も不十分である。近來この種の住民は次第に減少しゆく傾向あり、多數の群居せる部落等もないやうである。

従つて黒龍江省の居住者としては南滿地方から移住せる者と、山東、直隸を主とし河南地方等よりも一族相携えて



〔180〕

移住せる者、或は個人的の移住者が最も多く約五十年來これらによつて黒龍江の開発が行はれつゝある。然しその移民数は他の各省に比して遙かに少く、殊に滿洲國の半分に近い大面積に比する時は、人口密度極めて稀薄な状態にある。

現在居住する支那其の他の移住農民が、こゝに落ちつくまでには、幾多の困難を経たのである。或は土匪の襲撃を受け或は酷熱と戦ひ、辛苦を積んで幸に若干の穀物の收穫をなすに至り、まさに賣却取引をなさんとするや、どこからともなく現はれる匪賊によつて強奪される。若しこれに抵抗すれば直に殺されねばならぬ。甚しきは一家族一村落が焼討の慘禍を蒙ることも珍しくない。旅行に際し、その惨跡を見ること一再でない。移住者はかゝる迫害不安にも耐へて或は次ぎから次へと土地を轉々し、或は一時故郷に引きあげなどして再舉を試み、隱忍持久、刻苦精勵してつひに今日の成功を見たのである。

されば多くは一部落を以て一家の如く團結し、周圍に壕をうがち高き墻壁を築き、防禦大にとめてある。何れも大なるは四五十戸、少なるは七八戸よりなる部落で夜は嚴重に門扉を鎖し、夜警を嚴にしてゐる。若し匪賊の襲撃を受けた場合にはその敵數の對等なるか否かを察知し、かれ劣らば抵抗して驅逐にとめるが、萬一敵勢強暴にして防ぎかねる時は城内の全部落、賊手に斃れるを覺悟せねばならぬ。故に或る部落では襲撃を受けた時には、老幼婦女を避難せしめて、かれらのなすにまかせ掠奪を盡さしめる。

かゝる避難所は冬季野菜類を貯藏する床下の大地穴で、匪賊襲來と聞くや直に老幼相抱いてこゝに避けるのを通例とする。然し年一年と住民増加し且つ鐵道其の他の交通機關發達するにつれて、市邑、都會地には次第にかゝる危

險は減少しつつある。殊に嫩江流域を境界として東部一帯は市街地多く、縣廳所在地や駐兵地などあつて危険は比較的少い。然し市街地を除けば一般には旅店稀にして、旅行者は普通民家即ち農家に依頼して宿泊せねばならぬ。また諸所に部落によらずして個人の大邸宅を構へ、周圍に牆壁を高く繞らし一見城壁の如きものがある。この邸宅は南滿地方と異り概して低地にして腐葉土多く、それは粘着力強くして且つ雜草根を混するにより、鋤などにて地盤を任意の大きさに切り取り、これをその儘に積み上げれば直に數メートルの土壁を築くことが出来る。之れが一回の降雨に逢へば全く煉瓦を疊んだ如き堅固な壁となるのである。

更にその上部に土をつけ、コテを以て塗り上げると數十年も保ち得るに至る。かかる大邸宅を大家と稱する。そこでは晝間も常に門扉を閉し、繁農期には老幼婦女と一人の老僕とを居らしめ、人の訪問する者あれば中より梯子を以て壁に上り、顔のみ出して應對する。そして然るべきは開門して請するのである。安全なるを期すれば宿泊をも快諾し、時に滞在をすすめることさへある。

またこの地方の旅行には食物の粗なるに耐える覺悟を要する。しかしまた不可解なる事件に遭遇することもある。先年、海倫北方の一村落に大邸宅を構へ門扉を開放して他人の出入を自由となす家あり。時たま正午であつたので晝食を乞ふたところ、忽ち三四の美味をととのへ酒を置いて歡待をかざるものあつた。余はここより程遠からぬところに有名な匪賊の巢窟あるを聞き、この地の通過の方法を問ひたるに、この家の主人答へて曰く「それは少しも怖れるに足らない。貴下に一人の案内者を附するであらう」と。ついで一青年銃を携へ入り來り、余等に従つた一體して主人に訣別し、かの危険地に入つたところ、ついに一の銃聲も聞かず無事に通過することができた。かの

〔181〕



大家の主人といひ、青年といひ、いかにも平和に見えて他の門戸を閉して警戒せると似つかぬには不思議を感じた。たゞその時青年の携へた銃口に、約一寸ばかりの赤い毛製のものをつけたのを発見したが、これ何かの符號にしてこれを附したる者には如何なる匪賊も一指だも觸れるを得ないのかも知れない。

兎に角黒龍江省内、殊にその東北部は移住農民によつて次第に開けつゝある。今や開拓の結果實庫をなしたるの感あらしめる。さればこの地方に年々農繁期に出稼する山東苦力等の賃銀の如きも、南滿に比して遙かに高いといふこれは危険率の一層多いのにもよらうが、また一面地味肥沃にして收穫の量の比較的豊かなるためであらう。そしてこの開發は既に北滿の文化的發展を促し、海倫、拜泉の如き市街地は急激の進歩をなして、電燈、電話、自動車、の如き文化的施設普及し、南滿の僻地よりもはるかに發達してゐる。

従つて移住民も年々増加し、黒龍江省の將來は農、工、商業共に極めて有望である。衛生状態の如きもハルビン地方のロシア人の風をならひ、市街地には下水、道路等を通じ塵芥の取纏め處分の如きに特に意を用ひてゐる。また市街地では洗濯業等も多く且つ繁榮してゐるのを見ても、如何に文化の程度が進んでゐるか知られる。しからばかゝる發達の基礎をなせる經濟的關係の現状は如何？これが本稿の眼目である。

### 八 都 邑

#### ◎ 齊々哈爾

彼の滿洲事變は遂に新國家の建設となり、その結果は黒龍江省への經濟的進出が、容易となつたのと洮昂（洮南—昂々溪）齊克（齊々哈爾—克山鎮）の兩線が、滿鐵の委託經營となり團體旅客の割引運賃、直通列車の運轉等各種旅

行者の利便を計るに至つた爲め、同地方への旅行者は急に激増し、從來觀られなかつた北滿の寶庫の開發すべき時機が到來しつゝある。それに加ふるに齊克線の開通は北滿の輸送系統に、一大變化を及ぼし從來ハルビンの經濟的勢力圏内に立つた齊々哈爾が、西部黒龍江省の經濟的中心となる日が近づいて來た。

その多望なる將來を有する齊々哈爾は、元來軍事的需要から生れた都市なのである。即ち往年帝政ロシアの北邊侵略に對して建てられた城で、彼の愛理、墨爾根と共に同一の原因で起つたもので、そして愛理から墨爾根へ、墨爾根から齊々哈爾（康熙三十八年）へと、黒龍江將軍が移駐して既に二百有餘年の年處を経た。この地の古名はト魁（又はト奎）と稱し、土人の間には今も此の名が傳へられてゐる。本來の齊々哈爾は此處から西に二十支里、嫩江の右岸にあつて、康熙年間そこに火器營なる軍防所を置いたのであるが、交通不便と水害の憂があるといふので、それまで一寒村に過ぎなかつたト魁に移り、齊々哈爾の名もその僥倖しふしたものと云はれてゐる。又其の名「齊々哈爾」の音源は蒙古語から出てゐる。

現在の齊々哈爾は黒河に至る驛路に衝り、また西は海拉爾へ、東は呼蘭へ、南は伯都訥へ通ずる、古來より交通上の重要地點である。

#### ◎ 齊々哈爾市街

市街のある嫩江の左岸五支里、江岸の西江沿兒（胡蘆頭）は民船の碇泊所、北江沿兒は材木商が集まる。何れも齊々哈爾にとつての埠頭である。

城は内城と外城とに分れる。内城は城市の核心で、もと木城であつたのを光緒の末年に、黒煉瓦に改築し俗に磚城



と呼んでゐる。城壁は高さ丈餘、厚さ七八尺、銃眼を造り方六町にとりめぐらして、南に迎恩、西に平定、北に懷遠、東に承暉の四門を開き東南角には、孔子廟があり、魁星樓が高く美しく聳えてゐる。内には惠民街や寛宏街が主道を爲し、省長公署、政務廳、財政廳等の諸官衙と滿洲旗人官吏の邸宅が多く、屋根にそりを見せた、宮殿風の建物も雅びて、おつとりとした役所街の一廊を染め出してゐる。

外城は俗に土城と呼ばれ、東西十八町、南北三十町に土壁をめぐらし、北、東、南及び大、小、西門の五門を開いてゐるが、今は破壊して形を失つてゐる。其の内、磚城の北門外は黒河街道に當り、官吏富戸の多い街で、落付を見せ東門外は雜然とした街を成し、南門外は城市の大きな部分を占めて、商業區域となつてゐる。屋根を茶褐に、上層を青に塗り、鐘を吊つた一種特徴ある迎恩門から出た、南大街の通りは最も繁盛で、財神廟街これに次ぐ。北東の大道には大きな招牌、美しい飾窓の大商店が揃ひし、車道の兩側には幅三尺許りに、板敷の歩道を作り、毎戸軒下に撒水用の貯水桶を置いて「太平水桶」と記してあるが、殊に人目を惹く。街は總てが整然としてゐる。軍事的の市街だけに軍人の往來多く、秩序立つて見える。

市場は南菜市と稱する一廓に、野菜、獸魚肉、衣類の店の集つてゐるもの、南大街端に近い、道側の露店及び新市街と稱して、古物を列ねた廣大な市などがある。南門外には龍沙公園がある。同公園は西郊に近い市民の遊歩地である。その野江樓に登れば市街や、嫩江のたゞすまゐりに眺望が利く。公園の南に近く回教徒の墓地がある。街南は自開新埠地で我が領事館がある。

人口は詳細に知ることが得ないが、滿洲人、支那人合せて十萬に近く、日本人は内鮮人合せて二百餘、他にロシア

人が少しばかりゐる。

◎ 昂々溪

洗昂線の終端驛は、模古氣と云ふ村にあつて、その驛名を「昂々溪」と呼ぶのである。昂々溪なる驛名は洗昂線、中東線(東支線)並に昂齊輕便鐵道(昂々溪、齊々哈爾)の三箇處にあるために、間々非常なる錯誤を來すことがある。

中東線の昂々溪は齊々哈爾省城を去る十八マイルの中東線の一驛で、これを齊々哈爾驛とも呼んでゐる。

又同驛から一町餘の地點から齊々哈爾省城に輕便鐵道が通じてゐる。これを昂齊線と云ひ、その地點をこれまた昂々溪と呼ぶのである。昂齊線の終點昂々溪と、中東線の昂々溪間、並びに、齊々哈爾省城と中東線昂々溪との間にパスがあり唯一の連絡機關だつたが、彼の事變後は何故か中止してゐる。齊克線の開通せざる以前は齊々哈爾省城行きの旅人で、洗昂線經由の場合は何としても終點昂々溪驛から中東線昂々溪迄の五キロメートルの間を、自動車又は馬車で連絡し、同地から更に昂齊輕鐵の、昂々溪驛に出て省城に向ふのであつたが、齊克線のある今日では同様の起點である龍江で下車し、省城に到るのでこの間二センチ半である。

市街は一マイル半四方の廣大な東支鐵道附屬地で、街は東西に各一門、南に二門を有してゐる。鐵道北は東支鐵道の宿舍町、鐵道南は滿洲人、ロシア人混住の商業區で頭道街、市場及びその以西の支那街に商店が多い。特に市場附近は町の中心としてぎはつてゐる。最近の人口は滿洲人は支那人一萬七千七百餘、外國人(主にロシア人)一千六百九十、日本内地人、朝鮮人合せて百餘人である。

この數字にもある如く小さな街に似合はず、ロシア人が可なり多く住んでゐるので、町全體の色彩には濃厚なる口



シヤ氣分が出てゐる。それが洗昂線を通つて、この町に入つて来た旅行者にとつて鮮かな第一印象を刻ませるのである。衝には舊教の寺院の尖塔や、製粉會社が高く特立してをり鐵道北の宿舍町は、全然ロシア人の町で、ゆつたり庭木をとり入れた家、大きな鐵道俱樂部、附設の兒童遊園地、機關庫などがある。鐵道南の商業區は看板が悉くロシア文字で記されてゐる。

◎ 諸 都 邑

齊々哈爾に次ぐ都邑には、墨爾根、愛琿、黑河、海拉爾等あれど、その海拉爾は新しき興安省に屬し、また他の三都はこの數年來漸次衰退の徴あり、寧ろこれに代つて綏化、海倫、克山等の新興都市が將來ますます發達の趨勢を示してゐる。現に克山の如きは鐵道開通以來、著しく人口増加し市街はいよゝゝ擴張されつゝある。その概略を此處に語らう。

墨爾根は一に嫩江と稱し、齊々哈爾と愛琿との中間に位して小興安嶺山脈の西麓にあり。嫩江に沿ひ人口は五萬といはれるが、今はすつと少い。中央に方形の小土城あり、附近に短距離の輕便鐵道ある外まだ交通にめぐまれないが、將來鐵道通過地點とならば有望であらう。

愛琿は黑龍江省の北東邊、黑龍江岸にあり、もとの附近は少數の索倫人とダウール人との部落があるに過ぎなかつたが、近年支那でこのあたりに招墾局を設け、移民を奨励したので忽ち數十萬の移住者あるに至つた。そのために愛琿も發達した。もと黑龍江城といひ露人の南下防禦のため邊防將軍を置いたのはじまり、ロシアがシベリヤ鐵道を建設し、その支線をブラゴエステンクスに延ばして市街を建設したのに對峙し、その對岸に大黑河市を營

んだため英米の財團は滿鐵及び支東支南線と並行する錦愛鐵道敷設權を得て大問題をおこし、以來愛琿の名世に知られるに至つた。しかし市街としては發達せず、對岸のゼーヤ流域で産する砂金の密輸入と穀類、獸皮等の貿易とを黑龍江の水運を利用して行はれるに過ぎない。黑河はこの愛琿のやゝ上流にあり、ブラゴエステンクスと隣接してその對抗都市として建設されたもので、數年前までは人口二萬に近かつたが、砂金採掘の困難と阿片取引減退とにより著しく衰へ、今は八千人以内である。加ふるに兵匪の襲撃、掠奪等のため一層不振の状態にあつて將來の開發を待つの外ない。

海倫は呼海鐵道の終點にあたり、一名を通北とよび清朝末期に副都統府の設けられてより急に發達し、西方の拜泉その他から地方農産物が集中され、また北滿の貴重獸皮たる黑貂栗鼠、狐、野犬などの毛皮が集まるので、米國商人も多數入込んでゐる。また呼海鐵道の起點驛で、ハルビンに近い呼蘭は穀物其の他の産物の集散地で、人口五萬ロシア人商店等がある。

第七節 熱 河 省

一 地 勢 と 位 置

熱河省は北緯は四〇度乃至四六度、東經一一六度乃至一二三度の間にあり、滿洲國として最西に位し、もとの東部内蒙古の昭烏達盟、卓索圖盟の兩地域の大部を占め、最近まで熱河特別區域と稱されたところである。即ち北は支那の察哈爾省烏珠穆沁旗及び奉天省圖什業圖旗と境し、東は奉天省、南は奉天省及び支那の河北省、西は察哈爾省の一帶と界してゐる。



[188]

最近興安省の新設に伴ひ、熱河省北部またそのうちに編入されるらしい。省内を承德、樂平、豊寧、平泉、赤峰、凌源、朝陽、圍場、阜新、開魯、林西、綏東、建平、降化、經綸の十五縣に分ち、省城即ち全省の行政機關は承德縣(樂河)にある。

熱河省の地勢は一般に山岳地帯で、陰山脈が、青海中央を横断せるコンロン山を親系として、蜿蜒黄河の北岸よりこゝに來る。察哈爾省とは自らこれを境界とし、随つて北邊は隆起する。また多倫地方より克什克騰地方にかけて大高原地帯を形成し、興安嶺の脈が大高原をなして北東に聳えてゐる。しかし一帯は沙漠性高原にして、山地の如きも一部を省いては、吉林、黒龍江諸省の如き大森林などはなく、たゞ山岳の起伏してゐるのみ。しかもその間には數條の河流がある。その主要な河川は多く西邊に發源して東流し、奉天省に入るが樂河のみは西境に近く、北の國外より來つて貫流し、その沿岸に熱河をおき再び南して境外に出でてゐる。

## 二 河 川

### ◎ 西喇木倫河

然して河川中最も著名なのは西喇木倫である。古名に饒樂水その他數名あり、その西喇木倫とは蒙古語の黄色を帯びる河の意で、源を克什克騰西旗十五邦里の興安嶺赫爾賀原洪に發し、毛全副嶺により樂河と分水し、屈曲して東北流し更に巴林旗の南境で察穿木倫と合し、阿爾沁の南端沙漠中に至り老哈河來りそゞぐや、やがて東して省境を出でる。出でれば即ちその名も遼河となり、更に蜿蜒して開原、鐵嶺兩縣下を曲折のち、營口に於てついに海にそゞぐ。

その延長實に三百餘邦里に及ぶ。その主要なる支流たる察穿木倫は、遼代の黒河である。源を巴林の西北、宋吉納山に發し東南に流れて西喇木倫に合する。また今一つの老哈河は金代のいはゆる大河で、蒙古語ラオハムレンと稱する。源を陰山々脈中の明安山より發し、まづ察穿河といひ西南流して察穿和積の東北に至り、更に屈曲長流、西喇木倫に合する。この河にそゞぐ英金河は、舊名陰涼河で源を陰山脈中のガマ嶺に發し、東南流して更に西北に向ひ赤峰の西北で錫伯河と合し、赤峰山の麓を東北流して老哈河に注ぐのである。

### ◎ 樂 河

これと全く系統を異にするものは樂河である。舊名を濡水といひ源を陰山脈の察哈爾の圖古爾山に發し、西北流して烏蘭城に至り東北に曲折し、多倫の東を過ぎ、このあたりで閃電河とよばれ更に東流し、庫々河等を合せ、ついで南流しつゝ細流をのみ、郭宋屯の北に至り、また東南流し熱河行宮の禁地界を経て全家屯に至り、更に東南流をつゞけ、途上北より來る熱河を受けて水勢頓に増加し、それより東南に向ひ承德の都に沿ひ、間もなく境外に出でてのち二派となり、一は東南、他は南に流れて海にそゞぐ。

[189]

それに入る熱河は昔の武烈水である。三源にあつて舊圍場の東南から發する圖都河、喀喇沁左翼旗の西、默心嶺に發する默河、同旗西南虎爾虎克山の西麓から發する賽音河これで、何れも西南流して承德縣東北境で三水合し、黄土坎釣魚臺行宮の東を経て西南流し、熱河行宮内より流出せる温水を受け、こゝに始めて熱河の稱あり、それより南流して樂河に會する。

### ◎ 大及び小凌河



[190]

別に省の南部に大凌河あり、源を喀喇沁左翼旗北の尾蘇圖山に發し、東北流して土默特右翼旗界に至り、この七間流を受け、なを東北流して木頭城北を過ぎ、こゝに二流を受け朝陽縣東を過ぎ、ホンギウ河來り會し、義縣城北より東南流して大凌河站を經、海に注ぐ、流域八十餘邦里なれど夏季には約三十邦里の間に帆船の上下がある。その西に小凌河あり、土默特右翼旗西、明安喀喇山に發し東北流して錦州の間を經、海に注ぐ、この二つ何れも河流の大半は奉天省内にある。

### 三 産業と交通一般

熱河省の地内は從來あまり産業的に顧みられず、且つ大部分が沙漠的地貌、地質なる爲め農耕にめぐまれず、また鑛産資源の開発も、これまであまり行はれなかつた。その他各般の點において、調査未了のこと多く經濟、産業、交通上、明細に記述するを得ない。大體にこの省の住民は農業七、牧畜三の割合を以て生活し、農産物の如きも自作自給の餘剰を三割に及び、これを省外に移、輸出してゐたが、しかし近年は人口の増加と共に生産餘剰減小の傾向を示す。しかもなを廣大なる荒蕪地及び放牧地帯を年々耕作地となしつゝあるから、將來交通の發達につれて耕地面積も増加し、産出物の増額を見るに至るであらう。

現在省内には概して山岳、丘陵、沙漠等多けれども中央部の赤峰以北、烏丹城から巴林、經綽、林西地方は高原地帯で殊に經綽より林西に至る間の山脈は長い原野の如くであり、農耕に適する。この地方は既に興安嶺山脈の南邊なるにかゝはらず、それと氣づかぬほどの大高原耕地で、黒龍口東北部に似たところあり、作物は早熟にして收穫が多い。

次に交通状態を見るに、省内全般に原始的であつて語るに足りない。鐵道は錦州より來るもの僅に頭をのぞかせるだけで、縦横に貫通する豫定線あれども一つも實現されてゐない。自動車は朝陽より遼源、平泉を經て熱河に至り更に樂平を經て北平に至るものを主とし、熱河より赤峰を經て開魯に至るもの、通遼より開魯を經てバイスン廟、大坂上、林西に至るものが冬季間のみ通じてゐる。

### 四 都 邑

#### ◎ 熱河と名所

熱河省の首府たる熱河、即ち承德は省の西南邊に偏つて存し、東北に山岳をめぐらし、樂河を東にして平地と市街を展開する。しかし地域はあまり空濶でなく河西は絶壁重疊して屏立し、また山岳の岩脚は青苔蒼々として人の登はんを許さない。そして山岳は四百メートルの空に、そうえいとして聳え、且つその頂上に百メートル餘の一基の鍾石が兩際に直立し、遠くこれを望めば山容宛も前立を飾れる軍帽の如く、しかも奇はこれに止まらず、更に鍾石の南側に、ひきがへるのそんきよするが如き巨石あり、共に熱河の景勝に一奇觀を添へてゐる。

市街は離宮の南方に展開し東西に長く、南北に短く不規則な五角形をなす。その右肩の邊に離宮を戴き、右側の邊に黒里河がほと並行して流れる。また市街より出でて大動脈をなす三條の道路は、先づ市の中央に近く三叉をなし黒里河に沿つて北東に走るものは赤峰に西に奔るものは古北口を經て北平、天津に、西南から更に東行するものは平泉、遼源等に通ずる。若しこの三路を絶たれたならば、熱河は排氣鐘中の雀の如くである。しかもまたこれらの三道は何れも極めて重要な交通路線をなし、北平、蒙古烏珠穆沁、車臣汗部等へ通行のための最衝地である。比較

[191]



的北平に近く、塞北統禦上又形勝なるを以て、古來政治及び商業の地として價值を保ち來つた。従つて市街の主要な通りには赤峰と北平とをつなぐ一條の大街で、一里半餘の長さにわたり、商工業家揃比する。且つこれから無數の小巷を分岐する。黒里河に面する部分は堅固な花崗石の堤防を築き、汎濫の防禦をなしてある。

またこゝにはもと直隸蒙古八旗を統治すべき熱河都統が駐在し、且つ兵備道臺ありてこれを助け、事實上直隸蒙古の中央政府であつた。今も熱河都統衙門は市の北端に、兵備道臺衙門は西端に見られる。また官銀號は市の中央にあり、中央金庫と同一の業務を執り傍ら一般金融の機關である。

然して熱河の最大名所たる離宮は、康熙四十二年の造營になり康熙帝はこれを避暑山莊と名づけた。その周圍約三千メートルに、高さ七メートルの石牆をめぐらし、一脈の山陵蜿蜒としてこのうちに横はり、また大小の池沼は諸所に碧藍を湛へ、千歳の老樹鬱蒼として天を摩する。往時結構、如何に莊嚴、華麗を極めたかは今も想見し得るが威靈蒙塵の厄以來、久しく帝王の幸なくして營繕の業修まらず、院内雜草離々として、革屏玉廂空しく風雨の廢頽するに委せてある。

離宮の背面、黒里河の一支流を隔てて北に二大喇嘛廟が對立して偉觀をなす。一を札薩倫布、また須彌福壽廟他を布打拉、また普陀宗乘廟といふ。前者は乾隆四十四年の建造で後者はそれに先たつ八年の造營にかかる。共に清朝初期全盛時代の好記念物である。札薩倫布は西藏語の行宮の義で、西藏達賴の一支たる蒙古大喇嘛の駐在寺で前西藏式に模してある。布達拉は後西藏式である。共に輪奐の美を極め、幾多の寶塔、伽藍など併置され本堂の周圍には二十メートルの石壁をめぐらし、その正面一層には喇嘛黃教の開祖宗喀巴の像を祀り、上層には釋迦牟尼佛を安

置し、また左右には鐵木眞その他の像を排置する。これ一般喇嘛寺の常なれど、堂宇調度の善美、稀に見るところである。瓦壁檣欄悉く金色輝き陸離たる光彩人目を射る。瓦葺、門扉の金具はもとより殆んど金を以て掩はれざるはない。またもつて清朝歴代の富饒であつたことを察するに足る。

殊にこれらの伽藍は、みな山腹に配列せられあるが故に、一字は一字より高く、一堂は一堂より聳え、結構の壯麗規模の宏大、驚嘆に價し、普通この二廟を金龍殿とよぶも宜なりである。また札薩倫布の東の獅子溝に大佛寺あり同じく乾隆帝の建立にかかり輪奐の莊美を以て知られる。更に布達拉の西には珠像寺あり、乾隆帝の實像を安置するので有名である。また熱河市街の東方、黒里河を隔てて慶鍾山の麓に伊犁廟あり、これも莊大な規模を構へ、かの二大喇嘛廟の西藏式なるに對し、純然たる伊利式を保つ。その外この伊犁廟と並列して南方にある圓形の堂宇を丸亭といひ官窯の黃瓦を掩ひ、老松に圍まれ、莊嚴を極めて熱河の一勝をなす。別に熱河西約一キロ半、北平への路上、廣仁嶺上に乾隆帝駐蹕を記念せる廣仁碑あり、その附近、美しき庭園の如く造られ且つその山腹に武王を祀る一廟宇がある。有名な双塔山は廣仁嶺の南に聳え、あたかも二基の塔が並列するかの觀をなす。

### ◎ 赤 峯

[193]

赤峯は省のほと中央に位し、熱河につぐの都會である。直隸蒙古地帯、即ち西翁牛特族の地を占め、高原的平野にあつて、アオハン、巴林、克什克騰等より産出せる羊毛、獸皮等の特産品の取引で知られる。附近の地味肥沃なるを以て農産物にも富み、冬季の商業取引は極めて盛んである。またこの地を蒙古名で烏蘭(赤)哈達(峰)ともいふが一般には哈達で知られる。赤峰とは本來、市の東北に聳える山名であつて、巖々巍々として雲表にそばたち、その



[194]

夕陽に映する時は、全く純銅色に輝き壯觀なので、この名がある。滿蒙人の頻りにこゝに出入するに至つたのは乾隆以來のことで、はじめはしばしば蒙古人から迫害を蒙つたが、多年隠忍して懐柔するうちに、相互の疎通親密を見るに至つた。最近まで蒙古人とは物々交換が行はれたが、この二十年來は元寶銀(馬蹄銀)を用ひ、次第に通貨取引をなすもの増加の傾向がある。また政治的には赤峰縣の行政府あり、漸次支那人の住民加はりつゝあれど、蒙古人は次第に北部未開の域に移り、且つ繁殖の減退を見るのは、大勢の推移であらう。殊に現今では市街地は勿論、附近の部落といへども、蒙古人は皆無の状である。たゞ市の西は西翁牛特王の邸宅あつて、少數の蒙古人が住む。しかし毎年秋の末から商業期に入ると、獸畜、獸皮、羊毛等の取引のため、多數の蒙古人が集り來る。これは一顧の價値がある。

◎ 朝 陽

熱河省の東南邊境に近く朝陽がある。古の山戎東胡の地で、戰國の燕、秦に屬し漢の始あ、匈奴の地であつた。附近に山岳多けれども、市街は平坦で邊外第一の都會である。周圍に牆壁をめぐらし、一郭をなせども嚴然たる城郭ではない。南北に小門を通じる。大街は、十字路をなし、大賈軒をつらねる。殊に宏壯な喇嘛廟あり、估順寺と稱し僧侶三百名と稱する。市内の中央に喇嘛塔巍然として聳え、もと南北中の三塔あつたが、今は中塔を缺く。市名を朝陽よりも三座塔で知られるのはその故である。人口七萬と稱する。商業上奉天省の錦州と密接し、現に近接せる北票へまで舊北寧鐵道の一支線が錦州から義州を経て通じる。附近に炭鑛多く、前硯溝、羅國張子、共に良質を以て知られる。また有名な阜新及び北票の炭鑛も市の東北にあたる。

◎ 經 綽

省の北部には赤峰から北進して烏丹城、林西、經綽がある。中にも經綽は省西、縣境の都邑で、人口二萬餘あり、交通極めて不便なる邊地の一驛で、こゝから西の方、省外の多倫諾爾、張家口に向ふ。また林西から興安山脈の南部に通じるにもこゝを過ぎる。附近は大波狀地であり、且つ細砂であるから、車輛の通過が極めて困難である。こゝは克什克騰旗下の地で牛馬貿易の一中心をなす。また附近の農産物はみなこゝに集散し、日々市を開き商業殷盛を極め、ますく有望である。この地方から林西にかけて白砂地帯を除く外、やゝ農産に適し旅行者は知らぬ間に興安嶺山脈を横斷してゐる。

◎ 開 魯 と 林 西

赤峰からすつと東へきて、國境に近く開魯がある。東西札賚特旗及び阿爾科魯沁旗の地であつて、地方貿易の中心として榮える。もとのあたりは荒蕪のため放棄されてあつたが、地味必ずしも瘠せず、年々耕作地を擴張し、近來は悉く農産地と化した。

林西は巴林旗内の地で、二三十年前はじめに縣を設けた時には、微々たるものであつたが、現在は物資の集散市場として經綽を凌いでゐる。殊に冬季間自動車の便があつて地方發達の一助をなす。巴林、烏珠穆沁地方の産物は、こゝを經るものが多い。

[195]

第八節 興 安 省

一 山 脈 と 河 川



[196]

本省の東邊を限るものは興安山脈であつて、そのうち峻峰素岳爾濟山より東北に走る連峰中の主峰を擧げれば、望章、報達、巴布、吉勒肯奇、察爾巴齊、博里克、木克珠勒、伊勒呼里等であつて末端は遂に黒龍江畔に達してゐる。本山脈は實に東西の分水嶺をなすもので、東北麓より發源する諸水は黒龍江に入り、東南麓よりするものは嫩江に注ぎ西麓よりの諸川は各西流して、また黒龍江の上流額爾古訥河に朝してゐる。

西流する諸川のうち最も大なるは海拉爾河である。呼倫地方の首府たる呼倫(土名海拉爾)の北方を西流して、滿洲里の東方に於て達賴諾爾(諾爾は湖の意)より流出する河川と合する。この地方に於ける湖沼の大なるものは、前記の達賴諾爾と貝爾諾爾である。この兩湖は阿爾順果勒(果勒は川の意)を以て連結されてゐる。

貝爾湖に注入する哈勒哈果勒は、興安山脈より發源し、水量豊富であつて海拉爾河の支流伊敏、輝の兩河と共に呼倫平野を形成し、牧草菁々、謂はゆる白音他拉(豐富たる沃野の意)として遊牧民の好適地となつてゐる。

## 二 氣 候

氣候は純然たる大陸的であつて、寒暑の差實に甚しく土地は高緯度にあるを以て、冬季長く春秋は短い。雨期と稱すべきは六、七、八月即ち酷暑の候であつて、屢々降雨はあるも終日にわたつて降ることはない。時に疾風驟然として襲來し、雹、霰、雷鳴これに伴ひ、大地暗澹たることもあり夜間には時に寒氣が殺到して、稀に家畜の凍死することさへある。雨量の多い時は凹陥地は變じて沼澤となり、交通遮断せられることもある、花卉はこの季において連續開花結實し、發育進化の速なることは一驚に値する。

また秋風一度到れば滿目荒涼となり、時に旋風があつて黃塵高く飛揚し、爲に日光は闇く人馬の進退を失ふに至る。

寒風漸く加ふるに及んでは乾燥が甚だしく地表は忽ちにして凍結する。降雪は多くないが稀には尺餘に及ぶこともある。住民は翌年三、四月の交に至るまで殆ど張幕裡に蟄居し、解氷を待つて活動するのを例とする。しかし交通運搬に従事する者は冬季氷上を走るのを便としてゐる。

## 三 交 通

交通は現在中東鐵道西部線と稱する舊名東清鐵道が、西方滿洲里より東走して呼倫を過ぎ、興安嶺を横斷してチチハルに通じてゐる以外、他に鐵道はない。

近年自動車道が敷設せられ、呼倫を起點として北方は室韋縣(土名吉拉林)に至り、西方は達賴湖の南を過ぎ、克魯偏河流域を西走して克魯偏に達してをり、西南方は甘珠廟に至り、東南方は將軍廟、罕德勒を過ぎて阿爾山嶺に終つてゐる。

普通の道路としては東方齊々哈爾に至る興安嶺山道と、南方烏珠穆沁王府を経て張家口に達するものゝほか、聯絡大路として見るべきもない。

水運に至つては河川が北流、西流、數多あるにも係らず舟楫の便をもたぬ。

## 四 都 邑

### ◎ 海 拉 爾

[197]

海拉爾はもと蒙古族の小部落であつたが、東清鐵路の開設にあたり、露人が呼倫平野の交通焦點としてこゝに大驛を建設し、新市街を劃して以來、露蒙支人の蝟集するところとなり、光緒三十一年自開商埠地となり三十四年には



[198]

呼倫府廳が設けられ、この地方の行政首都となつた。

土産貿易品は牛羊及び獸皮を主とし、商勢日に旺盛であつたが蒙古王巴布札布の亂あつてより、爾來ロシアの煽動に基く獨立運動が頻發し、市場の騷擾常なく、居住不安のため、近來商民の滿洲里に移る者が多くなつた。

西南にある壽寧寺、一名甘珠寺、俗稱趕集廟は規模宏大にして、結構壯嚴である。毎年八月大祭を舉行し南は張家口附近より、西は哈克回地方、その他蒙古各地より禮拜者が雲集し、數萬人に達する。これを機として市場が開かれ張幕數里にわたつて、一時大市街を現出する。

◎ 滿洲里

此の町は中東鐵道入境の衝にあたり、露蒙支商民の市街として西境の重鎮である。露支の税關がこゝに設けられてゐる。輸入商品としては棉花、衣服及び雜貨があり、輸出品としては皮革、麥粉等がある。

◎ 漠河

漠河は北方露領との境にあつて、産金地として知られてゐる。その鑛區は額爾古訥河石勒喀兩河の合流點を中心として、これより東西約各四七キロ、南北約二七キロにわたり、これを三區分して漠河、神仙洞、奇乾河となつてゐる。初めは露人の發見に係り、哥薩克人、支人、忽ちこゝに集團して、俄然一大部落を現出した。

光緒十三年、愛理副都統は嚴命を下して、これを驅逐し官營となして、巨利を獲得した。後ロシア兵の爲に占據せられたが再び回復して、現在は廣信公司の經營となり、毎年四十餘萬元の純利があるといふ。

五 産 業

◎ 林 産

興安山脈及び各支脈中の樹種は、多く落葉松、白樺を主要林とし、雜木混淆林相を呈してゐるが、巨大なる樹木が少く、用途は電柱、枕木、杭木その他建築材又は纖維工業材として利用且つ賞揚せられゐる。しかし運搬不便のため、その價值は少く、漸く中東鐵道沿線において利用せらるにすぎない。

露日合辦の札免公司の伐採經營は、免渡河驛北方の廣地域を占有して施行せられてゐるが、成績良好と稱することはできぬ。近年興安屯墾局が特設せられ、半官營として伐採經營中であるが、林業として成果は宜しくない。併し材積は豊富であつて、屯墾局專屬の索倫山東部の立木量は、落葉松千八百萬石、白樺二百萬石、西部は落葉松五百萬石、白樺十萬石と測定せられてゐる。鐵道が開通するならば千古斧鉞の入りぬこの密林の伐採、運搬が容易となり、同時に土地の開拓を促し、即ち一石二鳥の利を納めることが出来るであらう。

◎ 金鑛及び炭鑛

鑛業については前記の漠河金鑛のほか、室韋縣境内に克拉里、吉拉林、一間房等の金床がある。その他砂金地帯が多くあるけれど、匪賊を恐れて採取する者がない。官憲の保護を得るに至れば、採金業は勃然として振興するであらう。

[199]

石炭は滿洲里の東南方に、札賚諾爾鑛がある。露人の經營で中東鐵道より運炭支線の設備がある。炭量は豊富に品質は良好、世既に定評がある。

◎ 大湖の漁業



達賴湖及び貝爾湖は渺茫たる水面を有する大湖であつて、前者は外蒙古北方の長流たる克魯倫河の注入して成れる大湖で、古來史上にあらはれ、後者は興安嶺より發源する哈拉哈河の滯して成れる大湖である。蒙民は漁獵の方法を知らぬ故、巨大な鯉、鮫、ばう、その他有鱗無鱗諸種雜多の魚族が蕃殖して漁撈頗る容易である。貝類も亦少くない。

達賴湖は明末清初の頃から、漸次水量が低下し、沿岸干潟地を見るに至つて、やがて幾世紀か後には乾涸するが如き形勢を示したが、近代中東鐵道が敷設されて以來、出口及び下流が自然に狭められたのによつてか、却て水量増嵩の兆がある。

貝爾湖は元朝秘史に、捕魚兒海子の稱があつて、當時既に漁獲を以て名があつたやうである。

## 第九章 滿洲國産業の大觀

### 第一節 總 說

滿洲の富源を述べんとすれば先づ第一は農産物である。農産物のことを述べるに先立つて、先づ滿洲の耕地といふことを少しく述べる必要がある。滿洲の面積が八萬方里中には未開地もあるし、又熱河省の如き調査が十分でない所もあつて、的確に之を示すことが出来な。

然し此處には相當調査された範圍に於て、即ち舊東北三省に就て調べて見ると、此の東北三省に於ける總面積に對し、可耕地といふのが二九%餘りで、三千四十三萬町歩で、可耕地に對して既に耕したのが一千三百七十萬町歩で

未耕地として残つて居るのが一千六百七十三萬町歩といふ人と、つい數日前或る筋の話に依ると未耕地の一千六百七十三萬町歩といふのは、非常に滿洲の耕地といふものを過大に調査した結果であつて、實は六百萬町歩しか残つて居ないと云ふ説を立てて居る人もある位で、要するにそれは未だはつきり分らず、兎に角こんな風で既耕地と未耕地の割合が殆ど半々、未耕地が少し餘計残つて居ると云ふ實績である。此の既耕地の面積は、西曆一千九百八年を百として、其の後二十數年經つて今日百七十強になつて居るといふことである。此の既耕地の面積は、日本内地の既耕地面積に比べると、二・三倍朝鮮内地の既耕地面積に比べると約三倍強を示して居る譯である。而して既耕地面積に於て收穫することの農作物といふものは、昭和五年に於て一億五千萬石以上に上つて居る。

農作物の大宗は何と云つても大豆である。大豆の世界年産額は六千五百萬石であるが、其の内の六割、四千萬石を滿洲に於て生産するのである。其の作付面積は總耕地の三割強に當つて居て、是は滿鐵農事試驗場に於ける品種の改良と、更に耕地の擴張に依つて一層増加することと思ふ。又大豆の耕作は農作として頗る簡單であるから、益々増産すると思ふ。一般の考へから云ふと單に豆と云つて、其處に何等大したものは無い様であるが、滿洲の貿易に於ける大豆の位置といふものは、非常に大なるもので滿洲輸出貿易總額五億五千萬圓の内大豆及び製品である。豆粕、豆油を合せた三品の輸出額は全體の五十六%、即ち三億六百萬圓を示して居るのである。そうして大豆を基礎とする大豆工業は、又滿洲にある工業の第一位に推すべきものである。

滿洲にも大豆から油を取る所謂油坊工場はあるが大豆の製油といふのは、八割以上も外國の工場に掛つて居り、滿洲のものは單に大豆として輸出されて居る有様である。此の點から見て滿洲の大豆が農産物の大宗であると共に、



其の工業を滿洲に於てなさるべきである。今や滿鐵中央試験所に於て、新たな製油方法を發明され是が半工業的試験に成功してゐるから、此の工業が實現すると滿洲に於ける大豆工業界に一大エボツクを形づくると思ふ。要するに大豆といふものは日本の食糧問題にも關係し、又製油工業といふことからして、日本の軍需品問題にも關係するから、其の製産高に於て第一位であると共に、利用範圍に於ても滿洲農産物の第一位に置くべきである。

大豆に次いで生産高の多いものは高粱、是は年産三千七百萬石、作付面積は東三省の耕作面積の二割三分に當つて是又簡單に作付出来るから、支那人が澤山やつて居り、今後産額が増すべきものと思ふ。由來高粱は食糧或は燃料建築材料等に使はれて居るが、近年支那本土、日本にも相當の高を輸出する様になつたのである。又日本人の爲に米の代用食として研究されて居る。

大豆、高粱と共に滿洲の三大農作物は粟である。年産約二千八百萬石、作付面積は東三省の總耕地の一割六歩に當つてゐる。是も高粱と同様滿洲農民の主要食糧として多く使はれ、猶家畜の飼料等に使はれるが、滿洲粟の特性は朝鮮人の常食物といふことにあるので、朝鮮から日本に米の輸出が殖へるに従つて、滿洲粟が朝鮮に多く這入つて行く傾向がある。従つて粟は新しく開いた耕地に對する作物としては、適當で今後未墾地を開く場合に、相當生産額は殖へて行くと思ふ。

之に次いで生産額の多いのは玉蜀黍、滿洲では包米と稱して居るが、是が一千三百萬石、澱粉原料として近來世界に認められて來た。其の次は小麥が一千萬石、是等は製粉原料として北滿地方に作られてゐたが、豊年凶作の差別が非道いので十分なる資源たるを得られぬが、今後北滿に於ける有力なる農作物になると思ふ。

次に所謂水稻、米であるが滿洲で米作が始まつた歴史が非常に新しく、今から僅かに四十數年前、朝鮮人が鴨綠江を越へて通化の近邊で始めたのが始まりである。今日では作付面積が約九十萬反に上り、其の收穫が昭和五年概百六十萬石といふことになつてゐる。然るに滿洲に於ける水田豫定地は百萬町歩と稱して居り、又反當りの收穫も漸次増収することが出来るから、従て三千萬石の米は、滿洲に於て收穫し得ると思ふ。

次に棉花であるが、棉花は無論相當需要の原料だが、此の滿洲の地は棉花の栽培に對しては餘り適當であるといふことは云へないのである。只奉天以南殊に關東州に於ては、多少に望みがあり、是は日本内地の紡績業等を考へる場合に、此の關東州内に於て棉花を栽培するといふことも、一つの意義ある施設と考へられる。

其の他の作物としては甜菜である。それから煙草、麻類或は果物類、それらに注意を要するのであるが、今茲では一々申上げぬ。又柞蠶も滿洲農産物の一つの存在にあることに相違ない。

【203】  
第二に林産物であるが東三省全面積の三分の一は森林地帯になつてゐる。そしてその立木は百五十一億石、是は日本内地の九十億と比べると遙かに多い。其の生産木材は近年の中最も多い昭和三年に於て、五百十一萬石である。是等現在の木材事業を約言すると、針葉樹の伐採利用としては、建築材料として天津方面に輸出されるが、枕木、電柱、又支那人は御承知の様子に死骸を總て木の棺に收めるから、棺材といふ様なものに使はれてゐる。潤葉樹は杭木とか薪炭とかに利用されて居る。要するに滿洲の森林は、未だ多く斧鋸を加へざる天然林其の儘で、従つて林産資源の價値も全く將來に懸るのである。新滿洲國の發達に伴ひ、我が國に必要とする年平均千萬石の木材の不足に對して、相當なる資源と云ふことが出来るし、又木材加工としては、製紙とかバルブとか人絹とか燐寸とか云ふ方



面に、相當新天地が開けると思ふ。

第三に畜産物に就いて述べるに農産物と變つて、畜産に於ては、舊東三省よりも寧ろ蒙古が其の給源地である。蒙古は御承知の通り、未だ農業の時代に這入らず、今日猶水草を追ふて牧畜して居るといふ時代である爲に、又滿洲の農家が所謂畜類を利用するといふ農業をやつて居る爲に、どんな家でも大抵は二、三頭の牛、馬とか驢馬を飼つて居るし、又豚、鶏の如きは到るところ之を飼はない所はないのである。大體に於て蒙古では、殆ど此の家畜は放牧して居つて、又滿洲では多く露天に飼つて居るのであつて、其の飼料等も殆ど自分の家から出た廢物をその儘使つて居る。それから家畜の汚物とか糞といふものは、直ちに農作の肥料に使はれる。

要するに滿洲の農業は有畜農業であるから、畜類は農業に缺くべからざるものである。こんな風で今日直ちに此の畜類を以て畜産資源とするには未だ幾多の缺陷があるが、其の品種に相當改良を加へ管理方法に相當改善を加へるならば、可成り畜産國ともなり得ると思ふ。

第四は水産物であるが、天然資源に豊富なりと稱せられる滿洲の天地も、土地の廣い割合に海岸線が短い關係上、水産資源に就ては特筆すべきものが少いのである。

沿海漁業としては關東州を中心とするものが其の主なもので、黃海、渤海及び支那東海に廣大なる漁場がある。タイ、クラ、グチ、其の他三十餘種の魚類があつて、昭和五年に於て八百萬貫、三百四十二萬圓の漁獲高が計上されてゐる位である。

淡水漁業としては南滿洲の河川は概して水量に乏しく、僅かに鴨綠江、遼河の一部に漁場があるばかりだが、北滿

洲では松花江の本支流から數箇處の湖沼等相當水量に豊富で魚類も少くない。しかし其の漁法はすべて原始的のもので、今日特に水産物として計上すべきものがなく、一年の漁獲高も五百萬貫に足らない。

唯一つ茲に水産として注意すべきものがある。それは鹽で由來遼東半島は沿岸到る處に干潟地が多く、降雨が少く大氣乾燥し、蒸發盛んで氣象上天恵自ら備はる製鹽地である。斯う云ふ關係からして、かなり古くから鹽田の創設を見たが、日本が關東州治を始めてからそれが一層盛になつた。今日では關東州内の鹽田面積約七千町歩、製鹽高四億一千五百萬斤、關東州を除いた遼東半島の年産も之と略ぼ同量で、合計年産約十億斤と云はれて居る。是等はすべて天日製鹽で、州内だけでも鹽田の擴張完成に依つて三倍約十五億斤、製鹽法の改良に依つて五倍の原鹽約二十四億斤生産が可能と見られて居る。更に内蒙古のダブスノール湖は稀にある處の大鹽湖として有名なもので無盡藏とも稱せられる。

第五は鑛産物であるが、滿洲天然資源の最も著名なものは何と云つても石炭であり、次に擧げられるものが鐵である。更に金、マグネサイト、礬土、石灰石等あらゆるものを豐藏して居るが、茲では詳しく説くを省いて、これから項を改めて各部門により細説するつもりである。

## 第二節 農業

### 一 農業經營と耕作法

#### ◎ 自作農

自作農は自己所有の土地を自身で耕作するか又は自身監督の下に勞働者を雇備して耕作せしむる方法である。俗に



之を本地、本種或は自己見地、自己見種等と稱して居る。其の作付面積は各地一定しないが、概して大農と稱するは七、八十町歩以上、中農は四、五十町歩、小農は三十町歩内外、過小農は五、六町歩を耕作して居る。一戸の作付面積は北部地方は南方に比して廣大と七、八十町歩乃至百町歩を耕作する者が尠くない。然し關東州内にありては二、三十町歩を越ゆるものは甚だ稀である。

### ◎ 小作農

小作農は租地或は租借と云ひ、小作者を租戸、地主を地東と稱してゐる。小作者中には全耕地を小作する者もあるが、其の多くは小農家で剩餘の勞力を以て他人の土地を小作することが多い。

小作料には穀納と金納との二種あるが、金納は少數の地方と特別の場合の外は甚だ稀である。殊に奉天以北に於ては殆んど金納はないと云つてよい。小作料は種々の事情により一定し難いが、普通收穫量の一半乃至三分の一である。又小作料として納むべき作物の種類は、其の地方に於ける主要作物の一或は二又は三種で、例へば關東州内では玉蜀黍、高粱、粟の三種を均等に分納する者多く、又玉蜀黍のみを納むるものもある。奉天以北では大豆、高粱粟の三種或は大豆高粱の二種を分納するが、大豆のみを納むるを普通とする。小作の制度には次の如きものがあるイ。永小作(永租) 永小作は殆んど小作人の一定所有權に等しきもので、小作人は毎年一定の小作料を地主に納め永久に土地使用權を有する制度であつて、官地、公地、王公莊田及び蒙地等は此の制度に依つて居る。而して永小作權は子孫に相続し、又これを轉賣することも出来る。且つ又例令其の土地の地主を換へても借料の増加又は其の土地の取廻を請求せられることはない。然し原則としては官地に於ける永小作權の轉賣は許されて居ないが默認は

して居る。

ロ。普通小作(租又は例) 普通小作とは期限付の小作で、期限は主として一箇年であるが三年、四年、六年又は九年等がある。土地概して確確なる所は期限長く肥沃な地方は短い。一般民地及び旗地の小作は此の法に依つて居る

### ◎ 分益農

分益農は分育、辨育、分種、種分收等と稱して居る。豫め規定せられた率に従つて地主と小作人とが收穫物を分配するもので稍小作農に類似して居る。

分益農に二種がある。一は辨裡育或は辨内育と稱し、家屋、農具より種子、肥料、日用品、衣服、食糧に至る迄貸與し、收穫後消費したる食糧、日用品、衣服等の代價を支拂ふもので、此の場合の分配率は地主六、七分、小作人三、四分である。

他の一は辨外育と稱し家のみを支給するもので其の分配率は地主、四、五分、小作人五、六分である。分益小作の期限は一箇年を普通とし年々契約を更新する。

### ◎ 協同農

協同農とは支那人が挿具と稱するものである。二、三の農家が協同して各人所有の牛、馬、農具等を醸出して各自所有土地の耕作に協同從事するものである。此の方法は普通小農、過小農の階級に行はるゝもので、關東州内に多く奉天以北には少い。

### ◎ 請負農



[208]

請負農は牛具と稱して居る。家畜を持たぬ農家又は勞力に不足を感じて居る者或は農業者以外の耕地所有者等の耕地の耕作を請負ふものであつて、播種から收穫まで一町歩約二十元内外である。又部分的に除草、中耕等のみを請負ふこともある。

◎ 農 法

滿蒙に於ける農法を分けると大體次の四種となる。

イ。輪作農法 一般滿洲及び進歩せる蒙古農地に行はれる。關東州内は玉蜀黍を主作物とし、粟、高粱、大豆等と三年又は四年輪作を行ひ北滿地方では高粱、大豆を主作物とし粟、小麥等と三年輪作を行ふを普通とする。又更に糜子、玉蜀黍、陸稻、稗其の他作物を加へ四年輪作、五年輪作或は六年、七年輪作等を行ふことがある。

ロ。連作農法 南部地方にて土地狭少で輪作をなす餘地なき場合又低窪地にて常に濕潤なるか、鹽分多き土地にて特別の作物以外栽培し得ざる場合、又は掠奪農法の場合に行ふものである。

ハ。掠奪農法 最も原始的な農法で蒙古人が草原中肥沃な處を求めて糜子を連作し地方消耗するに至れば他の新らしき土地に移る法で未墾地の多い蒙地に行はれる。

ニ。休閑農法 土地の餘裕ある蒙地に於て支那人の行ふ農法で東部內蒙古南部地方に多く行はれる。之には規則正しきものと不規則のものがある。

◎ 整 地

耕耘の方法に耕地、豁地、翻地の三種がある。共に牛、馬、ラバ等に犁を曳して土地を耕起、膨軟とする。前二者

は全面を平坦となし畦を立てぬが翻地は畦と溝とを耕鋤しながら作成する方法である。耕地、豁地は翻地に比して集約なる方法で前年の休閑地及び蔬菜地等に行ふ方法である。而して是等の耕鋤の時期は普通四、五月頃で播種前一回多きは二回之を行ふが北部地方では一回である。

◎ 肥 料

肥料中最も主要なのは土糞である。即ち牛馬糞、豚糞、羊糞、狗糞、鶏糞等の家畜糞或は人糞等と肥土とを混じたものである。其の他大豆粕、胡麻油粕、黑豆、荏の炒り粕、猪血(豚の血)坑土糞、池沼或は溝内の底土等の種類もあるが土糞を主體とすることは勿論である。施肥は土地の開墾後の年數、土地の肥瘠、肥料獲得の難易等により異なるが、普通隔年或は三年に一回充分に施肥するを常とする。

◎ 播 種

普通條播で點播之に亞ぎ撒播は特殊なものに應用される。條播に使用する農具を點葫蘆と云ひ、粟、高粱、糜子、稷子等を播種するに用ゐる。滿洲の氣候は乾燥するので播種後必ず圃上を鎮壓する。即ち昆子又は滾子と稱する石製又は木製のローラーを馬、騾、驢等に曳かして鎮壓するが普通である。

◎ 管 理

除草は一般に丁寧で殊に高粱畑には一層丁寧に行ふ。除草器は「ホー」に似た鋤頭と稱するものを使用する。而して其の回数には作物の種類、生育期間の長短其の他の事情により差異はあるが、概して大、小麥は一回、多きものは二回、大豆は普通二回、其の他の作物は一般に三回除草が多い。唯高粱のみは往々四回に及ぶことがある。

[209]



(210)

開引は高粱、玉蜀黍、蔬菜類等に行ふのみで第一回及び第二回除草の際同時に鋤を以て之を行ふ。

中耕と除草とは同時に行はるゝもので中耕回数は除草回数と殆んど一致し普通除草の直後に中耕を行ふのである。

◎ 收穫

收穫の方法は高粱、玉蜀黍の如く丈高きものは鎌を以て根本二、三寸乃至五、六寸の處より刈り二、三十本を一束とし之を高梁又は玉蜀黍程二、三本でしばる。此の束を捆と云ふ。捆は二十内外を一纏として穂を上互に立てかけて乾燥する。十数日を経て十分乾燥したものを高粱は穂首三、四寸を残して切り、玉蜀黍は苞の儘振ぎ取つて脱穀場に運ぶ。粟、大豆、糜子、陸稻の如き丈低き種類は刈取るか又は根より抜き取りて徑七、八寸乃至一尺の束となし約十束内外を一纏として互に立てかけて乾燥せしめ一週間乃至十日を経て十分乾燥するを待ち脱穀場に運び、屋根形又は圓筒形等に推積する。

高粱、大豆、粟其の他作物は脱穀場に携げ、馬、騾等に石製滾子を曳かして脱粒する。又麥類、粟、糜子、陸稻は石等に打ち付け若くは連枷を以て脱粒することもある。

脱粒を終つた穀物は風選調製後直に市場に出すこともあるが多くは貯蔵する。貯蔵の方法は屋内に貯蔵するもの、戸外に圓と稱するものを造り其の内に貯蔵するもの、特に倉子或は土壁子と稱する一種の倉を造り之に貯蔵するもの三種がある。

二 重要農作物

◎ 大豆

滿洲産大豆は大別して黄豆、青豆、黑豆となすが猶數多の品種に分類することが出来る。最も普通なるは黄豆で又一名元豆とも云ひ含油量多く食用、搾油用何れにも可である。滿洲大豆は今日に於ては世界的の農産物として有名であるが従前は地方農家の食用、家畜の飼料竝に搾油の原料に用ゐられたもので其の油は農家の食用、燈用、減磨油用となり、粕は副産物として馬糞に供せられて居たものである。

然るに較近粕を肥料として日本内地の需要を喚起すると同時に豆油は工業原料として歐米輸出を見るに至り、爾來大豆搾油工業は驚くべき發達をなし滿洲經濟界の大宗となるに至つた。滿洲大豆の最近推定生産額(昭和五年度)四千萬石の内千七百萬石内外即ち其の半が滿洲に於て油房原料に消費せられ一千二百萬石内外が大豆の儘輸出せられ殘餘の一千萬石内外が地方農家の食糧其の他に消費せられて居るのである。大豆としての輸移出額一千二百萬石内外の重なる仕向先は日本、支那本土、歐州諸國及び瓜哇である。滿洲大豆の生産額は今後益々増加すべく特に北滿松花江流域の開拓に伴ひ激増を見るべきものである。

◎ 高粱

高粱は又高粮、紅粮等と稱し蜀黍の俗語である。滿洲に於ける農民の主要食料品、家畜の飼料たる外高粱酒の醸造原料として重用せられ、又綠豆との混用として粉條子(豆素麵)の原料にも用ゐられる。稈は燃料、建築材料、アンペラ原料等として缺くべからざるものである。

(211) 高粱の生産額は三千七百萬石内外と推定せられて居るが其の内近時支那本土及び日本内地に輸移出せられる量が漸次増加の傾向を示して居る。即ち最近の移輸出年額は年により異なるが百萬石乃至四百萬石に上り大半は支那本土向



で食糧、醸造用、飼料用に用ゐられて居る。將來日本に於ける代用米、醸造原料、澱粉原料等として益々需要を喚起するに至るであろう。

◎ 粟

粟は支那名を穀子又は谷子と稱し、精白せるものを小米と稱する。高粱と共に重要な食料品である。又黄酒の原料ともなり稗は重要な飼料として用ゐられる。粟の生産額は二千八百萬石内外と推定せられて居るが、其の内近時朝鮮向輸出が漸次増加し其の年額百七十萬石價額二千三百三十萬圓に及んで居る。朝鮮に於ては主に食料に用ゐられるもので之は朝鮮米の内地移出の増加に伴ひ、其の代用となるものである。斯くて滿洲粟は日本の食糧問題の解決上間接に重要な役割をつとめて居るのである。

◎ 玉蜀黍

支那名は包米である。南滿の南部を主産地とし南滿北部及び北滿は栽培が比較的少い。高粱、粟に亞ぐ重要な食料品で南滿に於ては主に之を粉末として食料に供し、北滿では酒の醸造原料にも用ゐられる。此の外綠豆と混用して粉條子の原料とすることもある。莖は燃料とし葉は家畜飼料に供する。玉蜀黍の生産高は一千二百餘萬石と推定せられ昭和五年度には約四十九萬九千石が輸出せられてゐる。其中主なる仕向地は支那本土で日本内地が之に亞いでゐる。

◎ 小 麥

小麥は南滿よりも寧ろ北滿に適するもので従つて南滿にありては其の作付面積も少く又生産額も少い。東支鐵道沿

線の北滿一帯に於ては小麥は主要物産の首位を占め南滿洲の大豆と匹敵すべきものとされてゐる。小麥の生産額は一千萬石内外と推定せられ其の大半は製粉原料として消費せられてゐる。而して滿洲各地方到る處に磨坊と稱する舊式の副業的製粉工場が存してゐるが哈爾濱を中心とし東支沿線並に南滿沿線主要都市には大規模の新式製粉工場があつて大豆搾油工業に亞ぐ一大工業をなしてゐる。

◎ 陸 稻

支那名は梗子又は早稻である。品質は不良の部に屬するが早生でよく滿洲の風土に適する。現在の産額は百八十萬石内外と推測せられてゐるが、産額増加の趨勢を示しつゝある。

◎ 水 稻

滿洲に於ける水稻栽培の歴史は極めて新らしく僅かに四、五十年來のことに屬し今日の隆盛を見るに至つたのは近來のことで滿洲の氣候、地形、土質等より考慮して滿洲の水田事業は甚だ有望で將來大いに勃興し得べき可能性を有する。現在の水田面積約十萬町歩、收量(粃)百六十萬石と推定せられてゐるが將來之を百萬町歩、三千萬石程度に上すことは困難でないと思はれる。而して滿蒙水田開發の如何は將來本邦食糧問題に重大な關係をもつもので滿蒙農業資源の開發上緊急な當面問題である。目下水田の多い地方としては長春、奉天、撫順、安東、開原、松樹海城、營口、北滿海林附近、間島等の各地方を擧ぐべきも遼河、松花江、牡丹江、穆稜河、嫩江、鴨綠江、太子河、渾河の各流域には將來開田可能の地域が極めて廣大である。

◎ 其 他



〔214〕 以上の外普通作物には小豆、綠豆、黍(糜子)稗(稗子)蕎麥、工豆(工)菜豆(蠶豆)粳米豆(菜豆の一品種)等がある。次に右記各種主要農作物の生産額に就ては固より信憑すべき統計なきを以て確數を得難いが、最近の滿洲産業統計に據れば左表の如くである。

滿洲農作物作付面積及び收量 (昭和五年日本單位)

作物	奉天省		吉林省		計
	作付歩合 反當收量	作付面積 收量	作付歩合 反當收量	作付面積 收量	
大豆	20.0%	910,000 萬石	35.3%	1,020,000 萬石	1,816,000 萬石
其他豆類	3.4%	740,000 萬石	2.4%	750,000 萬石	1,490,000 萬石
高粱	32.4%	1,270,000 萬石	18.5%	1,210,000 萬石	2,480,000 萬石
粟	12.2%	1,320,000 萬石	18.6%	1,280,000 萬石	2,600,000 萬石
玉蜀黍	10.0%	1,420,000 萬石	4.7%	1,350,000 萬石	2,770,000 萬石
小麥	2.0%	730,000 萬石	0.5%	730,000 萬石	1,460,000 萬石
水稻	1.0%	600,000 萬石	0.9%	1,500,000 萬石	2,100,000 萬石
陸稻	1.0%	1,500,000 萬石	0.9%	1,840,000 萬石	3,340,000 萬石
其他雜穀	8.6%	1,860,000 萬石	6.7%	1,630,000 萬石	3,490,000 萬石
計	90.6%	4,535,634 萬石	98.5%	11,140,498 萬石	15,676,132 萬石

〔215〕

作物	黑龍江省		計
	作付歩合 反當收量	作付面積 收量	
大豆	35.4%	970,000 萬石	1,340,000 萬石
其他豆類	1.8%	590,000 萬石	740,000 萬石
高粱	13.1%	1,070,000 萬石	5,450,000 萬石
粟	17.4%	1,180,000 萬石	8,060,000 萬石
玉蜀黍	3.6%	1,220,000 萬石	1,770,000 萬石
小麥	19.5%	740,000 萬石	5,640,000 萬石
水稻	—	—	70,000 萬石
陸稻	0.2%	140,000 萬石	140,000 萬石
其他雜穀	8.4%	1,330,000 萬石	4,380,000 萬石
計	99.4%	1,020,000 萬石	38,883,937 萬石

◎ 大麻

計	99.4%	1,020,000 萬石	38,883,937 萬石	95,800 萬石	1,140,000 萬石	1,399,152,337 萬石
---	-------	--------------	---------------	-----------	--------------	------------------



[216]

支那名は線麻である。其の種實は小麻子と稱し製油原料に供せられる。線麻の纖維は網、繩、布の類を製し、其の屑は製紙原料となる。滿洲に於ける纖維を目的とする線麻の有名なる産地は奉天、吉林兩省の東方山地帯とし子實を目的とする線麻の栽培は概して平原地帯に多く其の主産地としては奉天省東山地方の各河流域、遼西地方伊通河流域地方、拉林河流域地方とする。

◎ 青 麻

我が國の商麻である。滿洲到る處に産すれども低濕の地方に發育良好で東三省にては遼陽、錦州、牛莊の諸地方を名産地とし草丈七、八尺より時に一丈二、三尺にも及ぶ。主として網、繩、布の製造に用ゐる最近は輸入黄麻の代用として之を混用し麻袋の製造に用ゐらるゝ量が増加しつゝある。

◎ 苧 麻

滿洲にては大麻子と云ふ。滿蒙に於ける主要生産地は遼源、通遼、洮南及び彰武等の各縣で之等地方にては主要農作物の一として栽培せらるゝも其他の地方に於ては概して餘剰の土地、道路側等に栽培する。此の種子より苧麻子油(大麻子油)を搾取する。

◎ 荏

支那名は蘇子である。滿洲に於ては其の栽培が餘り盛んでないが到る處多少の作付をなさるはなし。農家は苧麻と同じく主作物を家畜の喰害より防ぐ爲耕地の路傍に添うて栽培しこれを自家用に供する。

◎ 煙 草

煙草は於又は煙草と云ふ。最も有名なる産地は吉林省の南部及び東部であるが奉天省の北部及東部にも相當栽培せられる。年額吉林省五百萬貫、奉天省五百五十萬貫、其他を合し總計七百八十萬貫と稱せられてゐる。一般に土産煙は品質劣等で其の需要が漸次減少しつゝある。最近滿鐵の鳳凰城煙草試作場に於ける試験の結果、米國種黄色煙草の有利有望なることが知悉せられ、安奉線鳳凰城附近、本線瓦房店、鞍山附近に於て年額十五、六萬貫の黄色煙が出来るやうになり年々急激な勢ひで發達しつゝある。

◎ 棉 花

滿洲にありてはその氣候土質より見て奉天以南は大部分棉花の栽培に適し現に遼陽縣、海城縣、義縣、錦縣其他各縣に相當栽培せられてゐる。現在滿洲に栽培せられてゐる在來棉は約四、五品種を數へるが、其の大部分は纖維太く彈力強く中入綿、蒲團綿其他家内消費としての需要を充してゐるが、中には四十番手迄紡出出来る良品種もあり、近年在滿日支紡績會社に消費せらるゝもの亦尠くない。尙關東州にては米棉試作の結果好成绩を得且つ内地紡績會社滿洲進出に際會し州内に米棉栽培を奨励するに決し、曩に棉花協會を創設以來大々的に米棉作付の擴張に著手してゐる。

◎ 甜 菜

[217]

甜菜は十數年前から北滿には露西亞人の手によつて栽培せられてゐたが、滿鐵公主嶺農事試験場の試験により南滿にもその栽培が好適であることが立證せられたのでその奨励普及を圖つた結果、會ては奉天、鐵嶺に在りし南滿洲製糖株式會社工場の製糖原料を供給し得るに至つたのであるが、その後同會社の事業振はざるに至つた結果、昨今



[218]

では甜菜栽培もその跡を絶つて居るが、製糖事業の復興と共に興るべき有望なる作物の一である。  
其の他特用作物には藍、胡麻(芝麻)、落花生、馬鈴薯(土豆子)、瓜子(西瓜の種實)等がある。

◎ 果 實

滿洲の氣候状態を果樹栽培上より観る時は、奉天以北は經濟的果樹園經營地としては適地と云ひ難いが、奉天以南にありては日本、朝鮮等の果樹栽培地に比すれば寧ろ良好なる氣象状態にあり又土質も好適してゐる。故に近年熊岳城以南にありては日支人を通じて果樹園經濟者が頗る増加し、將來果實の一大生産地たらんとしつゝある。

昭和四年度に於ける滿洲の果樹園面積は約四千五百餘町歩で、收穫高百七十萬貫餘である。而して其の中最も栽培面積の廣いのは苹果で三千五百町歩次は梨の三百町歩、他は葡萄、桃櫻、桃その他の果實である。即ち滿洲に於ける果樹栽培は苹果を以て第一位とし、又將來最も有望なるものである。滿洲に於ける有望なる苹果の品種を擧ぐれば紅玉、國光を始め初日の出、翠玉、祥玉、祀、旭等である。

◎ 家 蠶

從來滿洲各地の農家には稀に養蠶を試みる者もあつたが、眞の意味に於ける養蠶業なるものは存在しなかつた。然るに近年滿鐵熊岳城農事試驗場及び關東廳蠶業試驗場の試験の結果、滿洲の養蠶業が有望なることが立證せられて以來漸次勃興の機運に至つた。即ち滿洲の氣候は大氣が乾燥し晝夜温度の差が大なるを以て蠶質は強健となり、内地の如き病害の患が少なく蠶體が緊り強健なる發育をなし得る事及び桑樹の發育期たる七月頃の降雨は桑樹の發育を良好ならしむる事、暴風雨比較的少き事等は日本、朝鮮等の追従出來ぬ長所である。加之生産費が極めて低廉で

日本内地に比し約半額以内で足りる。桑の發育状態より觀たる滿洲の養蠶回数奉天以南の地にありては春一回、夏一回、秋一回、計四回の育蠶、奉天以北にありては夏蠶一回、秋蠶一回、計三回の育蠶は可能である。

滿洲に於ける養蠶業は前述の如く未だ副業の域にも達しないが、關東州内に於ては關東廳獎勵の結果近年農家の副業として有利なるものゝ一となり其の産繭額は昭和五年春、夏、秋蠶合計一千石餘の産額を見るに至つた。

◎ 柞 蠶

滿洲の柞蠶飼育は約百年以前に起り近年に至つて柞蠶繭は滿洲物産中重要なるものゝ一となつた。而して柞蠶繭産地は奉天省遼河以東で遼東半島を最とし其の著名なる産地は蓋平、岫巖、寬甸、安東の各縣であつて鳳凰城、海城、莊河の各縣が之に亞ぐ、その他遼陽、鐵嶺、昌圖、復州、本溪、懷仁、通化、臨江、輯安、興京、海龍、東豐、西豊等の各縣何れも多少の産がある。滿洲に於ける柞蠶繭の生産額は統計の據るべきものがないが、奉天省における柞蠶繭總産額は平均約二十三萬籠(七十六億粒)、一千百萬圓内外で内安東附近は約七萬籠、三百三十萬圓内外の生産と稱せらる。

以 上

三 大豆と其の工業に就て

滿洲の輸移出品中大豆が斷然優越な地位を占めて居ることは前述せる所であるが滿洲に産する農作物としては大豆の外に高粱、粟、玉蜀黍、小麥等があり、其の生産も相當に多い。併し之等はその大部分が滿洲内在住民の食料として消化されつゝあることは、日本に於て農作物の大宗たる米が大部分國內食料として消費されて居るのと同様である。従つて其輸移出高は大豆に比すれば甚だしく僅少である。試みに大豆以外の穀類、豆類及び種子類一切の最近

[219]



三箇年平均輸出高を見るに、合計百四萬餘噸、六千七百十六萬海關兩であつて、之を大豆及び其の製品の輸出價格二億三千四百八萬兩に比すれば、僅々二割九分に當るに過ぎない。然るに茲に注目を要することは、此滿洲産大豆は油房以外の用途に仕向られるものは割合に少く、世界に於ける油房用原料大豆の殆んど全部は滿洲産大豆であると云ふことである。試みに大正二年以降滿洲大豆出廻總高に對する各地油房消費高の割合を推算するに、次表に示すが如く、滿洲・日本及び歐洲の各油房に消費される大豆は、出廻總高八、九割を占むる有様である。尤も昭和五年度は同表に依れば一見油房の消費高は減少して居るが之れ同年度に於て所謂官銀號系買占大豆の賣惜しみ等に起因し、滿洲の各沿線に年度末在荷多く、其の數量四十餘萬噸に及び例年在荷よりも二十四、五萬噸の持越増となつた爲めである。即ち同年度殊更に油房以外の消費が増加した爲めでは無し。

大豆の生産は滿洲と限らず日本内地、朝鮮乃至南支那方面にも可成り多く生産されつゝあるが、油房の原料用には殆んど滿洲産大豆のみが使用されて居る。其の理由は其儘食用に供されるもの乃至豆腐用等に使用されるものは、其の品質の如何に左右されること比較的に多く、爲めに比較的良好なる日本乃至朝鮮産大豆等が斯る用途に消費され、滿洲大豆は上述の如き上等品程歓迎されぬ傾きがある爲めである。尙之に加ふるに油房以外の需要には自ら一定限度があり一時に其數量を増加せしめ難き事情あるに反し、油房原料用大豆には右の如き品質上の制限多からず而も其需要地域極めて廣汎なる爲めに外ならない。

大正二年以降滿洲大豆出廻總高對各地油房消費高對照表 (單位噸)

年 度	出 廻 總 高		各地油房消費高		差	
	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合
大正二年	一、三〇五、四〇九	一〇〇	一、一〇二、八一二	八四	二〇二、五九七	一六
同 五年	一、六八七、七四八	一〇〇	一、五三五、七七九	九一	一五一、九六九	九
同 八年	一、八八八、五二三	一〇〇	一、七一九、六二三	九一	一六八、九〇〇	九
同 十一年	三、一九二、九三五	一〇〇	二、七〇五、八〇九	八五	四八七、一二六	一五
同 十四年	三、六四四、八五三	一〇〇	三、〇八九、八二五	八五	五五五、〇二八	一五
昭和三年	四、二一一、三九七	一〇〇	三、五六〇、二九三	八五	六五一、一〇四	一五
同 四年	三、八八七、八三二	一〇〇	三、二八二、七九四	八四	六〇五、〇三八	一六
同 五年	四、五三三、三三一	一〇〇	三、五五九、五〇〇	七九	▲七二七、〇九六	一六
					▲二四六、七三五	一五

備考(イ)▲印は滿洲各地に於ける年度末持越在荷對前年増加高、記事参照  
(ロ)本表以下各表年度は其年十月から翌年一月に至る出廻年度

滿洲大豆を以て生産された豆粕及豆油は如何なる方面に消化されて居るかを見るに次表に示すが如くである。

昭和五年度豆粕及豆油需要高地方別推算表 (單位噸)

豆 粕 豆 油



[222]

東支那	日本	南洋	歐洲	米國	合計
一、五三六、六三三	四〇一、九〇〇	二七三	一、二四三、七六九	一九、五七七	三、二〇二、一五二
四八	一二	〇	三九	一	一〇〇
四六、三九四	一〇五、七五〇	二八	三〇一、七九四	四、四一九	四五八、三八五
一〇	二三	〇	六六	一	一〇〇
合計	一、九三八、八〇六	六〇	一五二、一七二	三〇六、二一三	六七

昭和五年度に於ける豆粕は日本四割八分、歐洲三割九分、支那一割二分、米國一分と云ふ割合であり、又豆油は歐洲六割六分、支那一割三分、日本一割、米國一分と云ふ割合となつて居る。而して豆油は勿論豆粕と雖も日本及支那の外歐洲の需要が相當に多量に上つて居る。併し此豆粕及豆油に對する歐洲の需要増進は近年のことで、其の増加が著明になつたのは大正十二、三年以後である。之れに反し東洋の需要は其頃以後餘り發展の跡が無く、依つて近年に於ける滿洲大豆の需要増加は歐洲の需要増進に負ふ所大なりと云はなければならぬ。

尙ほ大豆の製品たる豆粕及豆油は東洋でも歐米でも多量に需要せられ、殊に近年歐洲の需要が甚だしく増加したこ

とは上述の如くである。而して茲に留意すべきことは夫れが歐洲各國の食料問題解決上に重大なる役割を演じて居ること、殊に英國、佛國、獨逸、丁抹、和蘭、伊太利乃至瑞典の如く人口稠密文化の程度高き地方にあつては、近來各種食糧品の不足甚だしく、之等の地方は穀類、肉類、油類等を其儘他國から輸入する外、食用油類の原料用として又肉類の資源たる家畜の飼料用として、世界各方面に於ける油脂乃至豆粕を原料の儘又は製品として輸入し、其不足を補つて居ることである。即ち滿洲大豆及其製品に對する此方面の需要増加もその補ひの爲めに外ならない。併し歐洲が現在需要しつゝある各種の油脂及豆粕の總數量は莫大なるものであるが、豆粕及豆油の需要は未だその内の一小部分に過ぎない。試みに前記歐洲主要七箇國に於ける各種油脂及豆粕の原料及製品としての入超高(原料は製品に換算し)を見るに、次表に明かなるが如く、油脂は昭和五年に於て三百八萬餘噸、豆粕は五百三十二萬餘噸、その内豆油は二十三萬餘噸にして全體の八分、豆粕は百七萬餘噸にして全體の二割に當つて居る。

歐洲主要七箇國に於ける油脂入超高品種別表 (單位噸)

品 種	昭和元年	同 二 年	同 三 年	同 四 年	同 五 年
椰子油	四三、八五〇	一四	三六、八一	二三	三九、〇六三
椰子油	一八、一八	七	一七、九七	七	一七、二七
椰子油	一三〇、〇三〇	五	一〇九、八二	四	一一〇、八七
椰子油	二、六五二	一	九、八五	一	一八、九二
椰子油	四三、八五〇	一四	三六、八一	二三	三九、〇六三
椰子油	一八、一八	七	一七、九七	七	一七、二七
椰子油	一三〇、〇三〇	五	一〇九、八二	四	一一〇、八七
椰子油	二、六五二	一	九、八五	一	一八、九二

[223]



落花生油	四六、六九一	一七	四三、五七三	一五	五八二、四七四	一九	六八、七九八	一九	五七、四七	一九
物菜種油	三五、六五五	一	四〇、四六六	一	三三、二五	一	三、七四	一	一八、五〇	一
亞麻仁油	三三、三五五	二	三七、九三	一四	四〇九、八八〇	二	三三、四四〇	一〇	二六、九五四	八
棉實油	一五、七三二	四	一二、三五九	四	一一五、〇〇七	四	一一〇、二八八	三	一〇九、七六一	三
大豆油	一四、九六六	五	一六、四九二	七	二二、八六八	七	三六、四四	七	三六、九六一	八
其他油	三七、一七二	一	三三、〇六六	一	四六、一九三	一	七、一〇三	二	四、九六六	一
計	一、八六六、一八九	七	一、八五四、二九三	六	二、一〇一、三四二	六	二、一三三、八五一	六	一、九五四、二五二	六
獸油	マールガリン・オ レオ其他を含む	七	七四、七〇六	二	七五、二〇二	二	七五、一四一	三	七五、一四五	二
魚油	鯨油を含む	一七	三、三三	六	三〇、八四七	八	二六〇、八六	九	三三〇、〇一〇	一〇
合計	二、七七八、二四〇	一〇〇	二、七九二、三三二	一〇〇	三、〇七三、六六一	一〇〇	三、二七、〇三六	一〇〇	三、〇八七、五七	一〇〇

備考 本表並大表資料は倫敦フランク・フェール社商況年報に據る。

歐洲主要七箇國に於ける豆粕入超高對其他粕入超高比較表

品 種	昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年
豆 粕	五八、二七二	八九、九七四	一五一、三七、九五	二〇一、四九、四六	三三、一〇六、六四
數	量割合	數	量割合	數	量割合

尙ほ茲に注目すべきことは、歐洲方面のみでなく、米國の如く人口の稠密度合未だ多からず大農業國として一般に認識されつゝある地方に於ても、油脂は既に不足の状態にあると云ふことである。其入超高を見るに次表に示すが、如く昭和五年に於ては合せて四三萬噸となつて居る。尤も同國の獸油及棉實油の二種は今尙出超となつて居るが、右二種以外の他油入超高は夫れ以上に上るを以て合計に於ても尙右の如く入超となる。

米國に於ける油脂入出超高品種別表 (單位噸)

品 種	大正十四年	昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年
其 他	四、六〇、七〇一	八、九四、七三三	八、五四、七七七	八、〇四、八九〇	七、七四、二四九	八、〇
計	五、一九三、九九	一〇〇、五、五三三	七九、七九六	一〇〇、六、〇〇四	五五、二	一〇〇、五、三三五
椰子油	二五、四七	二九、三七三	二五、二六六	二六、四、三七	三三、三三四	三〇、三、五九八
棕櫚核油	三三、九二八	三四、〇八二	一九、五九五	二四、四九九	三三、七七七	一三、一八三
棕櫚油	六、二五五	六、九七六	七、六八六	七、八九二	一一、〇〇七	一三、〇、六七七
胡麻油	—	—	—	—	—	—
落花生油	一四、二四	一〇、五〇五	七、四七七	一二、六五九	五、七七九	七、八二三
物菜種油	五、七九〇	九、四三六	八、六六〇	七、六七二	八、六六一	七、一七七
亞麻仁油	一三、一三	一七、八六八	一六、五九二	一三、四四	一八、六五一	九、八三七



棉實油	◎ 三、一〇九	◎ 一三、七三三	◎ 三〇、〇〇〇	◎ 三三、四五〇	◎ 一一、八八八	◎ 二二、八三三
大豆油	八、六三三	一三、二四五	四、三〇四	二、七七八	五、三三七	一、五三七
其他油	一三五、八三〇	一三六、四五一	一四〇、六八八	一四〇、三〇八	一八〇、〇四六	一八一、〇七七
計	五五五、九四八	六六一、二三三	六三〇、五八八	六四〇、〇九七	八六四、六六四	七一九、二二六
獸油 （マーガリン・オレオ其他を含む）	◎ 四六、二一五	◎ 四二六、九五五	◎ 四〇一、六六五	◎ 四一一、〇三七	◎ 四四〇、二六八	◎ 三六六、五五五
魚油 鯨油を含む	一一、七三三	二二、六五九	三五、七八八	五九、九九〇	六〇、二五五	六八、二〇八
合 計	一六〇、五四六	二六五、九二七	二六四、六三二	二八九、〇五〇	四八四、五三一	四三〇、八八九

備考 ◎印は出超、其他は入超

油脂に就ては前記の如くであるが、同國の油粕入超高に就ては統計不備の爲め其系数不明である。併し同國油粕原料の入超高が同年六十八萬餘噸なるを以て、之に依り輸入粕を換算せば三十八萬餘噸となる。従つて同國油粕の全需要高も可成りの數に上つて居ることは推定される。尤も同國に於ける豆油及豆粕の需要高は、同國各種の油脂、油粕總需要高に比し甚だしく、同年の豆油は一千五百餘噸、豆粕は一萬餘噸に過ぎない。之れ同國が特に大豆及其製品の輸入を防止し、自己の勢力圏たる南米、布哇、馬呢刺等に産する他の油脂原料乃至其製品等を保護すべき關稅政策を以てしつゝある爲めである。此事は此政策の採用前にあつては大豆及其製品は現在以上相當多量に需要された點から見ても明かである。

歐米諸國が油脂及油粕に對し甚だしく供給不足の状態にあり、近年に於ける大豆需要の増進は其不足を補充する爲めであるが、其需要量は各種油脂及油粕の總需要高に比すれば未だ甚だしく僅少で、之れに就ては前に之を述べた併し元來之等油脂及び油粕は夫れが植物性たると動物性たるとを問はず其化學的構造は極めて類似點多きものなる爲め、近年に於ける製造乃至配合技術の進歩と相俟つて、或種の油脂乃至油粕が割高なる場合に於ては、之れを他種の油脂乃至油粕を以て比較的容易に代替し得られるに至つた。従つて大豆及其製品は此後に於ても他の競争品たる椰子實、亞麻仁、落花生乃至其製品等に比し割安にさへ供給され得るに於ては、其販路は殆んど無限に擴大せしあ得る筈である。此點に關しては滿洲には尙廣大なる未開墾地あり、而も低廉比類なき勞力の供給もあるに依り、今後に於ける統制乃至指導の如何に依つては其値段を現在以下に低下させることは必しも難事ならざるべく、其需要の前途には尙洋々たるものがあると云び得るであらう。

上述せる所は歐米の状況であるが、東洋の需要と雖も亦必しも悲觀を要せぬものがある。現在東洋に於ては豆油は多く食用に供され、豆粕は多く肥料用となつて居るが、豆油に就いては油脂に對して嗜好力特に大なる支那人の需要あるを以て、其需要は現在の状態を以てしてを次第に増大するに到るべきは容易に期待し得られる。此外東洋に於ても歐洲に於けるが如く、今後豆油に對する加工業が發達し、之れに依つて安價なる人造獸脂等が生産され得るに至れば、現在支那に於て多量に需要されつゝある牛脂、豚脂等の供給範圍にも進出し得るに至るべく、其需要量は尙一層累増するに至るであらう。次は豆粕であるが、肥料用としての豆粕の需要は近年に於ける化學肥料の發展に伴ひ硫酸の如き之れと同種の窒素肥料が甚だしく割安に供給されるに及び、前途樂觀を許さない事となつた。併



し之れとても豆粕は有機質肥料にして、硫酸の如き無機質の肥料は肥效上に尙幾分の缺陷ある模様あり、豆粕は硫酸等に比し割高なるに尙現在相當に肥料用として歓迎されつゝあるを顧れば、此方面の需要も今後一時に激減を來す如き懼れはあるまい。加之豆粕は歐米と同様夫れが家畜の飼料として有效なることが次第に認識され、養鶏乃至養豚飼料等に其需要漸次増加の狀勢にある。尙茲に特筆を要することは此豆粕が東洋各地に於て極めて需要大なる醬油及味噌の原料に使用されるに至り、其使用量が年々累増しつゝあることである。元來大豆が醬油の原料に使用されつゝあるは、大豆中に含まれる脂肪分が必要を爲めでは無く、主として其中の蛋白質が必要を爲めなるに依り大豆中の脂肪分は其製品たる醬油中には含まれず、之れは製造に當り残渣の一部として取出されつゝあるものである。従つて大豆の中から其脂肪分たる豆油を分離した残りの豆粕を大豆の代りに醬油の原料に使用しても、製品の品質には何等の影響を及ぼさない。即ち此醬油原料用としての豆粕の使用増加は、此原理が一般醸造業者間に諒解され大豆よりも値段遙かに安き豆粕を使用する方が採算上有利なりと認識する事を必要とする。味噌の原料用としての需要増加も亦略々此醬油と同様な理由に依るもので、斯る方面への豆粕の用途は次第に擴大し來らんとして居る。

然して大豆は滿洲に於ける唯一無二の大産物であり、而も其製品たる豆粕及豆油は東洋は勿論歐米に對する食料問題の解決上にも極めて重大なる地位を獲得しつゝある。而して茲に重要な問題は此大豆が日本の勢力圏内たる日本乃至南滿洲地方に於て加工されず、他の地方に於て爲されるものが甚だ多いことである。大正二年以降に於ける各地油房の大豆消費高を見るに次表に示すが如くである。

大正二年以降油房原料大豆推定消費高地方別表 (單位地)

年度	日本油房		南滿油房		北滿油房		歐米油房		計	
	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數		
大正二年	101,772	9	76,833	67	14,091	1	27,255	23	1,101,812	100
同五年	284,819	19	1,103,507	72	27,150	5	69,333	4	1,555,799	100
同八年	293,999	17	1,393,311	71	95,445	6	101,166	6	1,779,633	100
同十一年	293,508	21	1,788,799	64	283,499	10	400,153	15	2,765,809	100
同十四年	321,957	10	1,682,968	55	477,007	13	677,893	23	3,089,855	100
昭和三年	334,993	9	990,033	27	552,955	15	1,779,973	49	3,550,293	100
同四年	334,993	10	1,042,550	33	604,755	18	1,310,456	40	3,282,794	100
同五年	334,993	9	1,250,445	35	531,610	15	1,453,432	41	3,559,500	100

備考 (イ) ▲印は不明に付推算  
(ロ) 南支那地方油房の消費も多少ある見込なるも不明付省略、但し大勢には影響なき見込。

[229] 日本及南滿洲の消費高は、歐洲大戰の前年たる大正二年には全消費高の七割六分(日本九分、南滿六割七分)を占めて居たが、大戰當時に至つては尙一層多く、大正五年度の如きは九割一分に及ぶ有様であつた。然るに其後北滿及



【230】

歐洲油房の發展目覚しく、之れが爲めに日本及び南滿兩地方の油房は次第に壓迫され、其消費割合は減退し、昭和五年度に於ては日本油房九分、南滿油房三割五分、計四割四分を占むるに過ぎぬ状態となつた。而も茲に尙留意すべきことは、右南滿油房と雖も其多くは支那人經營に係る油房であつて、現在南滿各地に於ける作業中の油房百數十軒の内日本人の經營に係るものは大連の三泰、日清、三菱及び豐年油房、安東の陞記油房及び長春の滿洲製油工場の六油房位に過ぎず、其大豆消費量も亦多くない事である。昭和五年度に於ける右各日本人油房の消費量を推算するに合せて二十四、五萬噸であつて、南滿油房全消費高に對し二割見當、各地總消費高の約七分に當るに過ぎない。従つて滿洲大豆を原料とする各地油房の生産數量の内日本人が之れに關與しつゝあるのは、日本所在油房の九分と右南滿六油房の七分、計一割六分見當に過ぎぬ有様である。

### 第三節 林業

#### 一 概 説

滿洲國はその面積が廣いだけに森林面積も實に廣漠たるもので、鴨綠江の上流を渡り、一步滿洲國の土を踏んだ者は、先づ第一に内地では到底見られぬ鬱蒼たる大森林が、天を摩し地を蔽つて果しなく續く大陸的光景に一驚を喫するが、かうした文字通り千古斧鉞を入れぬ大森林が國內至るところにあり眞に計り知れぬ大資源を有してゐる。而して森林として最も優れてゐるのは、松花江、牡丹江及び豆滿江上流の一帯の地域、鴨綠江及び渾江上流の一圓北滿では海林地方、吉林の三姓地方であつて、これ等の各地樹木の種類は三萬餘種に及んで、その中で我が國に輸入されるのは、主としてテウセンマツ(紅松)テウセンモミ(杉松)カラ松(黃花松)の三種で殊に朝鮮松は滿洲國中最も

も重要なもので、木理が非常に美しく、淡紅白色である上に、木質が柔軟であるから工作を施し易く、建築材、板材、家具材、船材等に用ひられてゐる。この外滿洲材中最も種類多く、産出の多い各種の針葉樹は木材バルブとして最も適してゐるので、逐年隆盛に赴きつゝある内地製紙工業の發展に伴ひ、從來の外國輸入を驅逐して内地の需要を満たすべくどん／＼輸入されてゐる。

然して滿洲材の毎年の輸出材平均數量は鴨綠江材二百五十萬石、吉林材八十萬石、北滿材八十萬石、合計四百十萬石で、その販路は朝鮮、北支及び日本内地であるが我が國への輸出は、多く大連ならびに安東經由で、年額二十七萬石、浦鹽港經由八十萬石、合計百餘萬石であるが、これは年毎に増額してゐる。斯くして滿洲の林業には早くから邦人會社が支那と合辦名義で關係してゐて其投資額も二千七百餘萬圓に上つてゐるが、從來は支那官名の壓迫と治安の關係から惡影響を蒙つてゐた會社も少なくなつた。

現在邦人の關係してゐる林業會社では鴨綠江採木公司、長春の豊材公司、吉林の共榮公司、興安嶺の札免採木公司、中東海林實業公司、慶雲製材公司等が、その主なるものである。滿洲に於ける從來の支那側の森林行政は、林務局があつていろ／＼な法令を發布してゐたが、未だ會つて林政の實が擧つたことなく、植林は勿論、山火事、濫材を放任しておくといふ有様で、比類なき天然の美林は荒廢に委かぜ、殊に南滿鐵沿線などは荒廢して禿山となつてゐるものも少くない。人々は昔ながらの禿山だと思つて見てゐる者も多いが決してさうではなく林政の不行届きがかく悲惨な状態にならしめたのである。そこで滿鐵では、支那側に無償で苗木を與へて造林を奨めたこともあつた。

滿洲國では建國以來、殊にこの方面に留意して、一日も早く適當な施政を行ふ事に腐心してゐる。

【231】



滿蒙の森林地帯として有名な前記の諸森林地帯の總面積は滿蒙總面積の約二割五分を占めてゐて、これを世界第三位の森林國である我が國森林面積四千四萬町歩(内地約一千七百萬町歩の外、北海道、樺太、朝鮮、臺灣を含む)に比すれば、約一千二百萬町歩はかり少いが、一衣帯水の滿蒙に約三千萬町歩の大森林を控へてゐるといふことは、世界木材需給の趨勢から見ても我が國の大なる強味である。

滿蒙森林は、これを森林植物帯上から見ると、その主要部分は寒帯の圏内に屬するもので、概ね北海道の森林に彷彿たるものがある。今日すでに知られてゐる樹種だけでも三百餘種の多きに達してゐるが就中有用樹種と認められてゐるのは、針葉樹八種、潤葉樹二十一種である。針葉樹中には前記の朝鮮松の如き美材があり、その用途も廣い朝鮮カラ松は、材質剛硬耐久力に富み、特に濕氣に對して抵抗力が強いので、建築、橋梁、船舶、枕木などに用ゐる外、グニン樹脂の採取に使用される。朝鮮唐楡は、主として溪谷、河畔に産し、北海道産の蝦夷松に類似した木材で、ビール箱、電柱、マツチの原料となる外、唐白楡と共に木材パルプとして盛んに内地に輸入されてゐる。この外針葉樹には朝鮮樅、蝦夷松、落葉松、赤松等種類多く、用途はいづれも製紙原料その他廣般にわたつてゐる。一方潤葉樹には水楡、白樺、春楡等あり、春楡は、木質が堅硬、緻密で乾燥すると容易に割れないので、櫂、獨樂盆、斧柄、車軸とする外、若葉及び若翅果は家畜の飼料とし又は煮て食用とする。なほこの春楡の樹根は製紙用粘劑として用ひられる等頗る用途の廣い重要材である。これらの天與の森林資源は、建因以前は、財界の不況、銀貨の暴落、北海材の浸入等の外、支那官憲の壓迫、馬賊、土匪の迫害、交通運輸の不備等に阻害せられて、一つとして經營のよろしきを得てゐるものがなかつた。が、今日ではこれが開發こそ、第一になすべき重要産業と見て、こ

ゝに滿蒙林業政策の根本的建直しを行ひ、著々とその實績を現してゐる。一方我が國は、木材の消費量約五千萬石これに對して生産力は、僅にその六割の三千餘萬石を出せず、米材、沿海州材の輸入を仰いで調節を計つてゐる現狀であつて、たとへ最著の林業施設を行つて若干の生産量を増すとも、滔々たる人口の増加と、諸産業の發展殊にめざましい製紙工業の躍進につれて、現狀を維持すれば一層の不足を訴へることは火を見るよりあきらかな事實である。

現に我が國は、毎年數量一千万石、價格一億數千萬圓に達する木材の補給を獨り米材にたよるのは、一國の國策上はたまたま經濟上、極力これを防止せねばならぬ。然るにこの滿洲國の豊富なる森林資源を活用する時は日滿經濟プロツクの上からいふも滿洲國に於ける製紙業の發達からいふも、誠に一舉兩得にも三得にも値するものである。いふまでもなく文化と製紙とは、車の兩輪の如き關係を以て發達するものであるから、滿洲國の森林が經濟的に科學的に活用せらるゝにおいては單り同國の産業に資するのみならず、また以て我が國の國富増進の上に多大の寄與貢獻をなすものである。

## 二 滿洲林業の沿革

滿洲に於ける伐木の歴史は六十餘年前、同治年間に溯る、當時清朝は初めて東滿洲經營に轉じ、鴨綠江右岸に自由開墾耕作を許し同時に山東大饑饉救済の一策として滿洲移住策を構じ任意開拓を奨励した。爾來開拓は進捗し、樹林は焼かれ、鬱蒼たる美林は濫伐せらるゝに至つた。だが伐木は當時未だ移民の兼業を出せず其方法も幼稚、僅かに農閑時の利用に正つてゐた。



組織的に林業従事者の出たのは光緒の初である。光緒三、四年(西曆一八七七年)頃には既に清朝によつて大東溝に木税局の設立を見、又歳入増加を目的とし伐木事業は奨励され、かくして大東溝は北支に對する木材の一大供給地となつた。降つて光緒十八年(西曆一八九二年、明治二十五年)には木植公司(官商合辦、資本二十萬兩)の起業を見たが、年を積むに従て經營紊亂し、商民の怨恨を買ひ、且つ頗る消沈した。

當時南進政策を以てひたむきに進んだ露國は之に乗じ、此地に新に森林會社を起し三十萬餘坪の地を收用し、更に同二十九年には日清合辦の日清義盛公司の設立あり、兩者互に抗爭反目を續け、爲に日露の暗雲は助長されるに至つたが、採材は此爲に一大影響を蒙つた。

日露戰後、此地の林業の權益は、日本の手中に歸し、明治四十一年(西曆一九〇八年)鴨綠江採木公司(日支合辦)は開設され、此地方の專業權を得て今日に及んで居る。

吉林省は禁伐制のため、大天然林が長く存在してゐた。然るに此富庫は山東移民の開墾によつて開かれ、支那政府亦租稅收入の源泉として之を利用し、爾來禁伐制は素れ拂下地は民有地と化し、森林は區分されて民有林を生じた後、明治四十年(西曆一九〇七年)當時の吉林勸業道は資本一萬元を以て吉林林業公司を設立せしめ、一般林業者に對する徵稅と資本貸付(把頭に對する)を行はしめたが、後に同じく、内部紊亂して終に明治四十五年(西曆一九一二年)解散の止むなきに至つた。之より先、四合川森林採伐に従事せし吉興林業統局も事業に敗れ、所有林は吉林官銀號の手に移行したが、時の都督は林業公司の後を繼ぐ製材所と合辦せしめ、永衡林業公司を起さしめた。然るに大正初期の洪水に依て破滅に瀕し、かくて本公司を基とし、省當局、官銀號等を主とする松江林業公司(運轉資本五萬

元)に轉行した。其他支那資本によるものに吉林源隆號、善美號等がある。

日本資本の明治年間に此地に投げられたものに吉林貿易公司、松茂洋行を數へ得るが、何れも水害の打撃に依て挫折した。然るに世界大戰期の好況に乗じ、大倉王子系の富寧、華森、豊材の日支合辦會社其他三井三菱の出張所等續々として投資し、一時は吉林林業界に覇を唱ふに至つた。

中東鐵道沿線に於ける開拓は鐵道の開設と共に始まる。即ち同鐵道の建設諸材料及び燃料の需要は、當然露國をして豊富なる森林の利用に向はしめ、西曆一九〇二年より同五年に至るまでは、伐採は何等の條件なく行はれてゐたが、爾後各伐採者、支那木材總局間に、東支鐵道交渉局の保證を得て成文條約を結び、其後、鐵道當局は自己の必要と露人移住奨勵を兼ねて、是等企業者に幾多の便宜を與へるに至つた。從て露人租借林區は此地方に於て最も多く、日本關係は東拓系の中東森林公司(大正十三年)、中東製材公司(大正四年)の東部沿線林區と、滿鐵及び露支合辦なる札免公司(大正十一年)の林場を數へ得るに過ぎない。

從來黑龍江省並に吉林省に於て農工部の下に森林局があり、國有林の經營、拂下及び監督、測量調査、試驗、育苗造林、金員の徵收送達、警備等の事務を管掌又地方廳には夫々擔任者が木税の徵收、林木の拂下等を行つてゐた。一方森林局の下には森林分局があり専ら國家直營林場の管理經營に當つてゐたが、經營上に見るべき處なく木税の徵收、盜伐の豫防に過ぎなかつた。奉天省に於ては實業廳の下に林區駐在所があり國有林の管理及測量、伐木の檢査及指導、森林の保護及調査、國有林管理費の徵收等の業務を行ひ、現場には檢木所を設けてゐる。以上は國有林管理機關の概要であるが公私有林に於ては農工部の下に於て三省共に實業廳が其監督に當り主として勸業方面を取



扱つてゐた。

然るに滿洲の森林は殆ど無方針無計畫に伐採の弊に陥り逐年荒廢に赴きつゝある、之が合理的經營をなすには既に長期伐採を許可してゐる林場權の整理と相俟つて伐木機關の設立、林業試験機關の設置、森林行政機關の改善と行政事務の刷新等を行ふべく滿洲國政府に於ては實業部農礦司に林務科を設け諸種の計畫を進めてゐる。

三 滿洲林業の實態

大正六七年を境にして勃興した滿蒙の森林事業は大體九箇程ある。其内日支合辦組織には富寧、華森、豐材、興林中東海林、鴨綠江採木等を主とし、純支那法人には黃川、松江、興吉等あるが投資形態上より見る時は普通株金拂込に依るもの多く、借款の形式にて支那側拂込全部或は一部を日本側に於て立替貨用したのは黃川出資金の全部及び華森公司資本金の半額等である。即ち黃川公司借款四百萬圓及び華森公司支那側拂込一〇〇萬圓の如きは明らかに借款による支那側拂込である。乍併し其他の諸公司与雖も事實は日本側に於て殆ど支那側拂込金を立替してゐるから滿洲の林業會社は殆ど日本側よりの出資によるもの故日支合辦でも實質に於て全く日本人の投資事業といふべきである。主要林業會社の内容を表示すれば左の如くである。

在滿林業會社一覽表

社名	創立年月	資本金	組織
----	------	-----	----

富寧造紙公司	大正六年二月	一、〇〇〇、〇〇〇	日支合辦
王子系 黃川採木公司	同 七年七月	四、〇〇〇、〇〇〇	純支那法人
華森製林公司	同 七年五月	二、〇〇〇、〇〇〇	日支官商合辦
豐材公司	同 七年十一月	五、〇〇〇、〇〇〇	日支合辦
大倉系 興材製絲公司	同 七年十一月	五、〇〇〇、〇〇〇	同
鴨綠江採木公司	明治四年九月	三、〇〇〇、〇〇〇	日支官商合辦
中東海林採木公司	大正三年一月	三、五〇〇、〇〇〇	同
札免採木公司	同 十年六月	六、〇〇〇、〇〇〇	日露支官省合辦
吉林省方江林業公司	同 二年二月	一、〇〇〇、〇〇〇	純支那法人
興吉公司	同 十二年十二月	八二〇、〇〇〇	同

右記諸公司中共榮起業に統制された王子、大倉兩社系の五公司は資本金一千七百萬圓在滿林業投資の絶對多數を占めてゐる。

四 森林の分布と面積及立木蓄積

滿蒙の森林地帯として有名なるものは松花江、牡丹江及び豆滿江の上流地一帶並に鴨綠江右岸及び渾江上流の一圓地、東支鐵道東部線に於ては小嶺より細鱗河に至る地域、西部線に於ては布哈圖以西興安嶺山脈に屬する部分及び



吉林省三姓地方である。而して蒙古は一望千里草原と砂丘の連続で殆んど森林を見ることがない。唯興安嶺山脈中に見るべき森林があるが未だ全部の調査は遂げられて居ないが左に未調査の部分は想定の数値を以て一括して述べることにして其の森林面積及び之が蓄積の概数を示せば次の如くである。

滿蒙の森林面積並に其の立木蓄積

森林地域名	調査年度	森林面積	立木蓄積量	昭和二年現在見込立木蓄積	一町歩當蓄積
鴨綠江流域右岸渾江流域	大正四年	九〇三、一八一	四三三、三五二、六八〇	三六二、三三三、六八〇	四〇一
松花江流域	同四年	一、四七六、八三九	九〇三、二二一、一七〇	八七四、〇三六、〇〇〇	六〇八
豆滿江流域	大正六年	八三三、三六三	四三三、六〇〇、八〇〇	四二〇、四〇〇、八〇〇	五〇五
牡丹江流域	同四年	六三四、九六六	四二〇、九五〇、九〇〇	四二〇、九五〇、九〇〇	六三三
拉林河流域	同六年	六三三、七五五	三〇一、一四九、八〇〇	三〇〇、四八九、八〇〇	四七四
東支鐵道東部沿線	同六年	二、四三三、二〇二	九四、六九六、五五〇	八九八、二九六、五五〇	三五五
三姓地方	同六年	五、二九〇、九九二	二、六八八、六〇一、八〇〇	二、六五五、三〇一、八〇〇	四九四
東支鐵道西部沿線	同八十二年	(八〇二、二七一)	(五三四、四四五、九一四)	(五九九、七三三、九一四)	(六六〇)

大興安嶺	一四、〇〇〇、〇〇〇	五、六〇〇、〇〇〇、〇〇〇	五、六〇〇、〇〇〇、〇〇〇	想定	四〇〇
小興安嶺	一〇、〇〇〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇	同	三三〇
計	一三六、二五七、五八二、五	四七、四七四、七〇〇	四七、四七四、七〇〇		一

五樹種

滿洲の森林は之を林森植物帯上より觀れば温帯北部に屬するものもあるが、其の主要なる部分は寒帯の圈内に屬するものである。而して滿洲の森林を構成する樹種の數は已に知られたるもののみでも約三百數十種の多きに達する就中有用種樹と認むべきものは針葉樹八種、潤葉樹二十一種で之を列記すれば左の如くである。

針葉樹の部

和名	漢名	支那名	屬名
テウセンマツ	朝鮮松	果松(果松、紅松)	マツ屬
テウセンモミ	朝鮮樅	杉松(沙柏又柏松)	モミ屬
テウセンタウヒ	朝鮮唐檜	魚鱗松	タウヒ屬
エゾマツ	蝦夷松	魚鱗松	タウヒ屬
ダフリカカラマツ	落葉松	黃花松	カラマツ屬
テウセンカラマツ	落葉松	黃花松	カラマツ屬



[240]

和名	漢名	支那名	屬名
カウライイミヅナラ	水	柞	ナラ
モンゴリナラ	柞	樹	ナラ
アムールシナノキ	品	樹	シナノキ
マンシウシナノキ	品	樹	シナノキ
オニメグスリ	品	樹	シナノキ
マンシウカヘデ	滿洲	牛	械
ヤチダモ	佛	柳	トネリコ
イタヤカヘデ	板屋	樹	械
ハルニレ	春	樹	榆
オヒヨウニレ	黄	樹	榆
キハダ	黄	黄玻羅、黄槩木	キハダ

潤葉樹の部

タウシラベ 唐 白 檜 臭 松 松  
 マンシウアカマツ 赤 松 油 松 松  
 モミ 屬

[241]

和名	漢名	支那名	屬名
マンシウクルミ	滿洲	樹	胡桃
テウセンヤマナラシ	朝鮮	樹	白楊
ドロノキ	楊	樹	白楊
シラカンバ	白	樹	樺
テウセンミネバリ	斧	樹	樺
ヲノワレカンバ	折	樹	樺
オホミノニレ	楚	樹	榆
カライエエンジュ	瓊	樹	榆
マンシウハシドイ	白	樹	ハシドイ
ヤマナシ	鹿	樹	ナシ

以上の内テウセンマツは滿洲森林の主林木にして其の分布最も廣く量に於て最も多く滿洲の西部興安嶺を除く外は針葉樹林のある所には大抵之を見ることが出来る。テウセンタウヒ、テウセンモミの兩者は多くテウセンマツに伴つて混生して居るが多量分布は吉林省中部以南である。タウシラベは其の蓄積遙かにテウセンマツに及ばぬがエゾマツ、テウセンマツと混淆すること多く多量分布は吉林省中部以北である。エゾマツは其の數量多からざるも長嶺才嶺山脈並安圖、撫松兩縣方面にある高山に於て針潤混淆林中に散見することが出来るが多量分布はトウシラベに



〔242〕

伴ふ。カラマツはダフリカカラマツ若しくはテウセンカラマツ(前者の變種)で普通日本内地産のものとは其の性質を異にし好んで低濕地を占領して居るが興安嶺地帯に於ては高燥地に生育し其の蓄積は少くない。而してダフリカカラマツは常に單純林は形成し屢々廣大なる面積に亙る。

#### 六 森林の概況

##### ◎ 鴨綠江(右岸)及渾江流域の森林

鴨綠江は其の源を長白山脈に發し江口より溯ること五十餘里の地點に於て左方より來る渾江と合する。之より水源に至る延長約百五十里で此の間支那側に於ては安東、寬甸、輯安、臨江、長白の諸縣、朝鮮側に於ては平北、咸南の二道に其の源を發し本流に注ぐ支流も亦尠くない。而して有望なる森林は大江(鴨綠江本流)右岸に於ては頭道溝(或は帽兒山)より二十四道溝に至る各道溝の上流域に存在し帽兒山下流域に於ては主として潤葉樹林で之に僅少の針葉樹を交ふるのみである。

由來鴨綠江の森林は長白山の南西方一帯に位し滿洲の東南隅に偏在し遠く南部の平野と隔絶せる爲久しく原生の状態を維持し、其の初にありては江岸に至るまで鬱蒼たる森林をなし鴨綠江及び各道溝に沿ひたる部分は潤葉樹を主としたる針潤混淆林で奥地に入るに従ひ潤葉樹混淆の度を減じ江を距る數里の處では殆ど針葉樹の純林に近き状態となり以て分水嶺に至りしものゝ如くである。而して當時の森林は植物帶上溫帶北部及び寒帶に屬せしものが、此の地方に移民の増加するに従ひ鴨綠江本流及び各道溝に近き平地は伐採開墾せられて耕地となり其の附近の山林は火入開墾の際延焼し或は採伐せられて原野及び散生地を増加し今や森林として指を屈するものは溫帶に屬するもの

〔243〕

は尠く、多くは寒帶に屬するものとなり然も大江を距る近距離に於ては森林を認め難く奥地に進むに従つて潤葉樹を主とする散生林を生じ擇伐跡地たる針潤混淆林を経て漸次針葉樹の數を増加し分水嶺近くは原生林を見るの狀態に變じたのである。彼の移民開墾又は山火乃至採伐の力に依り森林を減じた程度は比較的渾江流域に多く大江流域には尠い。而して有望なる森林は前述の如く大江流域に於ては帽兒山より上流の各道溝の上中部及び長津江、南社水等の支流で渾江流域に於ては通化以上哈泥河、羅圈溝、紅土崖、三岔子等の上半部に存在する。主なる樹種はテウセンマツ、テウセンモミ、テウセンタウヒ、エゾマツ、テウセンカラマツ等の針葉樹及びヤチダモ、マンシウグルミ、カヘデ類、ナラ類、ハルニレ、キハダ、ハリギリ、シラカバ、ドロノキ等の落葉、潤葉樹でアカマツは渾江より上流域に於ては森林として存在することは稀である。又長白山脈の森林帶に於ては極寒帶即ち樺松帶を缺き白頭山の頂上に至つても矮小なるテウセンカラマツが生育して居る地域より直に無立木地に接続して居るのを見るのである。而して一般に散生地は殆どナラ類、シナノキ、ドロノキ等の潤葉樹林の間々タウシラベ、テウセンタウヒ及びテウセンマツの如き針葉樹が點々混生することがある、此の地域に生育する樹木は胸高直徑五、六寸位の僅かに薪炭材に供し得るものゝみで一町歩の材積平均十八乃至三十六石である。次に擇伐地は良好なる針葉樹及び潤葉樹の大材を伐採せる跡地で現今に於ては良材はないが針葉樹の胸徑二尺内外、潤葉樹の胸徑三尺内外の樹木が残存せぬではない。殊に針葉樹中に於てもテウセンモミの如きは比較的伐採せられなかつた爲大材を残して居る。此の地域は概して地味肥沃で稚樹が能く發生するから火入開墾を禁じ天然に生育せしむる時は將來林相の回復を見ることは困難でない。現在一町歩の材積は九十六石乃至四百二十石で針潤混淆の歩合は平均針葉樹四割、潤葉樹六割内



[244]

外である。針葉樹中に於てはテウセンマツ四割、タウヒ、モミ類六割内外を普通とし、奥地に入るに従つて漸次針葉樹の数を増加し原生林に至つて針葉樹六割、闊葉樹四割内外の割合となつて居る。原生林に於ける樹齡は不整で幼は一年生より老は數百年に至る樹木が鬱蒼として密生し闊葉樹は老大的ものは少く日蔭に耐ふるものが僅かに下木となつて生存するに過ぎない。而して之等原生林の針葉樹中には樹齡二百年内外、胸高直徑三尺以上、樹高十五六間以上のもが多く之等は密生して風害を蒙ることが少い爲樹幹が通直で枝下高く従つて良材が多い。樹種はテウセンマツを主としタウヒ、モミ類之に亞ぎ亦カラマツの老大的ものを混生し低濕地或は露出地に於てはカラマツが群生して居るのを見る。一町歩の材積は平均四百八十石乃至八百四十石に至つて居る。今大江右岸及び渾江流域に於ける蓄積の概要を示せば左の如くである。

◎ 大江右岸森林蓄積

帽兒山より下流域の大江右岸の森林は望が渺いから之を省き大正四年採木公司に於て概測した各支流流域（頭道溝より二十四道溝に至る地域及び嶺後を含む）の蓄積を示せば左の如くである。

種別	蓄積
散生地	一、三〇五、七四四
擇伐地	三〇、七八五、五五六
原生林地	二〇二、九九〇、三八〇

計

二三五、〇八一、六八〇

其の總面積は四十六萬九千三百三十六町歩と推算せられる。尙右の蓄積に帽兒山より下流渾江口迄に於ける森林の蓄積を合算すれば約二億七千六百萬石である。

◎ 渾江流域森林蓄積

渾江流域に於ける森林は伐採開墾、野火の爲大に其の蓄積を減じ流域面積の廣大なる割合に蓄積は却つて大江流域よりも少い。而して渾江流域に於ては未だ大要の調査もないから正確の數字を擧ぐるは困難であるが其の想定蓄積は一億九千八百二十七萬石内外で之が面積は四十三萬三千八百四十五町歩内外と推算せられる。即ち鴨綠江右岸の森林は以上述ぶるが如くで其の總蓄積は老龍崗及び松花江流域の一部を各算する時は總蓄積四億七千四百萬石餘である。而して此の内テウセンマツ、タウヒ、モミ類、カラマツ等主要なる針葉樹の蓄積は約三割位で即ち其の量は一億三千萬石位である。今假りに總蓄積の内實際伐採せらるべき立木材積を七割とし利用率を三割五分とする時は利用總材積は一億一千六百萬石となる。

◎ 松花江流域の森林

吉林縣以南の松花江上流域の森林は一部は長白山本脈に一部は吉林哈達に連つて居る。其の流域に互る地は吉林省濛江、樺甸、額穆、奉天省安圖、撫松の二省五縣に跨つて居る。之等諸縣の森林の蓄積は次表の如くある。

[245]

森林の蓄積



[246]

省名	縣名	森林面積(町)	針葉樹	闊葉樹	積(石)	備考
吉林	濛江	二九、四七、七	六五、三五四、三八	一四、四三、一五二	一六九、七六七、五四〇	
同	樺甸	三六、三二、八	六、五〇、四九	二五、三九、六一	二〇一、九三、四〇〇	
吉林	額穆	九四、六六、八	二四、〇九、三九六	四〇、四七、三四	六四、五五四、六〇〇	長廣才嶺以西の部
奉天	安圖	三八、八三、三	一〇四、六〇、四九	九五、八七、九六	二〇〇、四八、三七五	本縣の一小部分は豆滿江流域に入る
同	撫松	三三、五九、四	一三〇、九一、七六六	一三、四七、四九	二六、三九、二五	
計		一、四三六、八三九、〇	四〇一、五八四、四八	五〇一、五八、七四二	九〇三、二三、一七〇	

◎ 豆滿江流域の森林

豆滿江流域の森林は琿春河及び嘎呀河、豆滿江等の支流上流一帯の地より老爺嶺に到る廣大なる地域に互り即ち吉林省延吉、汪清、琿春、和龍の四縣並奉天省安圖縣の一部を抱括する。之等諸縣内の森林面積及び森林蓄積は次表の如くである。

省名	縣名	森林面積(町)	針葉樹	闊葉樹	積(石)	備考
吉林	延吉	九八、三九二	二五、七七、七〇〇	三五、五九、八〇〇	六、三九、五〇〇	東部東寧縣の斜面を除く
同	汪清	二一、〇八〇	五、三六、三九三	一〇〇、六四、二五七	一五、九〇、六五〇	
同	琿春	二〇一、六〇〇	二九、九七、六八〇	七二、三三、五〇〇	一〇二、二二、二〇〇	
同	和龍	一九、〇一一	二四、三七〇、八四五	四、八八、六〇五	六、二五九、四七〇	
奉天	安圖	六〇、四八〇	二四、〇〇、八〇〇	一八、七九、二〇〇	四、八四、〇〇〇	安圖縣の東南部
計		八三三、五三三	一六二、三三、四一八	二七二、三三、三六二	四三三、六〇〇、八〇〇	

◎ 牡丹江流域の森林

牡丹江は其の源を敦化縣牡丹嶺に發し敦化、額穆兩縣の諸流を合せて寧安縣に入り鏡白湖の北端四家屯吊水瀨に於て一大瀑布をなしこれより大江となり約四里にて東京城に達し更に北流して水源より約八十四邦里なる寧古塔に至つてゐる。茲には之等敦化、額穆、寧安三縣内の諸川の流域を總稱して牡丹江流域と命名するのである。

森林の蓄積

[247]

省名	縣名	森林面積(町)	針葉樹	闊葉樹	計	備考
吉林	敦化	一九、七四、三	七四、一四、二九〇	七五、五二、三三五	一四九、六九四、六七五	
同	額穆	一四、一四、一	五五、八九、九九九	五九、一三、六五二	一二四、九三、六三〇	長廣才嶺以東の部



[248]

同	安	二九一、〇九四、〇	八、九五九、八五	七四、三三、七九〇	一五、二七、五五
計		六四、九六、四	二二、九三、〇七四	二〇九、〇七、八六	四〇、九五〇、九〇〇

松、豆、牡丹江流域の森林蓄積總計表

名稱	森林材積(石)		備考
	面積(町)	針葉樹	
松花江流域の森林	一、四六、八三九	四〇二、五四、四八	五〇一、五八、七三
豆滿江流域の森林	八三、五三三	一六、三三、四八	二七、三三、三二
牡丹江流域の森林	六四、九六六	二一、九三、〇七四	二九、〇七、八六
合 計	二、九四、三六八	七五、八九、九二〇	九一、五三、九五〇

◎ 松、豆、牡丹江流域森林の状況

松花江、豆滿江、牡丹江流域の森林中遼江縣の北部は大部分潤葉樹林であつて、其の南部地方に多少の針潤混淆林を残して居る。然も遼江縣の中央及び二道花園河地方に到れば南するに従つて針葉樹の混淆度を著しく増大する。更に樺甸、敦化、額穆の諸縣に到れば長廣才嶺新開嶺及び牡丹嶺の北側に於ては其の位置的關係より伐採を免れ従つて最も美林に富むも其他の方面に至つては己に林相の惡變を來して居る。延吉、和龍兩縣の森林は極めて一局部に止まり殆ど雜木林である更に延吉の東南及び和龍の大部に至つては山地と雖散生の雜木林に非ざれば無立木地の

[249]

姿で漸く土民の燃料を供給するに足る程度である。琿春、汪清兩縣は豆滿江流域中優良の森林を保有し原生的美林に乏しからず次に安圖、撫松兩縣に在つては頭道江及二道江に沿へる一帯を除き山嶽及臺地の森林は木材搬出の便を缺きたると植民の影響を蒙ること少かつた爲幸に伐採を免れたが、該地方には人蔘の栽培が盛となり逐次森林面積を縮小すると共に針葉樹を減少しつゝある。要するに古來一般に繁茂せしテウセンマツ、テウセンモミ、テウセンタウヒ、エゾマツ、タウシラベ等の針葉樹林は其の後變遷して針潤混淆林と化し今や此の混淆林も年と共に針葉樹の歩合を減じて交通不便なる奥地に美林を止め一部は潤葉樹林に變じ更に其の一部は全く荒廢し散生地、無立木地と化したのである、然し今日尙甚だ有用の樹種に富み隨所各異の混淆状態を呈するのである。而して是等森林に於ける針潤兩葉樹の混淆歩合は各縣共針潤相半するか若くは針四分、潤六分である。各縣を通じて針葉樹にありてはテウセンマツ最も多くモミ、タウヒ類之に亞ぎカラマツ類の如きは餘り多量ではない。又潤葉樹に在つても各縣に依つて其の最多の樹種を異にするが大體に於てシナノキ、ナラ類、ハルニレ、ヤチダモ、カバ類等が多數を占めてゐる。

本森林地帯は所々に伐採搬出の事業はあるが要するに天然林其の儘で雜然多様の樹種を混生し老幼大小の林木が不規律に生長し其の樹齡の限界も甚だ區々で若きは五、六年生より老いたるは三百年を越ゆるものがある。然し乍ら大體に於て其の年齡は針葉樹中テウセンマツは二百年、テウセンモミ、テウセンタウヒ、エゾマツ等は百八十年、カラマツは百十年、タウシラベは九十年、シナアカマツは六十年位で潤葉樹は百五十年内外である。但し遼江縣の森林は他縣のものと同異り殆ど全く斧鋏の入らざる原生地であるから其の平均林齡も稍高くテウセンマツ二百十年、



[250]

テウセンモミ及びテウセンタウヒ二百年、カラマツ三十年位である。

◎拉林河流域の森林

拉林河流域一帯の森林にして同河は水源は舒蘭縣の呼蘭嶺、蘭陵嶺、太平嶺及び額穆縣の北部老嶺並五常の東界に於ける山脈に發し其の流域は舒蘭五常の二縣並額穆縣の北部に互つて居る。

森林の蓄積

林種	面積(町)		蓄積(石)	
	針葉樹	闊葉樹	針葉樹	闊葉樹
落葉闊葉樹	三〇八、九六一	—	一〇八、一四三、三五〇	一〇八、一四三、三五〇
擇伐後の針闊混淆林	一一〇、七三一	二四、一四六、二〇〇	三六、二九、三〇〇	六〇、三六五、五〇〇
原始的針闊混淆林	二〇四、〇三三	七九、五五四、五〇〇	五五、〇五六、三八〇	一三三、六四〇、九五〇
計	六一三、七四五	一〇三、七〇〇、七〇〇	一九七、四一九、〇三〇	三〇一、一四九、八〇〇

◎東支鐵道東部沿線の森林

露濱沿海州の境界に當る東支鐵道の一驛ポクラニーチナヤ(綏芬河)から哈爾濱に到る鐵道兩側に位する森林で其の地域は主として賓、同、賓、齊安、穆稜及東寧の五縣並に汪清縣の東部即ち老爺、石頭、太平等の諸山脈以東の地域に跨つて居る。南方額穆縣界より五常、齊安兩縣界を北走する所謂小白山脈は同賓縣界に到つて岐れて二つとな

[251]

り一は東瑯嶷窩集、圍城荒山、畢展窩集嶺、龍爪溝嶺、阿穆達山となり蜿蜒として同賓縣と齊安、方正兩縣との境界を劃する、一は西方に轉じ西瑯嶷窩集、四方頂子、春秋嶺、石維山、大青山等の山脈をなして同賓縣との境界をなすのである。又汪清縣に於ける老松嶺の支脈は穆稜縣界に於て穆稜窩集嶺となり、穆稜縣を圍繞するのである。これ等の諸山脈は有名なる森林地帯で、東支鐵道開通前までは一帯の美林であつた。就中同賓、寧安兩縣に於ける森林の如きは長大美良の直幹を有する樹木が林立し、鬱蒼たる密林であつたから土俗之を樹海と稱した程であつた是等地方に於ける森林蓄積は次表の如くである。

森林の蓄積

名	縣名	面積(町)		蓄積(石)		備考
		針葉樹	闊葉樹	針葉樹	闊葉樹	
吉林	賓	一五四、六二六	八、〇七二、一六〇	四〇、六七、〇四〇	四八、七四、二〇〇	
同	同賓	四三〇、二九四	四六、一五三、六二五	一四〇、〇八九、三七五	一八六、二四三、〇〇〇	
同	寧安	五九四、二一七	一三三、九一五、七〇〇	一七一、四七、七五〇	二八六、三三三、三五〇	
同	穆稜	三〇〇、六九九	一九、三六七、二四〇	八〇、〇三三、三〇〇	九九、四〇八、五五〇	
同	東寧	六三三、二二三	五五、六五五、六〇〇	一三四、六四六、六〇〇	一八一、二七二、二〇〇	
同	汪清	三三二、二四四	二九、七七八、四〇〇	九二、九四七、八二〇	一三三、六七六、二五〇	縣の東部斜面



計

二、四五、二〇一 二七、八二、七五 六五〇、七九、七五 九四、六六、五〇

## ◎ 東支鐵道西部沿線の森林

東支鐵道西部沿線諸縣の内呼蘭、肇東、安達、龍江等本沿道の大半を占むる地域は見渡す限り茫漠たる大草原で一本の視界を妨ぐるものもない。

龍江縣に於てはアカマツ及びカラマツ林を見るが、其の蓄積は僅少で林地として擧ぐるに足らない。故に西部沿線の森林は僅かに布西、呼倫の二縣によつて代表せらるゝに過ぎないが其の大部分は散生地であつて優良林地は總て大興安嶺の峯筋を占めて居る。而して比較的鐵道と近距離に在るものは大興安嶺山脈の東側面に於ては雅爾河の上水源地を中心とし其の分水嶺を超へて北方に阿倫河及畢拉爾河の上源地、南方に發爾河の上流地域がある。西側には札敦河、烏諾爾河の上源地が鐵道の南北に連つて居る。稍距つて札敦河の分水嶺を超へ北方には海拉爾河の上流及び其の支流庫都里河の上流地、烏諾爾河の分水嶺を超へて南方に伊敏河の上流等がある。前記諸流域の森林は現在多くは露人に依り伐採權を獲得せられ居る有様である。其の他諸敏河上源地等の如き嫩江の各支流上源地地域の森林は經營上東支沿線に搬出せらるべきものであるがこれは後日齊々哈爾、黑河間等の鐵道開通を俟つて初めて價值あるものと觀るべきものである。

西部沿線地方の森林は大興安嶺森林の一部に屬するものであるが參考までに今日まで調査せられたる各國人の伐採權を獲得せる林場の森林總面積及蓄積を附記すれば其の森林面積二百六萬七千三百町、材積五億餘石である。

## ◎ 東支鐵道沿線(東部西部)森林林況

東支鐵道沿線に於ける森林地帯は各地方により異なるが概して緩傾斜で日本本土の山嶽地帯に比すれば大に其の趣を異にして居る。殊に西部沿線地域は概して大波丘をなし大半は廣限りなき原野で諸山脈の大系を爲す所の大興安嶺山脈に於ても其の最高峯海拔六千尺餘に過ぎない程度なるに看ても地勢の大要を察し得ることが出来る。而して東部沿線地方は西部地帯に比すれば老嶺、高集嶺等長白山系の連峯に依つて其の地勢は稍錯雜して居る。樹種は東部沿線に在りては實に多種多様で喬木のみにも二十餘種を數へ得るであらうが就中蓄積の多き有用樹種を擧ぐれば

## 1 針葉樹

テウセンマツ、モミ類(主としてタウシラベ)、タウヒ類(主としてエゾマツ)

## 2 潤葉樹

シナノキ、オヒヨウニレ、ハルニレ、カヘデ類、ヤチダモ、カバ類、キハダ、マンシウクルミ、テウセンヤマナラシ、ドロノキ類

等で主要樹種たるテウセンマツは局部的には純林になつて居るが多くはモミ類、タウヒ類等の針葉樹及び各種潤葉樹と混淆して居る。而して其の混淆歩合は針葉樹四〇%—六〇%、潤葉樹六〇%—四〇%の間で蓄積の豊富なるものに至つては一町歩優に二千石に達するが平均六、七百石である。

テウセンマツの樹齡は三百年、胸高直徑四尺に及ぶものがあるが普通は胸高直徑二尺二、三寸、樹高十六、七間のものが最も多く樹齡平均二百年内外と認められる。潤葉樹にあつてはドロノキの如き時に直徑五尺、高さ十八九間に達するものがあるが他の樹種に於ては年齡二百五十年、直徑二尺五寸、高さ十六、七間のものが最大である



次に西部沿線に於ける主要樹種は、

1 針葉樹 ダフリカカラマツ

2 潤葉樹 シラカンバ、コヲノラレ

此の外シベリヤアカマツ、テウセンヤマナラシ、ヤナギ類、ドロノキ類、ハンノキナラ等數種あるが蓄積少く殆ど數ふるに足らぬ。ダフリカカラマツは面積に互つて單純林をなして居る所があるが多くは帶狀又は群狀をなし白樺林と混淆して居る。其の混淆歩合は潤葉樹三〇%—五〇%、針葉樹七〇%—五〇%と見て大差ないであろう。其の蓄積は海拉爾及び哈爾奇爾河の上流に於ては一町歩一千石に及ぶものがあるが平均六百六十石である。

樹齡はダフリカカラマツ最高三百年、平均百年内外、白樺は最高百年、普通六、七十年位で大さはダフリカカラマツにあつては最大直徑二尺五寸、高さ二十間に達するものもあるが多くは直徑七寸乃至一尺三寸、樹高九間乃至十四間程度を普通とし、白樺は時に直徑九寸餘、高さ十二間に達するものがあるが直徑五、六寸高さ八間のものが最も多し。

### ◎ 三姓地方の森林

吉林省の北部を占め松花江及び黒龍江と烏蘇里江との間に挟まれ深く北方に突出して黒龍江と烏蘇里との合流點に達する地域即ち方正、依蘭(勃利を含む)樺川、富錦、同江、(寶清を含む)饒河、綏遠、虎林及び密山縣等の森林を三姓地方と稱するのである。

三姓地方に於ける森林の林況を觀るに方正縣の西部桃兒山東部の關門咀烏鎗頂等に於ける森林は從來伐採せられつ

ゝあつて、現今其の材積を減少した感があるが老爺嶺、阿穆達山、龍爪溝地方にあつては今尙ほ一大森林を有し將來大いに有望の林區である。殊に縣内大羅拉密溝の森林は西方及び同溝の南方にあつて東は東陽山背、北は才窩棚を以て界とし方正縣城を距る百支里松花江岸の大羅拉密溝を距る三十支里の地にある。樹種は針潤混淆の天然林で針葉樹中テウセンマツが最も多くモミ、タウヒ類之に亞ぎ潤葉樹にはオヒヨウニレ最も多くキハダ、ヤチダモ、カバ類、ナラ類、シナノキ等の順である。樹齡は針葉樹では百五十年前後、潤葉樹では十五年より六、七十年を経たものが多し。樺川縣の南依蘭縣界に連つて重疊せる山嶽地帯は森林に富み殊に東南寶清、富錦の兩縣界に互つてテウセンマツ、タウヒ、モミ類の良材が豊富である、然し交通の便利な地帯は已に採伐し盡され又松花江岸より稍遠隔せる地方の高地帯内には潤葉樹林としてナラ類、カバ類の疎林を見るのである。富錦縣の西部に於ける七星習子、南部に於ける雙崖山、中央部に於ける別拉音山、東部同江縣と相接する方面に於ける烏爾吉力山及び硯臺山等餘り高からざる諸山岳は何れも原始的森林を以て蔽はれテウセンマツ、アカマツ、モミ類等の良材が少くない。然し松花江岸に近き地方にあつては良材に乏しく各丘阜地及び平地には潤葉樹林の點在するを見るのである。同江縣内の南方山嶺は其の大部分森林を以て蔽はれ主としてドロノキ類、カバ類、ナラ類、シナノキ類等であつて針葉樹は比較的少し。然も松花江一帯は大森林に乏しく圖斯科附近一帶の平地には薪材となるべきナラ類、カバ類の潤葉樹が散生するのみである。綏遠縣内の泰得力山、額圖山、依力嘎山、科勒木山、斯莫勒山、太平山等は皆森林を以て蔽はれて居るが原生林は饒河縣界の太平山及び喀爾布蘭山の高地一帯に限らるゝものゝ如く推測せられる。虎林縣の北方那丹哈達拉嶺及び安巴倭克里山並其の支脈たる七虎林山、新七虎林山、半拉窩集山等一帶の山地は鬱蒼た







[258]

小興安嶺は大興安嶺中の英吉里山より起り黒龍江支流呼瑪爾河並嫩江支流甘河を以て大興安嶺と隣接し黒龍江に沿ひて東南に走り松花江本流に終つて居る。本地域内の森林は龍江道の東半部黒河道綏蘭道に跨り森林想定面積一千萬町歩、一町歩想定三百五十石とすれば總立木蓄積量は三十五億石である。樹種は主にダフリカカラマツ及びシラカンバにして南部松花江に近き部分はタウシラベ、テウセンモミ、エゾマツ、テウセンマツ、ニレ類、カバ類、マシウクルミ、ヤチダモ、シナノキ類等を有し其の他ヤナギ類、ナラ類、ハンノキ類、テウセンヤマナラシ等がある

七 滿洲材の生産状況

◎ 木材の生産及び需給状況

鴨綠江右岸並に渾江流域から生産し、鴨綠江を流筏して安東地方に出廻るものを鴨綠江材と稱し、吉林奥地即ち吉敦鐵道沿線から伐採せられ吉敦鐵道によつて吉林に廻るものと、松花江流域から伐採せられて流送により吉林に出廻るものを吉林材と稱し、豆滿江上流諸流域より伐採せられ、豆滿江を川流して會寧、清津、雄基、土里等に出廻るものを總稱して間島、琿春材と稱し、中東鐵道に出廻るもの及び松花江により哈爾濱に出廻るものを北滿材と稱してゐる。

今以上四材(薪材を含まず)に付いて大正十四年から昭和四年に至る間の生産量(石)を示せば左表の如くである。

生産地別生産材數量 (單位石)

生産地方	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	平均
鴨綠江材	一、九三、六六七	一、二四七、二九	一、九九、九三四	一、四三、六五一	九四八、九六	一、四九二、二五七

吉林材	一、〇九四、〇七四	四五一、九〇〇	五八〇、三六六	九九七、〇〇〇	一、〇四一、五二二	八三三、一七四
間島・琿春材	五五四、五三〇	二二八、六二〇	三三六、二四〇	四六六、二〇〇	三七〇、八〇〇	三三三、八六六
北滿材	一、〇四六、一七〇	一、四九九、〇六六	一、〇四八、九六六	二、三三〇、九〇〇	一、四四四、七四	一、五五、九六七
合計	四、九八、四四一	三、三七六、六九五	三、七五、五六	五、二八、七五一	三、八四八、九七一	四、三三、二七四

備考 薪材を含まず以下各表共同断。

即ち年伐採量は三百四十萬石乃至五百十萬石であつて、平均四百二十萬石である。

鴨綠江材は朝鮮方面を主とし其の他、天津、芝罘、青島、上海方面に輸出せられ、鮮朝向は多く挽材に限られ、北支方面は主に原木である。吉林材は大部分滿洲内消費であつて、大連、營口經由中部支那、日本、朝鮮方面に輸出せらるゝものもあるが、其の數量は多くない。

間島琿春材は大部分原木であつて、良材は天津、芝罘、青島、上海等中部支那方面に輸出せられ、其の殘餘が日本に輸出せらるゝのみである。北滿材は大部分中東鐵道にて消化せられ、一部南滿地方に移出せられ、輸出僅かに浦鹽を經由して紅松材及び白楊丸太が日本に向けらるゝに止まる。

滿洲への輸入材としては北洋材(エゾマツ、トドマツ)米材(米松)、日本より杉丸太、南洋材(ラワン、チーク、マホガニー等)中部支那材(桐材其の他南洋に於ける特殊材)及び朝鮮材の一部で、凡て特殊用材に限られてゐる。

[259] 今滿洲に於ける輸出入數量に就いて大正十四年より昭和四年までの表を示せば左の通りである。

輸出入數量 (單位石)



[260]

種	目	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	平均
輸	入	七五、九四四	六五、三三三	四七、三六六	八五、九九四	八三、六三三	七五、四四四
	出	二、〇六一、八六一	一、二二、五〇〇	一、一六三、九九九	一、〇三七、四九九	七七〇、一七五	一、三三〇、九八三

◎ 鴨綠江材に就いて

鴨綠江材は北滿材と相伯仲してゐるが、鴨綠江は即ち伐採の高潮を越え江に近き箇所は森林の形を失ひ粗材或ひは散生地又は無立木地となつて、經濟的林地は只奥地に見るのみで、良材に乏しく、昔日の面影がない。又伐採地と江岸の距離も遠隔してゐるので、年々産出は遞減せられてゐる。將來は濛江、安圖、撫松の諸縣に伐採區域を擴張し、他方鴨綠江採木公司(日支合辦)營業期間が昭和八年を以て満了となる譯であるから、之の期限を延長する必要に迫られてゐる。

産材は大江を管流して市場の中心安東に集中される。此の地に於て或ひは製材せられ或は原木のままに、北部支那南滿を主として、朝鮮、日本に輸出されてゐる。支那の主要仕向地は青島、天津、芝罘、龍口、威海衛である。

◎ 吉林材に就いて

所謂吉林材は松花江上流の各流域より伐採せられ、松花江を流下し、或は敦化方面より鐵路吉林に集散する木材の總稱である。即ち其の主要生産地は吉林を去る水路五百七十支里以南の地、牡丹嶺の南斜面と白頭山の北斜面の間に挟る松花江上流頭道江、二道江沿岸の地方及び老爺嶺拉法阿、張廣才嶺の一帶に亘る。此の地の森林は林況もよく従つて世界大戰時に於ける好況期中には、枕木建築材等の需要の増大に伴つて、土着資本及び外國資本の投資の

對象として着眼せられた。即ち當時支那資本としては吉林木廠及び官民合辦として再生せる松江林業公司の活躍するあり、好況の尙持續せる大正七、八年には日支小資本續々とし活動し、王子、大倉系の豊材股份有限公司(大正七年)華森製林公司(大正七年)富寧造紙股份有限公司(大正六年)の大資本も牡丹嶺南部を初めとして相續いで利権を獲得した。

斯くて吉林材は吉長鐵道(大正元年開設)を利用し、南滿市場殊に奉天を中心として、撫順、營口地方に一大名聲を馳するに至つたが、大正八、九年を境として、經濟界は漸く不況に轉向し、金融は梗塞し日本資本家も亦資本の引上を行ひ、更に大正十年には東支鐵道の木材運賃引下によつて、南滿市場に於ける北滿材の進出に遭ひ、斯くて大小の企業は相繼いで倒産した。

是を生産量について見れば大正九年の一千三百五十五萬石を最高とし、大正十五年には最低四百五十三萬石に下つて居る。かゝる不況は、漸く熾烈となり來つた外人の企業禁壓と一軒一庇三錢といふ鐵道運賃の高率と、更に従價三割を越ゆる賦課に依つて促進された。

而して吉林材は各市場から遠隔してゐるに不拘、從來運輸機關の設備がなく、只一部分牛馬車、牛馬極で陸運搬せられてゐた外専ら松花江の流水で流送されて吉林に陸揚げせられたものである。昭和三年吉敦鐵道(吉會鐵道の一部)が敷設せられて以來吉敦沿線方面が伐採の中心となつて、今迄の流送材が陸運材に乗り換へた形となつてゐる。併乍ら吉敦鐵道開通は吉林木材界に大發展を及ぼすものと期待されてゐたが、生産地域の擴大にも拘らず、生産の増加はさして著しいものを見ず、從來の流送材に比して陸運材は期待された程に出材量を増加してゐない。この理

[261]



由は一方吉敦沿線地方に於ける大面積に亘る林場を所有せる官銀號(支那側)が林場を封禁し伐採を不可能ならしめた事と、他方前述の如き木材界不況と相俟つて、吉林材の聲名を發揮してゐないが、近き將來該林場開放と共に吉會鐵道開通の際には日本木材市場と密接の關係を有することゝて、吉林材の輸出は相當多量となり、將來滿洲材の聲名を擔ふものと見られる。

吉林材は從來長春を經由し南滿に覇を唱へてゐたが、北滿材の進出と米材の侵入に相當打撃を受けてゐた。其南滿市場に出廻るもの約五十萬乃至一百萬石である。だが事變前には吉奉鐵道と滿鐵線の連絡輸送の途が開かれ、再び南滿に雄飛するの可能性を有してゐた。

機械挽製材は之を支那側について云へば光緒三十年吉林江岸の林業公司を嚆矢とし次で民國元年永衡林業公司起り之を繼承して民國五年東三省林務局事業を起し、製材及び伐木に従事し、更に其後を松江林業公司(資本一百萬元昭和四年現在)が繼いで現在に至つてゐる。邦人企業は大正六年鴨綠江採木公司分工場の進出を嚆矢として、前後して各同業者の群立を見たが、現在は殆んど振はず其の主なる華森製材、吉林木材興業(資本十萬圓、共榮起業下請)も亦活況を呈するに至つてゐない。而して最近恐慌の打撃は土着資本にも強く加つて又極めて不振である。

◎ 北滿材に就いて

中東鐵道及び松花江の便によつて哈爾濱を經由南下し、新京に出廻り輸送さるゝを北滿材といふ。特に中東東部沿線、就中牡丹江瑪瑙河、穆稜河、湯汪河流域よりは良材を産出する。その他中東西部沿線、松花江下流、黑龍江沿岸、ツォミンジャン地方を生産地とする。

中東鐵道東部沿線の森林は、小嶺驛より東方細鱗河驛に至る鐵路に沿つて存在し、其の蓄積は九億石と稱せられる林區は大小三十有餘を數へ、主なるもの十七箇所、此等の林區には大小の森林鐵道を有し、製材工場を設くるものもある。

林區租借は、中東鐵道の關係上露國人が壓倒的多數を占めてゐる。

邦人の林區は中東海林公司の北溝林場(一千三百四平方露里)、大海林林場(一千三百四平方露里)、中東製材公司の山石林場(二千四十平方露里)、を擁してゐるが、近年の經濟界の不況は此處にも深刻に影響して、邦人林業は殆んど休止状態にあり、中東海林公司の如きは昭和二年以後は殘材賣に止る。その他中東鐵道に出材する邦人林場は、共榮起業に屬する牡丹江上流鏡泊湖の南湖及び二站川林場、更に巍呼河より鏡泊湖に流下する四合川林場があるが此後者は吉會線の完成と共に其の圏内に入るものである。

此の地方の製材業は露人カワルスキーのヤブロニア工場、スケデルスキーの細鱗河、葦沙河工場及び中東鐵道經營工場(哈爾濱)、中東海林工場がある。

北滿材の中心市場哈爾濱に入るものに東部線によるもの以外に、松花江を溯上する三姓地方の木材があるが未だ重要性を持つてゐない。

[263] 北滿材の販路は、中東鐵道を第一とする。中東鐵道需要は過去に於ては北滿出材の約八割を占めてゐたが近年燃料に石炭が用ひらるゝに至つて漸く減少した。併し尙三割餘の消費を持つてゐる。中東鐵道を除いて販路は哈爾濱を中心とし傅家甸、安達、西は西部線昂々溪に達し、南は南部線沿線の都鄙より下つて南滿市場に及んでゐる。殊に



露國革命以後は浦鹽方面より轉じて、南滿市場に進出せんとし中東鐵道運賃引下等の努力が拂はれた結果約三十萬石を送つてゐる。因に恐慌は此の地方も例にもれず、露人カワルスキーも亦深刻なる影響を蒙つてゐるといはれてゐる。

中東鐵道西部線の森林にも亦露人租借林區多數を擧げ得る。就中ウオロンツオフ林區、及びエシマーユフ林區を擧げらる。邦人企業としては滿鐵、露支合辦になる札免公司の林區(約四百里、蓄積九千七百萬石)がある。

札免公司は日、露、支合辦の事業であつて、事業の目的は主として大興安嶺(北滿中東線西部線イレクテ驛附近)の森林伐採及び其の利用竝に木材の販賣である。總局所在地は哈爾濱であるが區事務所は中東鐵道西部線宜立克驛にある。同公司の創立は大正十一年六月二十五日であつて、出資者は日本側滿鐵、露西亞側シエフチエンコ兄弟商會及び支那側黑龍江省實業廳である。資本金大洋票六百萬元(全額出資済)を有するが大正十四年以來支那側當局要求たる林區權問題並に出資問題等に關聯して出資者(エシフチエンコ)と支那當局間に紛擾あり、之れが交渉のために殆んど事業中止の状態に置かれ、以後滿鐵の出資によつて小規模に營まれてゐたが、此地方唯一の顧客たる中東鐵道の不買壓迫に遭ひ悲況に沈滞してゐた。従て最近迄操業中止の處滿洲國成立と同時に復活し曩に中東が切斷した興安嶺中復驛イレクテ驛から二十六哩の伐木線も復舊する事に決し、更に最近枕木四百六十萬本の註文に接し伐採を開始するに至つた。要するに西部線の木材は其の輸送距離長く、海林方面より來る木材に對して遜色あり、又三姓方面より松花江を上げて來るものとの競争も困難なりと稱せられる。其の他黑龍江岸の森林は黑河、愛琿を中心に集散するが、地域も亦中心市場に遠く、未だ地方的需要を充すに過ぎない。

北滿材は、輸出市場と遠隔してをり生産材の大部分は中東鐵道用として消化せられ一部南滿並に浦鹽港を經由して各地に輸出せられてゐるのみで、將來に於ても先づ消化地は中東鐵道と看做されるが日本木材界の如何によりては浦鹽港を經由して相當木材輸出量を増加する可能性を有してゐる。

◎ 間島及琿春材に就て

主要森林は琿春河、密江、豆滿江上流及び海蘭河各流域が存在する。

此の地は日露戰爭前は露領方面を唯一の販路として、琿春材を生産してゐたが、明治三十九年、羅南(朝鮮)方面の發達に伴ひ、漸次北鮮に市場を擴げ殊に明治四十二年露國關稅の引上に反し四十四年には清津開港を見、更に大正六年清會鐵道の開通以後は内地朝鮮へ販路を轉向し、大戰中に於ける此地の白楊は日本の燐寸界を益したること大なりと言はれる。然乍大正八年の旱魃以降、九年の恐慌を蒙つた上、更に吉會鐵道の建設延期あり、爾來著しく衰微してゐる。

林業は日露戰前は露人の活躍を見たが、以後邦人の手に歸し、殊に大戰中は投資數一百萬圓と稱せられたが、現在主なる林場は、共榮起業が紅旗河、嘎呀河、海蘭河の流域に所有するに止まり、殆んど地元支那商の獨占に歸してゐる。現在の販路は、東朝鮮、支那及び裏日本に若干を有するのみである。

間島、琿春材は過去に於て四十萬石内外の生産をなしてゐたが、從來は運輸機關が不備であつたため、豆滿江本流並に琿春河及び嘎呀河の一部流域より伐採せられてゐたのみであつた。

最近滿鐵の調査により嘎呀河流域の森林は良好で且つ豊富なる蓄積を蔵することが明白となつたから、將來該地方



に運輸機關の設備をなしたならば吉林材と相呼應して一大活躍を見ることであらう。

#### 第四節 牧畜業

##### 一 家畜の種類

世滿蒙の地を家畜の天地と稱する。實に滿蒙に於ては家畜の飼養が遍く普及し農家各戸殆んど家畜を有せざるはなし。其の種類も牛、馬、驢、ラバの大家畜より綿羊、山羊、豚、鶏、鶯、鴛鳥、蜜蜂等の小家畜、家禽に及び尙蒙古地方に於ては役畜として小數の駱駝を飼育するあり又滿蒙に於ては警察機關不備なるが故に自家防衛の爲毎戸數頭の番犬を飼養して居る。抑々家畜は滿蒙の農業組織には缺くべからざるもので能く農圃の廢物を利用し其の排泄物を以て唯一の肥料となし、犁耕、鎮壓、中耕、培土、運搬、脱穀、調製等一として畜力に據らざるものなく、又其の生産物の利用が巧で殆んど餘す處がない。役用としては牛は關東州及び山岳地帯に多く利用せられ平原地帯殊に長春地方に於ては馬及ラバの使用が盛んである。而して各家畜の肉は總て食用に供せられ、其の利用が甚だ巧である。殊に支那人は愛畜心に富み家畜に接することが巧で、能く之を順致使役する一種天稟の技能を有する。彼の大車に五、六頭乃至十頭の牛、馬、ラバ、驢等を雜然と付け一本の鞭と懸聲を以て恰も一頭の動物を禦するが如く一齊に行動せしむる技能に至つては唯々賞讃の外はない。蒙古人に至つては元來遊牧の民であるから家畜は其の生活の唯一の資料あり茫漠たる草原は眞に天恵の牧場地である。即ち彼等は衣食住の爲牛、馬、羊等を牧し其の未開地方にあるものは今も尙水草を追ふて移動するのである。今滿蒙の家畜に就き簡単に述べると次の如くである。

##### ◎ 馬

滿蒙の地は良駝を出す自然の産馬地である。其の産馬は全部蒙古系であつて體高四尺二寸五分、體重七十貫が平均である。體軀は矮小であるが各部の均整は良好である。體質は極めて強健で粗飼、粗管理に堪へ持久力に富み、普通側對歩をなすものが乗用に、其の他のものが鞍用に使用されて居る。滿鐵昭和四年末の調査によれば滿蒙に於ける馬匹の頭數は約三百二十萬頭で內奉天省六十六萬頭、吉林省七十三萬頭、黑龍江省百萬頭、東部內蒙古八十一萬頭である。滿鐵沿線各地方の取引價格は平均最高二百五十圓、最低五十圓、普通百二十圓内外である。

##### ◎ 驢

支那に産する驢は大驢と小驢とあるが滿洲に産するは小驢である。體高三尺乃至三尺二寸、體重三十五貫位のものが多い。體質強健で粗食に堪へ其の力量は體軀に比して割合に大なるが爲農耕用のみならず家内勞働及び駄用として廣く使用せられて居る。滿洲に四十七萬頭、蒙古に十萬頭と推測せられる。

大驢は山西省、直隸省方面に産し體高三尺八寸乃至四尺八寸、五尺を超えるものも珍らしくない體重は五十貫乃至八十貫を普通とする。大驢は滿洲に於てはラバの生産用に供せらるゝのみにて一般に役用には使用されない。

滿鐵沿線各地方の取引價格は小型種平均最高三十五圓、最低十圓、普通二十圓内外である。

##### ◎ ラバ

牝馬と牡驢の交配に依つて産する雜種で歐洲及支那に於ては古くより居たが我が國には全く之を見ない。ラバの體軀は交配種の大小に依つて異なるが南滿一般に産するものは體高四尺三、四寸のものが最も多く長春地方に産するものは大驢の交配に依つて生産するので體高四尺六寸内外のものが多く時に五尺を超えるものも珍らしくない。



[268]

ラバは耕作運搬に使用せられ堅忍よく重役に服し役用期間長く粗飼少食、加之粗管理に堪へ価格は馬より高い。其の頭数は奉天省三十二萬頭、吉林省二十七萬頭、黑龍江省十五萬頭、東部内蒙古七萬頭、計八十一萬頭と註せられて居る。滿鐵沿線各地の取引価格は平均最高三百圓、最低六十圓、普通百四十圓内外である。

◎ 牛

牛は滿洲牛系統及び蒙古牛系統であるが前者は其の数が尠く大部分は蒙古牛である。支那人は力役の爲に、蒙古人は搾乳と力役との爲に飼養し肉は副食物として利用して居る。蒙古の牛は後軀の發育不良であつて各種經濟的能力は劣るけれども堅忍且つ従順で粗飼粗管理に堪へ又疾病に對する抵抗力が強い。體重は最大百四十貫、普通八十貫位で従つて肉量が少く且つ乳量も甚だ尠少であるから馬と共に將來改良の餘地がある。牛畜頭数は奉天省五十二萬頭、吉林省四十三萬頭、黑龍江省六十六萬頭、東部内蒙古百十二萬頭、計二百七十餘萬頭と報告せられてゐる。東蒙古には牛皮の産出が尠くないが皮質の悪いのと牛蠅の寄生の爲に主要部に多數孔損があるのを缺點とする。滿鐵沿線各地方の取引価格は在來肉牛平均最高百圓、最低三十五圓、普通六十圓内外で在來役牛も殆んど同様である。

◎ 綿羊及山羊

共に蒙古種であつて従來は肉用及び毛皮用として飼育せられ羊毛及び絨毛は副産物として取扱はれて居た。綿羊の體重は牝が七、八貫から十貫、牡が最大十五貫位で脂肪尾を持つて居るのが特徴である。山羊は綿羊より少し小さい。産毛量は甚だ少く綿羊の毛量は一頭三封度を超へない。毛質不量の爲め従來我が國では顧みるものなく大部分米國へ敷物絨原料として輸出されて居た。山羊の絨毛は品質良好であるが産毛量は一封度餘に過ぎぬ。何れも近來

我が國毛織工業の發達に従つて少からざる日本向輸出を見るに至つた。牧羊は南滿洲の支那人は山羊を本位とし蒙古に於ける蒙古人は綿羊を本位とするが共に皆多少の混牧をして居る。支那人は副業的に飼養するのみであるが家畜を以て生活資料の給源とし唯一の財産として居る蒙古人にとつては最も重要なものである。羊毛及び山羊絨毛の産額より其の頭数を推測するに奉天省四十八萬頭、吉林省十八萬頭、黑龍江省百九十四萬頭、東蒙三百二十萬頭計五百八十萬頭である。近年滿鐵會社の綿羊改良の試験が成功して漸次これが普及を圖るに鑑みて保守的な蒙古人及び支那人も綿羊改良の經濟的に有利なるを感ずるに至つた。滿鐵沿線各地方の取引価格は在來山羊の平均最高九圓、最低四圓、普通六圓で在來綿羊は平均最高十二圓、最低五圓、普通八圓内外である。

◎ 駱駝

駱駝は蒙古に産するのみである。雙峰種で體高五尺五寸餘を普通とする。寒氣に抵抗する力が強く力役騎乘に適するが爲めに蒙古に於ける重要な旅行機關である。頭數約四千と云はれて居る。

◎ 豚

[269]

豚肉は支那人の最も重用する處で農家は肥料と畜産收入を目的とし毎戸必ず數頭多きは十數頭飼養して仔豚の生産を爲し其の糞尿は肥料とする。頭數甚だ多く奉天省三百二十九萬頭、吉林省二百二十七萬頭、黑龍江省百七十九萬頭、東部内蒙古百萬頭、計八百三十五萬頭と稱せられる。滿洲豚には大型種と云ふ二箇年半で三十五貫位になるものと小型種と云ふ一箇年で十八貫位になるものと中型種と云ふ中間のもの三種ある。小型種は滿洲南部に多く北部に到るに従ひ中型種多く大型種は極めて少い。何れも頗る多産であつて一腹十頭乃至十五頭多きは二十頭を産む



[270]

其の宗毛は粗剛で長く刷子用として優良であつて海外にも相當輸出される。滿鐵沿線各地方に於ける豚の取引価格は平均最高五十圓、最低二十圓、普通三十圓内外である。

### 二 家畜の飼養

之等家畜の飼養管理は前述の如く極めて粗雑なもので滿洲では役用牛、馬、ラバは粗末なる小屋又は庭内露天に繋ぎ飼養は一般に粟稈を主とし包米稈、麥稈、野草、豆稈、豆莢を與へ濃厚飼料として高粱、豆粕、藪等を混へる。蒙古人は固より厩舎を造らず全く放牧のみである。支那人も縦し厩舎を造るも特に褥草を與ふることがない。豚は晝間開放し夜は豚舎に入れる。秋收穫後の圃上に餌を漁つて活潑に馳驅する光景はまた滿洲景物の一である。其の飼料には粟糠を煮て朝夕與へるを常とする。羊は滿洲では晝間は放牧し夜は柵又は小屋に入れ冬は貯へた野草を與ふることがあるが多くは冬も放牧する。蒙古人の放羊は夏は早魃を患へて水草を追ひ低地に移り冬は積雪を恐れて胡砂吹く風をおそれず高丘を覓めて其の居を移すのである。其の皮を以て衣とし其の乳肉を以て食となし其の毛氈を以て屋を包む等彼等の衣食住は一に羊に依らねばならぬのである。

### 三 畜産品の種類

#### ◎ 肉及肉製品

滿洲に於ける獸肉は廣く一般に食用として用ゐられて居るが慣習上或は宗教上から各種類によつて忌禁するものがある。一般に滿洲に於ける支那人は豚肉を重用し牛肉は比較的用ゐない。之に反して回々教徒は豚肉を用ゐず牛肉羊肉を用ゐる。蒙古に於ては羊肉を主とし牛肉之に亞ぎ豚肉は殆んど用ゐられない。鶏肉及び鶏卵は廣く用ゐられ

て居る。今滿洲に於ける家畜の屠殺概数を擧ぐれば左の通りである。

種別	滿洲	東部内蒙古	計
牛	六二、〇〇〇頭	二二〇、〇〇〇頭	二八二、〇〇〇頭
羊	九三、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	五九三、〇〇〇
豚	二、六四五、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	二、七八五、〇〇〇

最近日本内地に輸出せられつゝある肉用牛は一箇年約一萬五千頭に上り内約八割は枝肉として仕向けられて居る。肉類は加工業は滿洲の如き原料が豊富安價で勞銀の低廉なる所には有望なる事業の一であるが目下は奉天、大連等に日本人經營の小規模の(ハム)製造場と東支鐵道沿線に於て露國人の經營する小工場があるのみである。

#### ◎ 乳及乳製品

元來支那人は乳及び乳製品を餘り好まないが蒙古人は日常牛乳、羊乳を以て黄油(牛酪)、乃豆腐(乾酪)、乃皮子、乃酒等種々の飲食物を作つて使用して居る、而して純粹の乳牛は僅かに關東州及び滿鐵附屬地に於ける日本人並に東支鐵道沿線の露國人に依つて飼育せらるゝに過ぎない。

#### ◎ 皮革及毛皮

[271] 滿鐵殊に滿洲北部及び東蒙一帶は皮革工業の原料が豊富なるに拘はらず未だ進歩した製革工場がなく支那人は在來の燻煙柔法、皮硝柔法、張乾柔法等で作業を爲し蒙古地方の土人は牛乳柔法で製革して居る。現今之等原料の大部



[272]

分は生皮の儘歐洲及び天津方面に輸移出される状態であるが、其の集散地としては哈爾濱及び奉天が第一である。今試みに最近滿蒙に於ける家畜皮革、毛皮類出廻高を示せば次の如くである。

牛	皮	二四五、八〇〇	枚	馬及騾皮	三三九、七〇〇	枚
驢	皮	三四、六〇〇		緬羊皮	三五〇、〇〇〇	
山羊	皮	四七〇、〇〇〇		豚皮	僅	少
計		一、四四〇、一〇〇				

其の他毛皮類としては狗皮、猫皮、兔皮、貂皮、狐皮、狸皮、水獺皮、灰鼠皮、鼬皮、旱獺皮、山猫皮、貉皮、山狸皮、狼皮等主なるもので獸皮は黑龍江省、吉林省の北方産を最良として居る。

◎ 毛及毛製品

羊毛の全支那産額は大約六十萬擔で其の内滿蒙産額は七萬七千擔である。滿蒙の羊毛は品質概して粗悪で之が改良増殖は將來有望なる事業なので其の實現を圖るべく滿鐵に於て努力して居る。

此の外豚毛約三萬六千擔、馬毛九千擔、駱駝毛三千擔、牛毛若干を産する。

滿蒙に於ける毛製品の主なるものは毛子(支蒙人用敷物)、毛帽子(同上帽子)、毛鞋(同上鞋)、毛襪子(同上靴子)、氈子(絨氈)等である。

◎ 獸骨

牛、馬、ラバ、驢、羊、豚等の骨も亦其の産額が莫大であるが肉及び皮毛等に比し重量の割合に價格が低廉である爲重要視せられないが、最近茲に着眼して現に邦人經營の骨粉製造工場が二、三設けられ日本内地にも相當輸出しつゝある。將來之が利用工業の發達に伴つて其の出廻數量の増加すべきは當然である。

四 畜産市場及畜産物輸移出額

然して滿蒙畜産物の主要なる市場は奉天、天津、哈爾濱、鄭家屯、赤峯、張家口、錦州、長春、海拉爾等で就中奉天、天津、長春等は大消費市場として重要なものである。而して滿蒙畜産物の輸出額を摘録すれば大要左の如くである。

主要畜生物輸移出額表

(昭和五年度)

[273]

大	連	營	口	安	東	哈爾濱	關	管	内	合	計	數	量	價	額	數	量	價	額	數	量	價	額	數	量	價	額			
												價	額	數	量	價	額	數	量	價	額	數	量	價	額					
家	畜	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	頭	兩	
家	禽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽
獸	骨	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	擔	
100,900	10,333	301,392	870,376	211,392	355,335	33	43	31,555	69,922	100,900	101,601	101,601	3,611	201,562	45,195	3,960	8,950	421	266	1	207,014	40,071	201,562	45,195	3,960	8,950	421	207,014	40,071	



[274]

皮革	—	三、七〇、七四六	—	九四、五六	—	三〇、二六	—	九三九、八六七	—	四、七六、三九
羊毛	六、〇七	二三、〇九七	一〇、七四九	三五六、七三	二六	二、〇〇五	三、八二	九五、九七	二〇、七四	六、七、八二
豚毛	六、三五	一、二〇、六九	三、八	六、二七三	—	—	—	—	六、七三	一、七、九七
其他毛	五、九五	四、八六	三、六九	一四、五九	一五	八、九六	—	—	九、七六	五、四、三〇
角	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
牙	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
脂	三、六〇	五、八〇	—	—	—	—	—	—	三、六〇	五、八〇
鶏卵	三、〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—
卵	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

備考 右表は滿鐵調査課北支那貿易年報による。  
昭和五年海關兩一兩は日貨九二錢に當る。

右表に示す如く畜産物の内輸出額の大なるものは皮革を第一とし豚毛、羊毛之に亞ぎ他は僅少である。而して仕向地の主なるものは皮革にあつては歐米諸國向大部分を占め、羊毛は支那本土向が大部分で、豚毛は支那本土向が過半を占め合衆國向が之に亞ぐといふ。

### 第五節 水産業

#### 一 淡水漁業に就て

滿洲國の水産業は淡水漁業である。淡水漁業といふことは、一般日本人には解り難い問題である。それは日本の海洋が餘りに豊饒で、淡水生産は比較すべくもないといふ觀念に支配されてゐるからである。それでこゝに滿洲の河川の長さを日本のそれと對照して、先づ吾々の觀念を入れ換へて見ると、先づ第一、第二松花江一千七百六十六秆。嫩江が一千一百七十三秆。牡丹江が五百二十三秆。烏蘇里江が五百七十三秆。黑龍江本流が四千六百三十九秆(以上は新編支那年鑑による)遼河二千一百八十八秆(理科年表による)といふ數字が擧げられてゐる。そこで日本の大河の數字を並べると、信濃川三百六十九秆。石狩川三百六十五秆。利根川三百二十二秆。北上川二百四十三秆。木曾川二百三十二秆。十勝川一百九十六秆(理科年表による)で之等を合計した長さ即ち一千七百二十七秆は、松花江の一千七百六十六秆に略匹敵するものである。それから滿洲、殊に北滿には湖沼が甚だ多い。依てその全水面積も頗る大であるが、試みに主なるものゝ面積を日本のそれと對照して見るならば呼倫湖一千三百七十五平方秆。貝爾湖一千三百平方秆。鏡泊湖三百七十五平方秆。次に日本第一の琵琶湖の面積六百八十六平方秆。八郎潟二百八十六平方秆。霞ヶ浦一百八十七平方秆、呼倫湖一湖に於て僅に日本の三湖を呑み込んでしまふ大さである。長さ廣さが以上の如くであるに加へてその水量、殊に松花江系の水量が甚だ豊富で又日本の河川が多く急流であるに反し、滿洲のものは大陸の平原を流れる關係上、水勢急でなく、更に支流細流は、織枝網状となりこの大陸に擴がつて、陸水兩生物の生命を永へに維持する役目を務めてゐる。滿洲に於て、此の水系を、動もすれば忘却し勝ちなのは、他の産業の聲望に壓せられるからでもあるが、一つは左に述べた様な數字乏しかつといふことゝ、尙ほ一般の水態を日本人の頭の中で、特に區別して考へて見なかつたといふことが、大きな原因を爲しゐる。

[275]



滿洲の湖沼で従來産業的に利用されてゐたものは呼倫湖だけで、他は論ずるに足りない。加之河川の方もその大抱擁力の眞價を發揮するには前途尙ほ未だ遠く、只未來のみを残してゐるのである。こんな事情で、この産額その他數字上の統計等いふものが皆無で又統一的基礎的の調査も之迄施行せられたこともなく、唯部分的な個人の視察報告位の他に出不ないのである。それで河川湖沼の總體に就て明確な説明をするために安んじて據るべきものがなく、世間に紹介すべく頗る困却するのであるが、然しながらその水量の豊富、その抱擁域の廣大、緩徐なる水流、漁獲物の巨形肥大等の實情より推定するときはその生産力の將例は眞に驚くべきものである。

然して斯くの如き河江に於ける水産状況を遼寧省漁業商船保護局の調査によつて列記すれば南滿地方は河川に乏しく僅に鴨綠江、遼河、大凌河及蒲河等あるに過ぎない。此内鴨綠江の漁區は安東縣の上流八里より下流龍巖浦の間である。産魚は鯉、鯰を最とし、白魚等である。以上の外隨所の諸流にも産するが其數は多くない。漁朝は夏季を主とするが結氷期の前後に獨る數量にも侮り難いものがある。

いま鴨綠江の魚類に就て見るに白魚(三十萬貫)、鯰(三十萬貫)、鯉(三千貫)、鰻(二千貫)、ボラ(三千貫)其他スツボン、スズキ、鮒、ハゼ等で之等のものは生のまゝ或は適當に加工されて鮮滿各地に搬出されてゐる。

次に遼河の魚類は平時の水量比較的少く魚類(鯉、鰻、銀魚、鯰、會生魚、鮓、鮒、ハヤ、スツボン)も小規模に捕獲されてゐるに過ぎない。其總漁獲高は四百五萬八千七百斤(他に河蟹二十二萬四千三百斤)に及び、その價額四十六萬七千七百五十九圓に達する。

更に北滿の河川は夥しく各種の魚類を産し殊に第二松花江、嫩江、牡丹江、烏蘇里江は豊富である。其他呼倫湖、

貝爾湖、鏡泊湖、興凱湖の湖沼にも多く産する。

(一) 松花江中漁業の行はるゝは第二松花江と哈爾濱より新甸、三姓、佳木斯、富錦に至る沿岸である。

(二) 嫩江の漁業は上下流各所にて行はれてゐるが、最も旺なる地方は哈拉爾格より大賚に至る流域と嫩江に注ぐ洮兒河で殊に其合流點である月亮泡の漁獲高は頗る多く殊に夏季漲水するときは夥しき魚類の游集があると稱されてゐる。

(三) 牡丹江水系には魚類多く棲息し殊に鏡泊湖は夥しく魚族に富む。しかし乍ら同河系の流域には需要地なく、寧古塔、東京城に數戸の專業者が居るに止まる。

(四) 烏蘇里江で行はるゝ漁業は、ハバロフスクより興凱湖に至る間で本河の特長は鮭及びマスノ如き淡水海兩水魚の棲息することである。

次に湖沼漁業の行はれてゐる地方は呼倫湖と貝爾湖であるが、附近に大需要地の無きと、搬出上の不便がある爲に未だ盛んでない。然し今後に於て漁撈法の發達、交通に便宜を得るなれば鏡泊湖、興凱湖と共に北滿四大漁業湖として又淡水魚の大供給地として頗る注目し値するものがあると云はれてゐる。

(一) 呼倫湖—本湖は滿洲里を距る約四十露里、縦徑十三邦里二十七町、横徑六邦里九町、周圍四十四邦里、面積九十三方里を有する。

呼倫貝爾の魚産額は殆んど此呼倫湖漁場の豐漁如何に左右される。呼倫湖の魚産額は三十一萬布度と稱され、漁場經營者は二十六名である。



[278]

(二) 貝爾湖—呼倫湖の南方に位し、海拉爾の西南約二百露重呼倫爾と外蒙古との境界にある。形は圓形にして幅四十露里長さ六十露里内外にて呼倫湖と共に鹹水湖である。

(三) 鏡泊湖—本湖は牡丹江の水源地で魚族は著しく豊富であるが、齊古塔、東京城附近の小消費場を有するに過ぎず漁場は目下一箇所である。尙養魚池の設備があつて夏季の魚類を之に入れ冬期凍魚として附近各地に搬出してゐる。然しながらその漁獲高は不明である。

(四) 興凱湖は露滿國境の中間に在つて、南北八十一九十露里、東西六十一八十露里と云はれて居る。其の中約三分の二は露國領に屬し、殘餘は滿洲國領に入る。本湖の魚族は就中鯉、鮒、厥等が最も多い。然し現在は僅に冬季ボクラニーチナヤ方面に少量の移出があるのみである。漁業者としては專業のものなく南露地方よりの移出民が之れに従事してゐる位のものである。

### 二 漁業期に就て

北滿に於ける河川の漁撈は解氷期より結氷期に入る間に行はれるが地方によつては冬期に行はるゝ處もある。松花江下流地方及び嫩江の如きは夫れである。然し結氷後の漁撈は大部分舊正月前で舊正以後は概して行はれない。漁期の最盛時は主に春期解氷後の産卵時期である。

湖沼の漁期は大部分冬期十一月湖面結氷する頃より翌春二月頃の間である。尤も呼倫湖の一、二漁場では夏期も漁撈し、又烏爾順河、克魯倫河に於ては春期解氷時より約二箇月間に亘つて行はれる箇所もある。現在漁場は二十箇所を有し、漁撈高は三萬四千六百布度と稱されてゐる。

### 三 漁獵法に就て

#### (一) 曳網(打網兒)

北滿に於ける漁撈の代表的なもので、大なるものは長さ三十丈幅三丈餘を有する大網、一組の人員は十四人—十五人より二十人内外で、小網の場合は六—七人より八—九人内外である。

#### (二) 懸網

河川に依り大小あるが長さは河の幅に相當し、幅は水深と同様なるを常とする。懸網に依り獲得される魚類は狗魚の如く頭が割合大である。

#### (三) 待網

待網は副業的に冬期結氷の江上で行はれる。河中に木柱を立て其の下部の水中に懸網を沈下し魚の通過を遮り凍結を待つ。而して懸網の一端を破氷し孔を作りこの孔上に小屋を設けて漁夫の住居に當て、獲得する。

#### (四) 投網

我邦の打網にして下部の周圍一丈五尺より二丈に至る。使用に際しては小舟に乘じ河流に出で又徒歩にて岸に沿うて行ふ。

#### (五) 其他

拘網(小魚を捕ふるに用ゆ)箕子、釣釣、流釣、梁子等がある。

[279]

### 四 魚類



北滿の魚類は種類が多い。今その主なる數種を示せば左の如くである。

- (一) 鰲花魚(鰻) 大口扁身、脊鳍大、刺あり尾又大である。細鱗にして體灰色微かに黄色を帯び且つ大なる黒點がある。嫩江及び松花江の水系に多い。
- (二) 咸條魚 圓身にして小鱗、脊部稍々青色を帯び腹部は微黄色である。松花江、嫩江、呼倫湖の水系及び海拉爾河、額爾古訥河に多い。
- (三) 旁頭魚 體稍々圓く細鱗、頭小肉白色である。嫩江、松花江に産する。
- (四) 鯉 骨 河川、湖沼に産し殊に呼倫湖、貝爾湖に多く棲息し支那人、露西亞人に好愛される。
- (五) 鱖 魚 我邦の鮓にして北滿各河川、湖沼に産し殊に呼倫湖に多く産する。
- (六) 遍花魚(鯉子魚) 白魚に類似する淡水魚で、幅廣くその鱗は幾分大にして微かに黒色を呈してゐる。而してこの遍花魚は北滿に於ける各河川に産するが就中嫩江産のものが、最も美味とされてゐる。
- (七) 草根魚 形體頗る鯉に似てゐるが鬚無く鱗幾分大である。嫩江、松花江に多く産する。
- (八) 狗 魚 體圓筒狀にして長く、脊鳍は著しく後方に附着し尾鳍に接近して居る。露人は本魚及びその卵を最も愛好する。松花江及び呼倫湖の水系及び額爾古訥河水系に産する。
- (九) 鯰 魚 北滿各河川、湖沼に多産し、就中嫩江、松花江には四一五尺に及ぶものがある。此の呼倫湖、烏爾順河、克魯倫河各漁場で漁撈せられるものは脂肪に富む關係上露西亞人に愛好されてゐる。
- (十) 其他 黃昂子魚(鯰に類似するが小形)、鱈、皇魚(本邦のサメ又はテウザメにあたる)、汀莫哈魚(鮭に類似する)、赤眼魚(鱒)、鵝子魚(草哨魚)等がある。

五 漁獲高

北滿に於ける淡水魚一箇年の總漁獲高を推定するに大約百十萬布度即ち四百八十四萬貫に達する。いま之が漁獲高を地方別にして表示せば次の如くである。

地方別	漁獲高	貫換算
呼倫湖及同水系	三〇〇、〇〇〇	一、三二〇、〇〇〇
額爾古訥及黑龍江	一〇〇、〇〇〇	四四〇、〇〇〇
嫩江	二五〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇
松花江牡丹江水系	三五〇、〇〇〇	一、五四〇、〇〇〇
烏蘇里江系	一〇〇、〇〇〇	四四〇、〇〇〇
計	一、一〇〇、〇〇〇	四、八四〇、〇〇〇

六 鹽業に就て

◎ 沿革

滿洲に於ける鹽業の起源は未だ明確なる史跡の徵すべきものはないが、其の傳ふる處に據れば遠く黃帝の治世、既



に遼河東北の地に於て海水を煮熱して鹽を製造したと謂はれ、周代に於ても亦、燕に奉天省沿海の煮鹽を供給した事實があるから、其の源く所極めて遼遠なものがあると云はねばならない。

併し之等の清朝康熙以前に於ける製鹽は、總て煮鹽、即ち煎熬法に依つたものであるが、今日に見るやうな天日製鹽(晒鹽法)を初めて支那に見るに至つたのは、康熙年間(一六六二年—一七二二年)天主教の一傳教師が傳へたのを以つて嚆矢とせられ、康熙帝が廣く天下に示して大に其の公益を計らうとしたのに始まる。當時直隸省の沿海に模範的鹽田を開設し、且つ上諭を發し之を各省中晒鹽製法に適する各地の地方官に命じて鹽田開設の將勵を爲さしめた。其の結果該製鹽法の有利なことが一般民衆の知る處となつて爾來この方法に依る製鹽業は次第に諸地方に擴まつたのである。

滿洲に初めて此の製法が行はるゝに至つたのは、當時遼東に於ける荒蕪地の開墾の爲めに移住した山東、直隸地方民に依つて傳播せられたのに依ると傳へられてゐる。即ち同治元年(一八六二年)に蓋平管内二道溝地方に鹽田の開設を見たのを始めとし、越えて同四年關東州内鏡子窩地方の開設となり、漸次遼東半島沿岸一帯に其の開設を見、茲に始めて遼東半島が天日製鹽地として著名になつたのである。

#### ◎ 鹽田現況

滿洲國の鹽田は遼東鹽場と遼西鹽場の二場より成り鹽田面積は關東州鹽田の如く町歩を以つて表して居らず副數にて表せる爲、日本面積に換算することが出來ず、己むを得ず其の儘を掲ぐるが、大體に於て大副約四町歩、小副約二町歩に當ると云ふ處より推定したる(民國二十年現在調査)に依れば滿洲鹽田總面積は約九千五百町歩に當る。

#### ◎ 鹽田

鹽の生産は鹽田自體の良否、位置並に技能の巧拙等の關係に依つて異同あるは勿論である。特に滿洲に於けるが如く天日製法(晒製法)に依るものにとつては、天候の影響に依ること頗る大なるものがある。されば如何に其の製法に於て優秀なるものとするも、此の天候にして順調を缺くことあれば到底豫期の如き結果を見ることは困難である。

#### ◎ 製鹽法

大體に於て關東州に於ける製鹽法と大同小異で幾分關東州よりも粗製濫造の弊は免れぬが關東州に近接せる復州鹽場では相當優良鹽が生産されつゝある。

#### ◎ 東蒙鹽湖の概況

鹽湖の内最も大なるものはダブスノール(鹽湖の意)である。ダブスノールはチヨンホルノール又はエージノールとも云ふ。同湖は南北六支里、東西十三支里で中央より西半は水を湛え東半は小砂表面に顯れ其間大小幾多の小孔があつて孔の周圍に五寸乃至一尺餘の層をなし其上部は露出してゐる。東部内蒙古に於て現に採鹽してゐるのは之れである。

本湖の採鹽は烏珠穆沁、浩濟特二部四旗の者に限り許可し其他のものは滿漢人と雖も一切採鹽を許さない。採鹽者は普通一組數人で一百輛内外の牛輛を率ひ數日湖邊に野宿して日々採鹽し全車輛の積載量に滿つるを待つて目的地に搬出する。鹽湖は冬季氷結せず四季を通じ採鹽出來るが通常冬季は日光弱く春季は降雨多く採鹽の好適期は夏季である。鹽の結晶は水平層をなして存在し上層は之を上製と呼び純白不透明結晶の大粒にして降雨期に際しても液



化少く、又下層に鹽水の溜ることがない。主として王府の使用に供する。下層は下製と稱し稍灰色を呈し一般人民の使用品である。湖鹽は天然に産するものであるから外觀は美を缺くが鹽分は頗る強い。現在に於ては大體十三萬輛の牛車が集る。(一輛四百斤乃至五百斤)採取に随つて新たに凝結し、爲に産額も無限視されてゐる。其の産鹽額は全く鹽採者の多寡に比例する實狀である。一箇年の平均採取量は約百五十萬貫を下らぬと推算されて居る。本鹽の供給區域は熱河省、察哈爾省、奉天省の洮南を中心とする地方及び京綏線の一地方である。其他の鹽湖としては蘇尼特旗の西南約十八里の地に周圍一里に互る鹽湖がある。然し僅に附近住民の需要をみたすに過ぎない。

◎ 鹽政機關

鹽務署 鹽務署は營口に置き、財政部の管理に屬して鹽稅及び鹽務行政に關する事務を掌り、署長、副署長、事務官、技正、屬官、技士の職員を置く。鹽務署の下に場務局及び掣驗緝私局を置き、場務局は鹽稅の徵收及び産鹽の監督に關する事務を掌り、掣驗緝私局は掣驗及び緝私に關する事務を掌る。

◎ 吉黑推運署

吉黑推運署は新京に置き、財政部の管理に屬し吉林省及び黑龍江省に於ける鹽の專賣並に緝私に關する事務を掌り、署長、副署長、事務官、屬官の職員を置く。吉黑推運署の下に採運局、鹽倉、緝私局及び緝私隊を置き、採鹽局は鹽の購買及び運送に關する事務を掌り、鹽倉は鹽の販賣及び貯藏等に關する事務を掌り、緝私局及び緝私隊は緝私に關する事務を掌る。

七 關東州の漁業

◎ 漁場と其の地位

關東州を根據地とする漁場は北緯三十六度以北の黃海及び渤海全部の公海であつてその内抜魚圍漁場のみは日支協定により領海内に立入り漁業に従事することが出来る。

斯く斯業の發達は年々顯著であるが、水族の洄游、棲息饒多の狀況よりせば現在の關東州を根據とする漁業は漸く其の一步を踏出したに過ぎない。漁具、漁法、漁船の改善と新規漁船の開拓と相俟つて將來益々發展すべく殊に對支水産物貿易に至つては其の前途益々多望なるものがある。

然して關東州が水産に對し如何なる地位を有するかを先づ生産方面より見るに、黃渤兩海及び支那東海には廣大なる漁場を有し而して此漁場には支那人向魚類の極めて豊富な事である。次に水産物の輸入方面であるが此方面に於て關東州は最も有効なる調節者の地位に立つてゐる。尙販路方面を考察しても支那本部及び滿蒙は水産物の不足を感じ年々多額の輸入増加を見てゐるのである。殊に最近數年間の販路状態を見るに、從來鹽魚を嗜好する支那人に對し近時鮮魚の著しき増加は將來販路擴張に大なる望を齎す所以である。今後關東州水産會の活動と相俟つて關東州は益々大なる水産物集散市場となり他面我國に於ける過剰水産物の調節に貢獻し國家經濟に寄與する處大なるものがあるであらう。

◎ 日本人の漁業

邦人漁業者渡航は日清役當時からであるが明治三十九年關東州が帝國の租借地となるに及んで其數次第に増加し、



且つ支那人漁業者にして邦人の漁法を慣ふもの相亞いで興り爾來空前の盛況を呈するに至つた。其間官憲の保護と關東州水産組合に於て移住奨励を見た。出漁の當初は鯛の延縄を主とし今日尙延縄、掛網、打瀬網、機船底曳網、潜水漁業、捕鯨等に過ぎないが最近發動機附漁船の進出に依り、益々漁業區域を擴大してゐる。

今昭和六年末現在に於ける邦人漁業者の數を見るに一百十七戸、人員四百一人である。次に参考までに現在行はれてゐる主要漁業方法に就て見るに次の如くである。

- 一、延縄漁業 本漁業は關東州に於ける日本人漁業の主なるものであつたが機船底曳網の勃興から急に衰微し近來小型の發動機船を以て之に従事するものが増加して來た。その漁期は五月乃至十一月で盛漁期は五月及六月である。漁獲物は鯛の外フカ、エイ、スズキ、ヒラス、ニベ、コイチ等である。
- 二、機船底曳網漁業 大正九年の創始であるが、最近數年間は非常なる成績を擧げてゐる。即ち黃渤兩海及び支那東海は地質學上大陸棚で深度一百尋に充たず自然底曳の魚族に富んでゐるからである。現在關東州を根據とする此種漁船の噸數、馬力は區々であるが目下比較的成績を擧げてゐるものは四十噸八十馬力以上の新造船に多い。漁期は周年に亘つてゐるが主なる漁獲物はタヒ、カレイ、ヒラメ、グチ、カナガシラ、アジ、ホウボウ、エソ、エビ、エイ、フカ等である。
- 三、捕鯨業 大正五年五月東京捕鯨會社が海洋島へ作業場を設立せるに始まり今日に及んで居る。作業期は毎年三月下旬より六月下旬迄で漁場は海洋島の附近五十一—六十哩の海上である。種類は大部分長鬚鯨(普通六十—七十尺)で、このほかにザトウクジラ、コクジラ等があるがその數は極少である。

惟ふに六年度は概して季節遅れ勝ちなる爲め海温比較的低下し、游鯨も亦漸減し、且鯨は性機敏の爲め四月十三日事業開始以來僅に長鬚七頭(價格九千七百八十八圓)を捕獲せるのみで之を前年に比すれば二十二頭の減獲を示し、海洋島事業場開設以來未だ會つて見ざる不成績を告げた。

四、打瀬網漁業 本漁業は明治四十一—四十二年に始めて行はれたもので操業區域も廣いため一時相當の成績を示したが其の後稍々不振に陥つた。漁期は五月乃至十二月で、五月には鴨綠江でカナガシラを漁獲し、六月乃至八月にはヒラメを主としグチこれに亞ぎ九月乃至十一月には三山島東島沖合に移り十二月には山東半島北岸に移つて行くのである。

#### ◎ 滿洲國人の漁業

關東州の滿洲國入漁業は比較的發達し遠く唐代の頃より開始されてゐた。現在行はれてゐる漁法は風網、駐木網、延縄、流網、底利網、掛網、亮子網、桁曳網、地曳網、打瀬網、覃網等で此内風網は黃渤海に生れた特有の漁法である。近來日本人漁業に模倣して延縄、流網等を経営し又は日本型漁船を新造するものが年々増加してゐる。昭和六年末に於ける土着滿洲國入漁業者は九千三百八十二戸、人員二萬三千四百五人であつて其の漁法は大概次の如くである。

一、風網漁業 風網漁法は滿洲國入特有の漁法で、漁具は無囊旋網の一種に屬する。漁獲物(主としてグチ)は生鮮の儘沖合にて賣却し或は沿岸に運搬する。尤も漁場の關係により船内に鹽藏するものもある。漁船の大きさも現在では百石内外に達し其の操業隻數は二百五十隻餘である。



二、鱈延繩漁業 本漁業は滿洲國人漁業の首位を占め船型も年々大型となり現在では七十石に及ぶものがある。漁獲物は母船内に於て直に截割して散鹽漬となし、一漁期間一—三回歸港する。餌料はタコ、ボラ、サバ等がその主なるものである。

三、太刀魚延繩漁業 本漁法は古くから行はれ、之に沿岸出漁と遠洋出漁との二種がある。前者は五月より十一月にかけ本州沿岸二—三海里より七—八海里の海上で行はれ漁船は四—五石積のものである。

沖合に出漁するものは二十石乃至七十石で四月より七月にかけ三山島沖及び石島沖で九月より十一月にかけ威海衛沖で操業する。

四、駐木網漁業 本漁業は漁法頗る簡單であり且つ創業費安價なる爲め、大いに普及され滿洲定置漁業中の首位を占めてゐる。漁場は黄海方面では普蘭店、貔子窩管内に最も多く、渤海方面では金州灣奥一面に散在して敷設される。漁期は春秋二季に分れ、漁獲物は小エビ、イカ、イワシ、フグ、タチウオ其他の雜魚である。漁具は本邦のアンコウ網に類似する袋網で之にゴミ繩製魚捕部を附する。一漁場には潮流に直角に二十一—三十張を併列して敷設するのが普通である。

五、覃網漁業 本漁業の開始されたのは昭和二年からであるが其成績極めて良好である。漁具の構造は駐木網と殆んど同様であり、漁期、漁場も同一であるが其規模は駐木網より大である。一漁場に敷設する網数は十五—二十張を普通とする。

六、桁曳網漁業 其漁法頗る簡單で、老幼漁夫或は農閑期の農家の副業として近時其數著しく増加してゐる。漁具

は木枠と囊網と曳網の三部からなつてゐる。漁期は三月に始り十一月に終る。春季はナマコの漁獲を主とし秋季はカキの漁獲を目的とする。

七、亮子網漁業 本漁業は一種の建干網である。主として州内の淺海に敷設され其規模滿洲國人定置漁業中最大のものである。漁期は解氷期から結氷期まで、四月及び九月が盛漁期である。漁獲物はボラ、エビ、ハゼ、グチ、タチウオ、イワシ、サヨリ、ニベ、コノシロ等である。漁具は垣網及び魚捕部からなつてゐる。

八、黃華魚漁業 漁場の主なるものは威海衛沖、芝罘沖、拔魚園沖及び鴨綠江沖合であるが最も有名なるは熊岳城沖合である。毎年五月十日前後より約三週間の間、各地より約一千五百隻の漁船が押寄せ來り、漁撈に従事し毎年二百萬斤乃至四百萬斤(價格十數萬元)の漁獲高を告げてゐる。

## 八 水産物製造業

關東州に於ける本業は主として滿洲人間に限られ邦人の従事者は微々たるもので且つ日本人は水産物を多く生の儘にて食するを常とし、水産製造業とても極めて販路の狭い竹輪蒲鉾製造其他二、三種に限られてゐる様な状態である。然るに滿洲國人に至つては、彼等の主要漁業たるタラ、タチウオ、グチ等を鹽漬となし、廣く滿洲の大衆を相手にし總製造高の約八割は滿洲國人の手によつて行はれてゐる。

即ち五十餘萬圓の鹽乾鱈、二十餘萬圓の鹽乾太刀魚其他で何れも其加工製造状態は舊法を墨守してゐる。邦人の製品としては年額十七—十八萬圓の蒲鉾が大部分を占め之にフグ、カレイ、カナガシラ、グチ等の乾製品、ウニ、コノワタ等の製品あるに過ぎない現状である。



これは要するに従来の本州水産製造業の新製品が試製時代の域を出ず、在來製品は舊套を脱せず、たゞ漁業の進展につれて漸く其製造高も増加しつゝある状態に置かれてゐるからである。

### 九 水産施設

#### ◎ 關東廳水産試験場

關東廳水産試験場(大連市老虎灘)は明治四十年七月の創設にかゝる。水産に關する各種の試験又は調査を爲し當業者の指導便益を圖つてゐる。試験は漁撈試験、漁場底質調査、養殖試験並に製造試験其他漁場の探見調査、漁具の改良試験、海洋調査、淺海の利用調査及び養殖試験、水産製造試験等である。

此外調査事業として定地観測横断観測に分れ海洋観測を行つてゐる。現在實施されてゐる試験の種類は次の如くである。

- 一、漁撈試験は底棲魚移動に關する基本調査にあるが毎年旅順丸(百二十三噸五十三デール機關二百二十馬力)を出動せしめトロール網を使用し魚群の濃淡洄游の方面時期等を調査してゐる。
- 二、海洋調査は主として黃渤兩海に於ける海象を闡明し漁業の發達に資してゐる。
- 三、製造試験の種類 罐詰製造品類、乾製品類、加工品類、淹藏品類、鹽藏品類、調味品類。
- 四、養殖部は牡蠣養殖試験 公魚移殖及び採印試験、海羅養殖、蜆貝養殖の試験を行つてゐる。

#### ◎ 關東州水産會

關東州水産會は大正十五年五月の創設にかゝり本州水産業の改良發達を圖る事を目的とする公法人であつて事務所

を關東廳内に置き、大連、旅順、金州、普蘭店、貔子窩に各支部を設く。關東州に於ける漁業者、水産製造業者、水産物販賣業者又は保管業者は必ず會員たることを強要せらるゝ制度になつてゐる。現在會員數日本人二百餘人、支那人五千五百餘人である。同會現在の事業としては大連、旅順に於ける魚市場の經營、水産物の販賣調査、漁業必要品の供給施設、漁業資金の貸付其他水産上の講習講話、遭難救恤、會報の發刊等である。

#### ◎ 關東州機船漁業組合

關東州機船底曳網漁業組合を解散新に發動機船當業者を網羅し關東州機船漁業組合を組織する事となり昭和七年七月四日創立總會を舉行した。

#### ◎ 旅大魚市場

昭和六年度に於ける大連魚市場の業態は、他の業界同様稀有の受難期に當面した。殊に最近の漁業成績は發動機底曳網漁業の不振により、漁獲物の激減を呈し、其他の鯛延繩、打瀬、流網等の漁業も近年稀に見る不振に遭遇し漁業者全般に互り經濟的難局に立たしめた。

爲めに當業者は可及的漁業經濟の合理化を行ひ、減收の對應策に腐心した。従つてその取引高は數量に於て四百十一萬貫、價格一百八十六萬圓である。旅順魚市場も亦同様不振を來たしたし其の取扱數量は三十九萬貫(價格十七萬一千圓)、加工物三千三百九十三貫(價格四千六百七十一圓)、冷凍物七百二十四貫(價格九百三十一圓)に過ぎなかつたと云ふ不振振りであつた。

然し乍ら昭和七年に入つては相當活況を呈し、例年活況を示す十月には市場狹隘を感ずる程の好況であつた。即ち



大連魚市場の同月取引高二十七萬六千九百五十餘圓、六十四萬貫餘にして前年同期に比して約五割方の増加を示し、水産會設立以來の記録を作つた。

◎ 日滿水産株式會社

大日本水産會の伊谷會長は資本金一千萬圓の日滿水産株式會社設立の計畫を立て第一回相談會を開いたが之は日滿捕漁公司の權利を繼承し本社を大連に置き、奉天、新京、安東、營口に營業所を置くもので引續き相談會を開く事になつてゐる。

十 製 鹽 業

◎ 關東州の製鹽

關東州は滿洲國の鹽業の項に記載した如く最も古くから製鹽を以つて知られてゐるが、吾が施政下に置かるゝに及んで邦人鹽田の開設を見るに至り、茲にまた新たな生面を開き、今日見る世界屈指の一大天日製鹽地が現出するに至つた。

關東州は降雨少く蒸發量旺盛なるに加へ大氣乾燥せるため天日製鹽に適し今や鹽田面積六、九九一、六四町歩、産額四一五、七七七、五六二斤の盛況を見、今後需要の如何によつては鹽田の擴張生産の増加を圖り鹽の一大供給地となすことも極めて容易且つ有利であると見られてゐる。

然して關東州の製鹽は總て天日製鹽法である。即ち鹽田内に直接海水を濃縮結晶せしめ鹽田の構造も内地と其趣を異にし、其形式は地勢慣習其他種々の事情に依り扇形長方形又は流下式汲揚式等一定しないが其内容に至つては貯

水池蒸發池、結晶池の三池に依り構成せられ之に附隨せる外堤畦畔各種の溝渠、堆鹽場等の設備を有する一劃を以つてする。一鹽田の面積は小なるものは四—五町歩より大なるは四十町歩に及ぶものがある。

今昭和六年末に於ける州内の鹽田面積を徴するに六、九九一、六四町歩にして之を管内別に示せば次の如くである

管内別	面積町歩
旅 順 管 内	一、一三一、四九
大 連 管 内	四三、三〇
金 州 管 内	八一、五〇
普 蘭 店 管 内	二、七一七、五九
貔 子 窩 管 内	五四二、七七
計	六、九九一、六四

尙ほ關東州沿岸には今後鹽田として開設し得る適地が多く存して居るので關東廳では大正十四、十五兩年度に亘り沿岸全部の鹽田適地調査を施行した結果に、次の如き廣大なる面積の現存せることを確めた。

管内別	第一適地	第二適地	計
旅 順	一五六、六二町歩	一一、五三町歩	二七二、一五町歩
大 連	二二六、三〇	一	二二六、三〇



[294]

金州	四九一、五八	八〇一、六七	一、二九三、二五
普蘭店	二、四九七、六〇	一、二三八、三六	三、七三五、九六
貔子窩	四、〇七〇、七五	四五八、九二	四、五二七、六七
合計	七、四五二、八五	二、六一四、四八	一〇、〇六七、三三

◎ 鹽生産状況

天鹽の生産は鹽田自體の良否、位置並に作業者の巧拙等の關係によつて異同あるは勿論であるが、特に州内の如き天日製法にあつては天候の影響による事が頗る大である。尙ほ今後産鹽額は新田の熟成及び製造並に賣れ行きの増加に伴つて、増大するものと見られてゐる。

◎ 州鹽の販路

關東州産鹽の主なる販路は本内地及び朝鮮である。

最近數年間に於ける州鹽の輸移出状態を見るに、各製鹽業者は關東廳當局と協力して一意販路の擴張に努力し、昭和四年新嘉坡方面へ試験的の輸出を試み、或は輸出奨励金を増額するなど、大に盡す處あつた。尙ほ近年内地に於ける化學工業の急激なる發達は之が原料たる鹽の需要を増加し又内地不良鹽田整理の爲め、州鹽の需要漸く増加せんとする情勢にたち至つたので旁々州鹽販銷の前途は好轉し、巨額の持越鹽も數年を待たずして消化されんとする状態にある。

◎ 州鹽と曹達工業

關東州の採鹽豫想高を見るに年産額約六億斤にして尙ほ此の外適地全部の鹽田完成後に於ける生産見込は九億一千斤に達すべく合計十五億斤の生産に達する見込である。

由來曹達工業は化學工業中最重要な地位を占め日本の國策上最も密接なる關係にある。幸ひ日本の關東州鹽は天日鹽である爲めに生産費極めて少なく且つ生産量も豊富なるを以つて州内に於ける曹達灰製造業は最も有望なる事業であつて、早晚必ずや之れが企業計畫も實現さるべきものと見られてゐる。

◎ 輸出鹽の検査

關東廳は州鹽品質の根本的改善を計るため輸出鹽の品質検査を昭和三年六月一日より施行することになつたが、其の結果の色相は従来よりも白色となり、需要地の評判も良く引続き之を施行して居る。

◎ 再製鹽並加工鹽業者

州内に於ける現在の再製造業者數は本邦人四、支那人五にして此内規模大なる工場を有するは東洋拓殖株式會社にして其の他は何れも小規模である。東洋拓殖株式會社は旅順に再製鹽工場を有し製造能力一箇年八百萬斤で其製品は大部分專賣局に納入して居る。加工鹽は大日本鹽業株式會社雙島灣工場にて製造して居るが一箇年の製造能力は粉碎洗滌鹽四千萬斤洗滌鹽三千萬斤である。製造鹽の内、粉碎洗滌鹽は勘察加方面の漁業鹽に、洗滌鹽は内地工業鹽に全部仕向けて居る。其他の小工場に於ける製鹽は専ら州内の需要に供給するものである。

[295]

尙ほ大日本鹽業會社は現在旅順雙島灣工場の外更に約二十萬圓を投じ貔子窩東老虎灘採鹽場に約八千萬斤の生産能



[296]

力を有する粉碎洗滌鹽工場を設置した。  
食卓鹽の製造工場は大連市に邦人經營のもの一つあるが極めて小規模のもので其製造高は六千—七千斤に過ぎず販路は州内及び南滿鐵道沿線各地に限られてゐる。

#### ◎ 製鹽の輸出獎勵

州内に於ける天日製鹽の事業は將來之を發達せしめ得る諸要素を充分具備してゐるが、現在のところ産鹽の消化充分ならず年々多額の食鹽を持越す状態にあるので、關東廳は輸出を増進し斯業の發達を助長せしむる必要を認め従來毎年度豫算に製鹽輸出獎勵金を計上し、内地工業鹽及び内地以外の輸出鹽に對し該豫算の範圍に於て、輸出鹽に割當夫々獎勵金を下附することゝして今日に及んでゐる。

#### ◎ 鹽業調査及び試験

關東廳は州内の鹽業をして生産増進、品質改良、副産物利用、副業の創始、運輸方法の改善等に因り良鹽を廉價に供給し又將來鹽田開設及び企業に對し指導するの目的を以て大正十五年度より鹽業の調査及試験を開始してゐるが調査及び試験使用の鹽田は旅順港内に於て個人鹽業者の開設せる二十一町歩餘の新設鹽田を借上げ之に充當し各種の試験調査を行つてゐたが、鹽田面積の狭小、位置の不便等事業遂行上の支障があつたため昭和二年度に於て旅順市街西端にある港内干潟地は約三十町歩の試験鹽田を築造し、昭和二年十月起工し昭和三年末竣工したので目下該所に於て各種の試験調査を行つてゐる。併し尙ほ面積の狭小を感じて居ると此の製鹽に關する試験研究は將來食糧並に工業資源問題の解決上極めて緊急必要の事項である爲め、更に大房身灣内に百九町歩の鹽田及び廳舎官舎を

新營することゝなり、昭和五年度より着手して昭和七年度に完成を告げる豫定であるが、竣工後は昭和八年度より旅順鹽田を合併して新たに鹽業試験場として獨立した試験機關とする豫定である。

#### ◎ 州鹽の振興策

關東州鹽の品質向上、生産増加、販路擴張に關する振興策は官民各關係者により講ぜられてゐるが現在の過剩鹽に對する處理に就て(一)鹽稅の低減並に賦課方法の改善(即ち現行鹽稅百斤當り金十錢は高率に失するのみならず其賦課に當つては非常に複雑なる手數を要する)(二)輸出獎勵金の増加(三)販路の開拓に就て内地專賣局の買上率を高めること(四)州鹽の買入に關する統制を圖り他面營業者の機關として鹽業組合を組織することが議せられてゐる其他州鹽の増産方法としては連續結晶法を、又品質改善法としては洗取式と注水式の混用、更に運搬方法としては機械力による戒克船の積却し等が提唱されてゐる。

### 第六節 鑛業

#### 一 鑛業の沿革

[297]  
抑々今より一千年前、遼の大祖は鞍山に製鐵業を興し、東京(今の遼陽)に鑛岩監督部を置き鑛稅として鉄鐵を徵收せしめた。當時製鍊に従事する者首山の附近に三百戸あり、その當時の探鑛の跡は現在鞍山製鐵所の鑛區内に時々發見せられる。又撫順老虎臺方面及び太子河沿岸の諸炭鑛には高句麗時代に稼行せられた歴史を有するものが多い降つて清朝に至つて、滿洲は同朝發祥の地たるの故を以つて滿洲族人のため封禁の地とし、漢人及び他族の移住に對し門戸を閉鎖した。後此の禁止令の効無きを見て在京の旗人等に封地を割當て經費を國庫より補助して歸農を獎



勵したが族人等は歸農を喜ばずしてこの歸農策も失敗した。然るに前紀の半頃から北方アムールを渡つて侵入した露人の爲めに滿洲の沃野は北滿より脅威を受けるに至り、清朝に於ては、滿洲の人口充實の必要から急に移住の禁を解いた。茲に於て多數の漢民移住の緒が開かれたのである。

田師付溝、賽馬集、牛心臺、本溪湖等の炭礦は清朝の初期から發見或は先に高句麗族の稼行せし跡を再發見せられたが漢人の多數移住した感豊、同治年間には著々開發せられた。然しながら六、七十年前の東山山地、殊に其邊外の地は人煙未だ稀薄で荒涼たる新開の地であつて民度も甚だ低いものであつたが本溪湖、田師付溝、賽馬集その他炭礦に於ては光緒末年頃(日露戦争直前)迄は土法ながら盛に稼行せられた。就中、本溪湖及び賽馬集炭は強粘結性で良質の塊炭を得られる處から、前者は廟兒溝、牛心臺、八盤嶺等、又後者は弟兄山の鐵礦を採り地元の塊炭を用ひて製鐵業發達し、農具、家具等の鐵工業の中心となり相當に股賑であつた。この當時でも撫順のみは清の太宗の福陵(奉天東陵)に近く風水に害ありとし開掘を禁じられてゐた。次で日露戦争を一轉機としこの状態が一變するに至つた。即ち本溪湖及び賽馬集の鐵工業は輸入外鐵のため全く没落し、燃料用採炭と小規模の塊炭製造業のみが取残され本溪湖以外の奥地土法鐵山は細々と舊態を維持するに止つて居るが、鐵道沿線殊に滿鐵沿線は近代的設備を以つて急速に開發せられた。奥地は昔ながらの土法による小規模の自足經濟であつて沿線に對して重要な寄與をなさず、又沿線に産出する莫大な鐵産は沿線に需要せられる以外は主として海外に輸出せられてゐる。

日露戦争に依つて滿鐵の經營に移つた撫順、煙臺兩炭礦及大倉と支那側の合辦となつた本溪湖炭礦並廟兒溝鐵礦を始め鞍山鐵礦は近代的設備を以て急速に開發せられた。それ以外の鐵山は鐵道沿線附近に於てすら政治的困難のた

め組織的開發が阻害せられ、奥地に於いては殆んど新なる企業を見ずして今日に及んでゐる。

即ち大正四年日支條約に依る滿蒙九鐵山の採掘又は採掘權は舊官權の狡猾な排外手段のため、滿鐵沿線の鞍山鐵礦及牛心臺炭田の一部を除き他は全く空名に歸して居る。

滿鐵幹線及び安奉線の鐵山は明治四十二年九月の滿洲五案件に關する協約に依り邦人の合辦權を有するので滿鐵沿線で邦人の關係した鐵業及び鐵業權は前記の撫順、本溪湖を除いて數に於て決して少くはないが、その中注目し値するものは僅に五指を以て數へ得られるのである。日本人の關係せる鐵業は、關東州の石灰石、苦灰石、硅石を別とし大石橋附近のマグネサイト、復州五湖咀の耐火粘土、海城附近の滑石、青城子(安奉線通遠堡の西方)の銀鉛鐵盤嶺(草河口の北東)及び馬鹿溝(本溪湖上流)の銅鐵、林家臺その他の黃鐵礦、西安、陶家屯、昌圖及び瓦房店の石炭等であるが、この中、從來滿洲の鐵業に稍々重きをなしたものは、銀鉛鐵とマグネサイト並に粘土で之等は種々の意味でその將來が大いに期待せられてゐるが、滑石は鐵區問題に關し支那側と紛争が絶えず、銅、黃鐵礦及石炭は從來大鐵業として數へるには足りないものであつた。沿線外の地方では、夾皮溝金鐵、新邱炭田弓弱嶺鐵礦、西安炭田明治鐵業鐵區、間島天寶山銅鐵及び老頭兒溝炭礦は邦人關係の重要鐵山であるが從來は地理的或は政治的事實から大規模の産出を見てゐない。

〔299〕  
この間、東北官權は、外人合辦禁止令(民國五年)或は國土盜賣懲罰令(民國四年)等の密令を發布し、或は己存の協定に對しても、その細則を殊更に複雑、あいまいならしめて鐵業開發に對する日本側の絶えざる努力を妨害すると共に一方獨力を以て鐵山の開發を計つて來た。即ち遼東八道濠炭礦北票炭田、西安炭田、五湖咀炭田、大嶺滑石鐵



ハルビンの北東なる鶴立崗炭礦、吉黒兩省の砂金等が之である。

尙ほ東支沿線には露支合辦の札賚諾爾炭礦(滿洲里附近)及び穆稜炭礦(東部線)がある。

張學良の施政となるに及んで排日は愈々烈しく、昭和五年五月には最も排外的の新鑛業法を公布し、鐵鑛、石油、銅鑛及び骸炭の採掘を國營とし、貸下げを行ふ場合は借受人は支那人に限ることとし、且つ政府に於てその優先買收權を保留し、この種重要鑛山に對しては外人の鑛業權を徹底的に排撃せんとした。最近には、撫順炭輸出稅協定破棄問題、撫順オイルシエール採油權否認問題、振興公司に對する鐵捐増徴問題、大石橋附近マグネサイトの鑛區問題を惹起し、又大嶺の滑石鑛區を沒收し、煙臺附近で日本人と協同せんとした支那人を國土盜賣となし投獄したこともある。一方學良は直系の東北鑛務總局に依つて五湖咀及び八道濠各炭坊及び大嶺滑石炭山、輯安報馬川金鑛を經營し、又邊業銀行、潘海鐵路及び兵工廠を通じて西安炭田を開發して日本側に對抗し事態は愈々急迫し來つたのであつた。

### 二 鑛産物の種類

滿洲の鑛業は農業と共に夙に二大利源と稱せられてゐる。然るに従來土地の開掘を不祥事として封禁し或は利權擁護を名として進んで開發の策に出でなかつたが近年我が國の發展と共に、稍開發の見るべきものあるに至つた。鑛物の種類は多くないが其の埋藏量は非常に豊富である。滿洲の鑛産の中で最も重要なものは石炭と鐵である、又鑛業上の特産とも稱すべきはオイルシエール、マグネサイド、アルミナの含有量多き礬土頁岩並に骸炭用石炭である。其他良質の耐火粘土、石灰石、ドロマイト、珪石を産し、製鐵並に窯業原料には大いに恵まれてゐる。

### 三 炭 礦 業

滿洲四省の炭田は大小七十箇所で、現在稼行中のもの三十箇所である。埋藏量は最近の計算に依ると約四十八億噸と豫想せられるが之は舊坑區域及天然の條件の悪いものをも加へて居るから將來企業の對照となる數字は先づ三五億噸位であらう。

現在稼行中の炭田埋藏量内譯

日本 關係 (撫順その他)

(單位一〇〇萬噸)  
約 一、七〇〇

東支鐵道關係 (札賚諾爾其他)

四〇〇

滿洲 國 側

二、一〇〇

大炭田で從來殆んど未著手と云へるものには、吉林の密山、熱河の新邱その他がある。炭田は各地に分布し、炭質は褐炭より高度無煙炭迄あらゆる種類を網羅し、鐵道はどこに敷設せられても燃料に大して不自由を感じない。南滿洲で重要なものは撫順と本溪湖である。前者は埋藏量九億噸といはれ、既往出炭累計十億噸である。撫順炭は低溫乾餾、液化或は完全瓦斯化等化學工業原料として利用價値が多い。本溪湖炭は日本に缺乏せる製鐵用骸炭原料として大いに貴重な特殊炭である。

東支沿線では札賚諾爾及び穆稜炭坑があり、之等は褐炭若くは低度瀝青炭で炭質劣等であるが近年ハルビンの下流鶴立崗炭坑が開發せられ極上等の中度瀝青炭を産し北滿の大勢力となつた。



熱河省方面は主に低度瀝青炭であるが骸炭原料炭も産出する見込がある。

滿洲全體で昭和四年の出炭九百九十萬英噸の中五百萬英噸弱は輸出炭で餘は地元消費である。今後需要が喚起せられて四省の石炭を開發する場合、年額幾何迄出炭出来るかと云ふに確實な算定基礎はないが年額二千五百萬噸乃至二千萬噸位と推定せられる。

◎ 撫順炭礦

一、炭層 第三紀始新乃至新統に屬し大體に於て朝鮮及び九州の含炭層と同一時代の成生である。主要炭層はその厚い事では世界で一、二を争ふもので、厚さ塔連附近で約十米古城子附近では百米以上に達する。この厚層は部分に依り多少特徴があるので上磐から順次富士、大和、朝日、常盤、櫻の各層に分られてゐる。尙ほ主要炭層の下方に下部夾炭層があつて厚さ〇、三―十五米の炭層が三枚ある。炭層は露頭の延長東西十六杆層向東西で北方渾河に向つて約三十度の傾斜を有する。

二、炭質及び埋藏量 骸炭性状は龍鳳弱膨脹粘結性、他は弱粘結性である。即ち低度瀝青炭に屬し東部に行く程、炭化の度が進んで居り固定炭素及び灰分が増す。就中、著しい事は概して窒素の含量が多いが東部に於て特別多量を有する事である。鈴木庸生氏に依れば肥料としての窒素は一噸約三百圓であるから撫順東部炭は燃料價値以外に一噸九圓近くの窒素に依る價値があると云はれてゐる位である。全體として灰分少く而かも灰分の耐火度はS・K八―二〇番で甚だ高く、クリンカーを生じない事は定評のある處である。蒸汽炭、窯業、セメント工業に好適であるが、低温乾燥用には最も優秀である。進んで液化或は完全瓦斯化等も大いに囑望せられてゐる。要するに普通燃

料として使用するよりも之等の方法により高價な副産物を回収し化學工業原料として利用する様になれば、撫順炭は愈々その眞價を發揮する次第である。骸炭原料としては鞍山製鐵所で研究の結果、本溪湖炭と混炭し龍鳳炭八、本溪湖炭二の割合で上等の製鐵用骸炭が得られる様になつた。埋藏量は約九億五千萬噸と推定せられる。

◎ 本溪湖炭礦

一、炭層 古生代二疊石炭紀に屬し平壤又は開樂炭田と同一時代の成生である。炭層十七層の中主要なるものは八層である。炭層何れも〇、六一―三、〇米である。露頭の東西延長約六杆南方に十一―二十度(時に三十五度)傾斜する。二、炭質及び埋藏量 炭質は高度瀝青炭乃至半無煙炭に屬し、強粘結性で製鐵用骸炭原料として最好適である。この骸炭用炭は日本に於て最も缺乏してゐるもので本溪湖炭は製鐵原料用特種炭として最も重要性のあるものである。埋藏量は現採掘區域附近(確實)約一億噸、深部を合すれば推定埋藏量約二萬二千萬噸と推定せられる。

◎ 煙臺炭礦

滿鐵線煙台驛の東方十六杆にある。

炭層は二疊石炭紀の成生で舟底状向斜構造を成し、長軸の延長は南北約七杆である。炭層は十八層、中主要なもの四層、厚さ夫々一、二―二、〇米ある。

炭質は半無煙炭乃至高度無煙炭で稍々硫黄の多い缺點はあるが火力強く煉炭として好適である。埋藏量約四千萬噸を豫想せられてゐる。

本炭田は遠く唐朝に開坑せられ續いて高麗族之を採掘し後清朝の半に至つて吳氏なる者世襲採掘權を得、繼續採掘



[304]

となし明治二十八年頃英人々に投資した事があつたが後東清鐵道の經營となり、三十七年九月我が軍之を占領し四十年滿鐵に引繼がれ撫順炭礦の支礦として經營され明治四十三年十月營業坑となつた。數百箇所の舊坑跡は山腹を繞り往時の亂掘の跡を偲ばしめる。滿鐵は初め華子溝の一斜坑のみ採掘したが昭和元年新斜坑、更に昭和五年南坑の採炭を開始した。最近の採掘には粘土ブロック充填法を用ひ大いに好成績を示してゐる。

◎ 五湖咀炭礦

普蘭店の西方四十軒の海岸に位し二疊石炭紀に屬し炭層三層、合計層厚一、五―七、五米であるが主要なのは一層である。埋藏量一千萬噸以上の見込である。良質の無煙粉炭を産し、海路内地方面及び大連、營口、芝罘、安東等に輸出せられてゐる。周文貴の經營であつたが昭和三年以來張學良系の東北礦務總局直營(資本二百萬元)となり、噸に出炭を増して年額二十萬英噸内外を産し、既往累計は百萬英噸に近い。海岸に位し、輸送至便で而かも内地方面煉炭原料として鴻基炭に對抗し得べく大いに將來を囑望せられてゐる。

◎ 牛心臺炭田

本溪湖の上流二十軒、太子河の南岸に位し、溪域輕便鐵道終點である。二疊石炭紀に屬し、炭層四枚の中主要なのは第三層(厚さ一―一、五米)である。炭質は煙臺炭に類し無煙粉炭である。順治七、八年頃山東人之を發見したと云ひ、光緒の初頃より相當盛に採掘せられ、大正三年石本貫太郎氏中日合辦紅臉溝復興煤礦公司(資本金五十萬圓)を設立今日に至る。大正四年日支條約の滿蒙九礦山の一であるが、隣接支那側礦區との間に屢々紛擾があつた。最近出炭年額六一七萬英噸、既往累計五十六萬英噸である。

◎ 西安炭田

奉海線梅河口北西で(鐵道支線あり)侏羅白堊紀に屬し炭層は一―二層、厚さ夫々一―五米で瀝青炭を産する。中生代炭としては比較的水分少く、發熱量六、五〇〇―七、六〇〇カロリーで良質である。埋藏量は一億噸以上と信ぜられる。區域の一部は明治礦業(安田)礦區で他の支那側礦區は近年張學良系の邊業銀行、潘海鐵路と合辦資本二百二十萬元となり専ら同鐵道用炭を供給してゐた。近年出炭高約十萬英噸、既往累計六十八萬英噸である。

◎ 田師付溝炭田

本溪湖の上流百軒。夾炭層は二疊石炭紀及侏羅紀兩層がある。前者は本溪湖炭類似の粘結性瀝青炭を産し、後者は無煙炭を産する。總埋藏量約六千萬噸その中、約四分の一は粘結性炭である。粘結性炭は從來骸炭原料として土法で採掘せられたが近年殆んど休止し、無煙塊炭のみ少量の出炭があり、煖房用として奉天その他都市に歡迎せられてゐる。斯の様に粘結性炭及び無煙塊炭の特殊炭を有する點で注目せられてゐるが輸送の便なき感がある。近年土法の出炭額一―二萬英噸である。

◎ 八道溝炭礦

打通線上にある。侏羅白堊紀に屬し低度瀝青炭を産する。含炭區域二十平方軒、層厚合計九米、埋藏量二億噸と稱せられる。本炭礦(資本一百十七萬元)は張學良系の東北礦務總局の經營で出炭年額六萬英噸、既往累計五十五萬英噸である。支那側は本炭礦に發電所を設立し錦州を中心に奉山線及び打通線沿線に電力を供給してゐる。

◎ 穆稜炭礦

[305]



[306]

東支鐵道東部線下城子驛の北方六十四杆。吉林省政府と穆稜煤鐵公司合辦の廣軌運炭鐵道(六十杆)は大正十五年三月開通した。

上部侏羅紀の成生に係り、炭田の基磐は二疊石炭紀の變質岩より成る。炭層は三層合計厚二、五米、現在第二層(厚さ一、〇米)を採掘中である。傾斜平均十二度である。

炭質は低度瀝青炭、弱粘結性で撫順炭よりは稍々劣り塊四、粉六の割である。炭量は七千五百萬噸と推定せられ大炭礦である。

明治末年頃發見せられ、大正十二年露人スキデルスキー私かに試掘したが、濱江道尹は之を禁じ、吉林省政府と露人の官商合辦(資本六百萬元)を以つて經營する事とし豎坑を開鑿し十六年迄に一切の設備を完成した。

既往出炭量は次の通りである。

(單位噸)

一九二五年	九四、〇三四
一九二六年	一三四、九〇七
一九二七年	一六九、三〇〇
一九二八年	二八一、〇三七
一九二九年	三五〇、〇〇〇
一九三〇年	三二二、六〇〇

本炭礦は資金關係から東支鐵道と密接の關係がある。出炭は主として鐵道用炭であるが餘力を以てハルビン、チチハル迄その販路を有し、北滿第一の大炭礦である。

◎ 火石嶺炭礦

吉長線下九臺驛の北東にある。侏羅白堊紀に屬し、低度瀝青炭(發熱量五、二〇〇一六、三〇〇カロリー)を産する滿洲人の經營で近年出炭高十萬英噸に達し吉長線鐵道炭及び附近に販路があるが含炭區域狹小で將來を望まれない

◎ 蛟河炭田

吉敦線蛟河驛附近にある。南北三十三杆、東西十一二十杆の廣大な面積を占めてゐるが、從來採行せられてゐるのは北東部の乃子山附近その他の一部である。侏羅紀に屬し炭層二層、合計層厚二米(厚い部分六米)と認められる。水分及一〇一五%、灰分二〇%内外、發熱量五、二〇〇一六、〇〇〇カロリーで炭質は良好でない。

埋藏量は支那側計算に依ると全區域四五、六〇〇萬噸と稱するが、未調査區域が多く炭量は未知數である。昭和元年滿洲國人の開坑に係る。

◎ 老頭兒溝炭礦

[307] 間島天圖鐵道終點にある。敦化―老頭兒溝間吉會豫定線に沿ひ一〇五杆、老頭兒溝―清津(又は雄基)間約二二〇杆である。侏羅紀に屬し炭層四層、厚さ夫々〇、七一、〇米ある。炭質は水分一〇%、灰分一〇%内外、發熱量五、六〇〇一六、七〇〇カロリーで西安炭よりも劣るが吉會沿線では最上等に屬する。埋藏量は相當に多く將來年額三十萬噸出炭の設備をなし得ると云はれてゐる。光緒十七年開坑、大正七年飯田延太郎氏、吉林實業廳と官商合辦老



[308]

頭兒溝煤礦公司を設立し大正十二年以來繼續採掘中である。近年出炭高約二萬英噸既往累計十萬英噸に過ぎないが吉會線開通の際には全沿線中の良質石炭として相當活躍すべく期待せられる。

◎ 密山炭田

東支東部穆稜の北東にある。密縣を距る東方一二〇杆、石炭埋藏區域は廣大で東西六十杆、南北三十杆に達する。上部侏羅紀に屬し其盤は二疊石炭紀の變質した雲母片岩及び結晶質石灰岩から成る。上部には白堊紀の礫岩がある附近には中生代花崗岩及び第三紀玄武岩等の影響が多い。炭層は僅かに一枚層厚一、五米と云ひ或は四米とも云ふ。炭質は瀝青炭及び高度瀝青炭で一部粘結性のあるものがある。

埋藏量は

(單位一、〇〇〇萬)

小黃泥河	一一四、〇〇〇
適道河子	一〇〇、〇〇〇
計	二一四、〇〇〇

と推定せられてゐる。

清朝末以來、佛人、獨人、露人の之に關係したものがあつたが東支本線を距る事一二〇杆に及び輸送不便のため未だ開掘せられるに至らない。

◎ 札賚諾爾炭礦

滿洲里の東方約三十杆、東支本線に沿ひ、北東一南西延長四十杆、東西の幅二十杆の廣大な面積を占めてゐる。夾

炭層は第三紀に屬し炭層三乃至四層、合計層厚二十米に達し、傾斜一〇度以内である。炭質は褐炭で水分二十%を有し發熱量五、三〇〇カロリ、乾燥炭の比重〇、七である。埋藏量は比重〇、七とし七、〇〇〇萬噸と稱せられ又一説にはその數倍の埋藏量を豫想せられてゐる。

光緒二十七年東支鐵道採掘權を得、その後變遷があつたが大正十一年から再び東支の直營となつた。採掘は露天掘及豎坑に依る。從來出炭の最高記録は大正九年の三六六、〇〇〇噸で昭和四年來休止してゐる。

既往出炭狀況は次の通りである。(單位萬)

一九二五年	一一三、五一一
一九二六年	一五二、〇九九
一九二七年	一六〇、〇〇〇
一九二八年	二五四、二八九
一九二九年	一八六、五〇〇
一九三〇年	五、八〇〇

北滿三炭礦の中では最も歴史が古いが、水分二十%の褐炭で穆稜に劣り、鶴立崗に比べると問題にならぬが鐵道沿線に位する點で經濟價值が認められる。

[309]

◎ 鶴立崗炭礦

ハルビン下流、松花江の左岸、湯原縣城の北東一二〇杆にある。松花江岸迄約八十杆の運炭鐵道があつて之より溯



【310】 江六百軒でハルビンに達する。松花江は毎年十月より翌年三月迄結氷し航行不能である。侏羅紀に屬し基岩は片麻岩である。炭層は六層あり層厚各三、〇―一二、〇米、合計層厚最大五〇米、平均二〇米と稱せられ夾炭層厚さ三〇〇米の間に分布し層間距離最小二十四米である。傾斜十二―三十度。

炭質炭車は中度瀝青炭で撫順炭と本溪湖炭の中間に位し、灰分極めて少く甚だ良質である。

炭量は従來一億四千四百萬噸と推定せられてゐるが、最近第二、第三兩層(層厚十一―十二米)採鑛の結果、確實埋藏量三億噸、豫想埋藏量六億噸を下らずとも云はれ滿洲有數の大炭鑛である。

大正三年土人阿片の密栽培中の石炭を發見し、七年興華煤鑛会社が創立せられたが、八年吉、黑兩省政府と官商合辦となり、十二年再び商辦となり昭和四年公司の改組を行ひ本社をハルビンに置く。繼續的出炭を見たのは昭和二年以降である。採掘は四箇所の露天掘に依る。既往出炭高は次の通りである。(單位噸)

一九二五年	一三、〇〇〇
一九二六年	三〇、〇〇〇
一九二七年	七八、七〇〇
一九二八年	一〇〇、〇〇〇

一九二九年	一二〇、〇〇〇
一九三〇年	一七〇、〇〇〇

本炭鑛は近代的設備と組織を以て急速に開發せられ炭質は北滿第一で北滿炭界に大勢力を占めてゐる。

◎ 新邱炭田

遼西八道濠の北西四十軒、含炭區域は北東―南西の延長約六十軒、幅二十軒に達する廣大な區域で、新邱、米家窩舖孫家灣その他の區域に分たれる。

夾炭層は侏羅白堊紀に屬し安山岩、流紋凝灰岩を伴ふ。新邱では炭層九枚を算し、合計層厚七米に達する。米家窩舖では稼行中のもの一層、厚さ四米、孫家灣では同二層、厚さ各々三米である。傾斜概ね十五度である。

四 鐵 鑛 業

鐵鑛は南滿洲に廣く分布し、朝鮮北部にあるものと同様の所謂縞狀鐵鑛と稱へられる赤鐵鑛及磁鐵鑛である。その他に局部的の接觸變質鑛床の磁鐵鑛或は小規模の赤鐵鑛層があるが、經濟價値は乏しい。縞狀鐵鑛は含鐵品位三五―四〇%の貧鑛が多く、六〇%内外の富鑛は案外少く。

既調査區域の殘存埋藏量は次の通りである。(單位一、〇〇〇噸)

【311】

地 方 別	富 鑛	貧 鑛
鞍山(五鑛區)	一、三〇〇(櫻桃園)	三〇八、〇〇〇



[312]

廟 兒 溝	二、四〇〇	二〇〇、〇〇〇
弓 張 嶺	二、五〇〇 以上	三五〇、〇〇〇
計	六、二〇〇 同	八五八、〇〇〇

鞍山の他の鑛區を加へると更に約四億噸を増し、總計十二億噸を超えるであらう。從來採行せられたのは鞍山と廟兒溝の二鑛山で弓張嶺及び本溪湖煤鐵公司所有の小鐵鑛數箇所は何れも日本資本關係の山であるが未だ採掘されてゐない。

右記二鑛山の鐵石及びそれより製鍊せられた鉄鐵の生産高累計は次の通りである。

(單位一、〇〇〇噸)

地方別	富 鑛	並 鑛	貧 鑛	鑛石計	銑 鐵
鞍 山	一、四五〇	二〇四	二、九二六	四、五八〇	一、二六六
廟 兒 溝	一、〇八三	—	—	一、〇八三	七〇〇
計	二、五三三	二〇四	二、九二六	五、六六三	一、九六六

◎ 鞍山鐵鑛

(一) 位 置 日本の權利に屬する鑛區は十一箇所、四百萬坪を有し、鞍山市街を中心に五哩乃至十哩以内の距離に點列してゐる。即ち櫻桃園、王家堡子、白家堡子、一擔山、新關門山及び關門山は市の北東から東方に連り、大

孤山は南東に孤立し、東、西鞍山は千山驛の南方に滿鐵本線を狭んで相對峙し、小嶺子及び鐵石山は湯崗子温泉の東西に分れてその最南端に位する。

(二) 鑛 床 鑛床は前カムブリア紀に屬する成層鑛床で、鑛石は赤鐵石英片岩又は赤鐵磁鐵石英片岩から成つてゐる。多く千枚岩及び綠泥片岩を伴ひ、基岩は花崗岩及び片麻岩質花崗岩より成り、上部は新原生代硅岩に依つて不整合に被覆せられてゐる。鑛床の下盤に近い部分は二次的富化作用を受けてゐる所がある。本鑛床は鐵バクテリアの沈澱に基づく水成鑛床と信ぜられてゐる。

(三) 品位及び埋藏量 貧鑛は含鐵品位平均三五%、富鑛は同五〇—六〇%、磷分〇、〇二—〇、一%、夾雜物は主に硅酸である、即ち北米メサビ地方の東部ブーミオンの「硅鑛」に相當するものである。

富鑛の量は貧鑛に比し甚だしく、各鑛區の中比較的富鑛部に富めるは櫻桃園で、昭和四年迄の既往採掘額約八十萬噸、殘存量(確實)百三十萬噸と云はれ他の鑛區では之よりも少い。

既調査區域の總鑛量は次の如くである。

地 方 別

(單位一、〇〇〇噸)

西鞍山東半一部	四、三九八
東鞍山西半部	九八、一〇〇
大 孤 山	九七、八四七
櫻 桃 園	二七、四四八

[313]



[314]

王家堡子

八〇、二〇七

計

約三〇八、〇〇〇

即ち三億強で、尙ほ王家堡子その他の鑛區を加へると七億を下らずと云はれる。以上の埋藏量は凡て山麓レベル以上のものでそれ以下にも相當の埋藏量を想像するに難くない。

◎ 廟兒溝鐵山

(一) 位置 安奉線南坎驛の北東に位し、輕便鐵道八杆にて山麓に達する。南坎—本溪湖間本線三〇、六杆。鑛區面積百九十萬坪である。地勢急峻で附近山頂は海拔八百米である。

(二) 鑛床 前カムブリア紀の片岩、片麻岩中の成層鑛床なる事鞍山と同様である。鑛床は赤鐵磁鐵石英片岩の貧鑛中に、主として磁鐵鑛より成れる富鑛體主要なるもの三箇所ある。富鑛體は何れも扁桃狀の「落し」であつて上下に相重つて貧鑛中に介在し上位より順次、上磐通、本通及び嶺南通と稱せられる。本通は最大でその山頂の露頭は古來土法で採掘された。この「落し」の確認せられた延長は傾斜に沿ひ四百二十五米に及び尙ほ下部に連續するものと信ぜられる。この富鑛の成因は鞍山そのものと異り上昇熱水溶液に依る交代鑛床と信ぜられてゐる。

(三) 品位及び埋藏量 貧鑛は含鐵品位平均三三%、富鑛は同六〇—六八%、磷分〇、〇一五—〇、二%である。埋藏量 (溪谷水準以上) (單位一、〇〇〇噸)

貧 鑛

二〇〇、〇〇〇

本 鑛

富 通 嶺 南 通

二、四〇〇

上 磐 通

(殘量存)

◎ 弓張嶺鐵鑛

(一) 位置 遼陽の東南約四五杆にある。鐵道の便がなす。

(二) 鑛床 鞍山と同様。楊木溝の磁鐵鑛體は延長三百米、巾十八米扁桃狀を成す。

(三) 品位及び鑛量 貧鑛は含鐵品位約四〇%、富鑛は同六〇—六八%。埋藏量 (單位一〇〇〇噸)

貧 鑛

三五〇、〇〇〇

富 鑛

二、五〇〇 以上

本鐵鑛は鞍山、廟兒溝と共に滿洲の三大鐵鑛の一であつて。從來の探鑛試掘に依ると莫大なる貧鑛と相當多量の富鑛を有する。採掘權は飯田延太郎氏設立の日支官商合辦弓張嶺鐵鑛無限公司(資本金百萬圓、三菱出資六十萬圓、支那側四十萬圓)が持つて居る。未だ採掘せられないがその富鑛に對しては特に期待せられてゐる。

◎ 歪頭山鐵鑛

安奉線姚千戸屯驛の南約二杆にある。鞍山附近と同様の縞狀鐵鑛で鑛石は磁鐵鑛である。鑛石は含鐵品位三五—四五%の貧鑛であるが鑛量は相當に多い。

[315]

五 金 鑛 業

◎ 分布狀況



産金地として知られるものは金鑛及び砂金共、全滿に亙り甚だ多いが最近迄組織的に採行せられてゐるのは吉、黒兩省の砂金のみである。

(一) 黒龍江砂金鑛 砂金は黒河を中心としその上流の大興安嶺北端一帯と下流の小興安嶺帯とに産し主要金場は上流より順に次の通りである。

額爾古納河右岸(コロンバイル)

奇乾金廠、吉拉林、三河地域

黒龍江右岸流域

漠河金廠、開庫康附近、伊昔肯河、富拉罕金廠、呼瑪金廠、餘慶溝金廠、寬河流域、達音河流域、遼源金廠(法別拉哈河南岸)、法別拉哈河北岸、愛理附近金廠、觀都金廠(舊名太平金廠)

松花江岸

梧桐河金廠、赫金河金廠、湯旺河金廠、

嫩江流域

興安金廠、その他

光緒以前から露人の盜掘が盛んであつた。光緒八年(一八八二年)李鴻章が北滿金鑛總局を設け鑛區を統一したが北清事變に際し露人の襲撃を受け事業頓挫し、再び盜掘が始まつた。日露役後省政府は採金局を設けて砂金業を官營とし一時榮えたが、經營宜しきを得ず且匪賊横行のため大正四年頃に至り衰微した。後大正十二年頃より再び有望

な鑛區發見せられて砂金熱勃興し最近迄諸所で採掘せられてゐる。黒河は砂金取引の中心で輸送は冬期自動車及び夏季船便に依る。光緒初年以來採取せられた砂金累計一億一千万圓と推定せられてゐる。

(二) 吉林省砂金鑛及び金鑛 依蘭道にある。牡丹江流域及び富錦縣方面がその中心で稜川公司がある。又間島延吉、和龍兩縣に延和金鑛がある。金山は夾皮溝が全滿に於て最も著名である。之は附近土豪、韓家の所有で往時は中々盛んであつたが既に水準以上の富鑛部を採盡し廢坑となつてゐる。水準以下に尙相當富鑛部がある見込である(三) 奉天省砂金鑛 鐵嶺東方、柴河は往時採行せられ盛んな時は數百人の採金夫が入つてゐたと云ふが既に久しく廢棄せられてゐる。輯安縣(鴨綠江上流)報馬川金鑛は學良の東北鑛務總局の經營であるがあまり大きくない。又撫順上流奉海線清源驛附近に小規模に採行中の金鑛が一箇所ある。關東州には諸所に小砂金地があり、モナザイトザイコン等の稀有元素鑛物を産する。

北滿の砂金地は露領ネルチンスキーゾード、ゼヤ等の大砂金場(過去三十年間に毎年三千万圓、計約十億圓を産出したと推定せられる)と連絡せる所謂アングラ楯狀地の鑛床で極めて大規模のものと信ぜられ尙ほ今後の開發を大いに期待せられる。又鴨綠江沿岸方面の金鑛及び砂金地は尙ほ將來精査の價値がある

◎ 著名産金地

[317] (一) 漠河 往昔滿洲に於ける最大砂金地として知られ、黒龍江省の西北隅黒龍河と額爾克納河の合流點を中心とし東西四百支里南北二百支里に跨る廣大な區域の總稱にして、漠河、神洞河、奇乾河の三砂金地がある。同治二

年露國人が發見し一萬餘の露支人が採金に従事して多大の砂金を本國に送つたが、光緒十三年清國政府は討伐隊を



出し之を追放したので一時採金は中止せられてゐた。光緒十五年李鴻章の發起で官民合同廿萬圓の資金で漠河採金會社を設立して採取したが其後産金が激減して休業した。光緒二十七年に至つて清國政府は多大の金を出して露國から之を回收し劉煖を督辦として經營させたが成績不良で八箇年の産金八萬元に過ぎなかつたので缺損彌縫策として露國人から借金をしたが露支間の外交問題を惹起した。結局督辦の解職となり、全く支那の所有に歸したけれども成績が依然思はしくないので數年前黑龍江省の手に移し民國八年より奇乾河金礦と一括廣信公司の經營となつてゐる。砂金層は強ち悲觀すべきではないが永年の濫掘と金礦經營の拙劣なために昔日の盛況を見る事が出来ない。露支事變後休業し私採者の盜掘に委してゐる。

(二) 逢源金廠 逢源公司總廠は現在五道河にあつて最近に於ける採金の最も多い地である。現在商辦經營で最近の産金額は毎日約二百ソロトニツク即ち二十兩で、産額最も大である。逢源側の言に據ると民國九年から十二年に至る四年間に合計産金七萬一千八百七十兩、十三年から十五年に至る三年間に十七萬八百五十六兩、十六年に約一萬六千兩を産出したとの事である。合計産金約二十六萬兩で其の他各公司の産金約一萬五千兩を加へると即ち愛琿境内法別拉河流域に於て約二十七萬五千兩の金を産出することになつた。

(三) 興安金廠 興安金廠の鑛區は舊慶慶溝官鑛の區域である。但し餘慶溝官鑛の採掘地は僅かに古龍幹溝の上流及び嫩江の最北上流のみである。興安金廠採掘地は遠く其の南に在つて、現今の採掘地は總て嫩江支流の門磨河上流にあつて實に逢源金廠五道河の上流と匹敵してゐる。五道河から西南は砂金が連續し泥猷河の上流に至つてゐる。其の湧起の時期が甚だ新しいので侵蝕の程度淺く、表面の砂金猶殘留したのがあつた。泥猷河東北支鑛阿拉氣

一帯の金鑛は先に逢源金廠に於て採鑛した後は、興安嶺分水の以西である爲めに、興安金廠に歸した。蓋し各金廠の鑛區は極めて廣大で、境界線の所在もない程である。民國十二年商辦經營となり、十三年は産出最も多く約二萬兩に達し、最近は一萬兩以下に減じたが猶黑龍江省第二の大産金地である。

(四) 太平金廠 羅北縣々城の西北七十支里の處にあつて、太平溝、觀音山、都魯河の一帯の稱で、太平溝の南北から南西にかけ四十一百三十支里の間の區域を占めてゐる。光緒二十六年拳匪賊亂の時、露人が觀音山金鑛を占據し、其の間極力經營に従事し殆んど採掘し盡し、光緒三十二年北洋之を繼續し宣統三年漠河と共に省辦に歸し、都魯河と合して觀督金鑛と稱した。民國五、六年は一箇年約二萬兩の産金があつた。同十二年改めて商辦と爲し名を太平金廠とした商辦後は年産約二千餘兩である。

其の後民國十八年に至り、缺損六十萬元に及び、一時官へ返納し、觀都金鑛局として經營せられてゐたが、目下休業中である。

(五) 庫瑪爾河 黑河の上流約四百支里の處にあつて、民國六年以前は有名であつた。現在稼行してゐる處は達拉罕、伊肯肯站等である。

以上の外、梧桐河、三姓等新砂金地あり事業が新しいだけに産金額も相當に多い。

(六) 清原縣に於ける金鑛發見 清原縣高家臺居住邦人質屋業土居市次郎は、數年前同縣下松樹居住支那人常某に奉天票五百餘元を貸付け同人が通濟期間に至るも通濟出來ざる爲め己むを得ず、常某の所有する土地を抵當として保管し居りたる處、同地面より有望なる金鑛を發見したるものゝ如く同人の語る處に依れば、今回發見せる金鑛脈



[320]

は相當廣汎に渡る面積にて之れが分析方近々中海縣中央試驗所に依頼する豫定なりと云ふ。尙ほ同地一帯は金鑛多く、支那側にも從來相當大規模にて採掘し居る状態なるを以て、不發見金鑛も相當有望のものと思料せられて居る。

六 其他金屬及非金屬鑛業

◎ 輕金屬原料

(一) マグネサイト マグネサイトは大石橋驛及びその四杆南の牛心山から北東に向つて延びた地域に分布してゐる。主なる産地は南西より順次、轉山子(沙崗驛の北)、牛心山、白虎山、官馬山、聖水寺、朱官堡子、大嶺(以上大石橋驛より三十二杆)、水泉堡子—康家谷間延長二十三杆の間(以上海城驛の南東約二十杆)。附近地質は花崗片麻岩、片岩類及び結晶苦灰岩並に珪岩より成り、マグネサイトは常に苦灰岩中にあつて扁桃状をなし之と互層してゐる。各地の露頭の大きさは何れも延長二百—二千米、幅七十—千米の廣大なものである。最もよく發達してゐる楊甸子附近ではこの互層の厚さ七百米、その中二割内外はマグネサイトである。良鑛の埋藏量の一部を示せば

轉山子	六〇萬噸
牛心山	三〇萬噸
官馬山	二五〇萬噸

であるが全區域の埋藏量は數億噸或は數十億噸に達するであらう。品質は殆んど純粹のマグネサイトである。

硅酸	礬土	酸化鐵	石灰	苦土	灼熱減量	比重
一一四	一以下	〇、四—一	一一二	四四—四六	五〇	二、九八

鑛區は既に約四十鑛區を設定せられ、滿鐵會社も多數の鑛區を所有してゐるが他は滿洲國人が持つてゐる。現在採掘してゐるのは官馬山の白川洋行、白虎山の葦津鑛業で前者は滿鐵を通じて販賣し、葦津及び南滿鑛業は現地に煨燒工場を有する。近年の産額は二、三萬噸で用途はマグネシア煉瓦(製鋼用)リグノイド原料その他バルブ及び人絹工業に用ひられる。

(二) 耐火粘土 耐火粘土は石炭紀及び二疊石炭紀層中に成層して居り、従つて古生代石炭の産地には殆んど到る所産出し、何れも莫大な埋藏量がある。耐火度は通常S・K三四—三五であるが特殊の「硬質粘土」は三七番に達する。復州五湖咀、煙臺、本溪湖及び金州管内大魏家屯産は品質優良で就中、五湖咀は最良質の粘土を産し而も位置海岸に位し輸送の便多く、八幡製鐵所其他内地方面へ多量を輸出して居る。最近の産出額次の通り。

(單位噸)

[321]

地 方 別	昭和三年	昭和四年	昭和五年
五湖咀 (復州鑛業)	四八、九八九	六二、六〇三	四八、一六四
煙臺 (滿鐵)	一〇、三二〇	四、八一二	四、三八〇
本溪湖 (煤鐵公司)	一、一七二	一、二三六	一、一二〇

「硬質粘土」は普通、原鑛のまゝ礬土四十%内外で所謂「フリントクレー」と稱すべきものであるが此の中に礬土四五



七十%以上を含有し礬土頁岩(市場では「特硬質」及び「上硬質」と稱へる硬い礬石がある。之は恐らくダイヤモンドを含むものと信ぜられるが、特殊耐火材料、特にムライト原料として最良適で現に尼崎市旭硝子工場で使用せられ好成績である、礬土六十%以上のものは同工場著述二十三―二十八頁であると云ふ。

尙ほ之等粘土は内地産木節粘土その他が礬土含有量通常三〇―三六%であるに比べ礬土の品位特別高く、アルミウム原料として大いに注意せられてゐる。

◎ 製絨並に窯業原料

(一) 石灰石及び方解石 關東州新原生代(周水子小野田セメント、營城子及び甘井子滿鐵鑛區)及び火連寨、本溪湖、煙臺附近奥陶紀並に磐石、吉林方面の石灰岩は何れも純良な石灰岩を大量に藏して居り、關東州内ではセメント及びガラス原料、本溪湖、火連寨では製鐵用煤溶劑及びガラスとして多量に採掘せられてゐる。吉林及び煙臺方面では從來セメント工業の計畫がある。最近の産額次の通りである。

年	次	火 連 寨	周水子(セメント)	本 溪 湖
昭 和	四 年	二六三、五七四	三一三、五二八	五二、四〇〇
同	五 年	三三八、二九三	二九二、〇六八	五八、一二八

方解石は州内所々の石灰岩中に脈状をなし、ガラス原料として採掘せられる、年額一千噸内外である。

(二) 耐火粘土及びマグネサイト (前項参照)

(三) 苦灰石 關東州に於ける新原生代及び下部奥陶紀層中に厚層を成しマグネシア二十%以上の良礬を産し埋藏量殆んど無盡蔵である。八幡製鐵所その他の耐火材料原料で、年産額十萬噸内外である。尙ほ旅順及び大石橋附近並に安奉線には古期變成岩中の結晶質苦灰岩を産する。八幡製鐵所では所要ドロマイトの過半は關東州に仰いでゐる

(四) 硅石 大連及び旅順管内の硅石は新原生代硅岩の厚層中の良好部を採掘せるもので、旅順、龍頭又は大孤山硅石として知られ、八幡製鐵所その他の耐火材料原料である。硅石煉瓦原料としては旅順その他硅石は内地の赤白硅石に劣つてゐるが埋藏量豊富で原價低廉である。尙ほ五湖咀その他には一種の軟硅石を産する。

又金州普蘭店兩管内では上記硅岩並に石英脈を採掘する、石英脈は極めて純粹で南滿硝子會社のカットグラス等高級品の原料である。

硅石産額は關東州内で年額二萬噸内外である。

(五) 滿 俺 興城縣黑松林(奉山線興城驛の西北西三十二軒)にあり。近年硬滿俺鑛年額六乃至七百噸を産する。然し鞍山及び本溪湖製鐵所では年一萬四乃至五千噸の滿俺鑛を要し、高知縣、湖南省、印度或は遠くアフリカから之を輸入してゐる。

その他の産地として鳳城縣小黃旗(黃土坎の北方)があるが小さい。

(六) 長 石 普蘭店附近に稍々豊富に出る。州内から年額五百乃至一千噸を産する。

(七) 螢 石 普蘭店附近隨家屯の鑛床は稍々大きく滿鐵の鑛區がある。その他隨家屯、沙崗寨附近にもあるが近年



何れも休山してゐる。

[324]

◎ 銀、鉛、亜鉛

鑛産地としては、奉天省五八、吉林省三一、獸龍江省七、熱河省十の多數が知られてゐるが從來繼續的に稼行せられたのは南滿では安奉線青城子、北滿では布列野河その他、熱河では小黑溝、煙筒山鑛山等五指を以て數へられる鑛石は一般に含銀の多い方鉛鑛で、熱河及び吉林省では銀鑛として知られるものが多い。青城子は通遼堡驛の西方四十六軒にある。原生代結晶質石灰岩を貫ける石英斑岩を運鑛岩とし、之に伴ふてその接觸部に近く胚胎せる鑛脈である。鑛石は含銀方鉛鑛で、黄鐵鑛石英、方解石を伴ふ。附近の頭道溝には閃亜鉛鑛を伴ふ區域があるが大體に於て少い。

◎ 銅鑛業

著名なるものは少い。從來稼行せられた歴史を有するものは安奉線盤嶺及び馬鹿溝、奉海線磐石、間島天寶山位のものである。鑛床は左記の示す如くである。

地方別	鑛脈事情	銅(%)
盤嶺	變質石灰岩中の鑛脈銅	七、八〇
馬鹿溝	奥陶紀石灰岩と花崗岩の接觸	一〇、〇〇〇(手選)
磐石	石炭紀石灰岩と花崗の接觸	一〇—三〇
天寶山	變質石灰岩中の鑛脈	三、〇〇

鑛石は何れも石灰石を混じ、金鑛と混じ銅マツトの製煉には歡迎せられる。磐嶺の鑛床は殆んど銅鑛のみで單純だが天寶山は銀、鉛、亜鉛を伴ひ、他の接觸鑛床は馬鹿溝では金、銀、鉛、水鉛、磐石ではタングステン、蒼鉛、水鉛鉛、錫が報告せられてゐる。磐石及び天寶山は山元で製煉したが十數年前から休山。馬鹿溝は大戦中及び昭和初年頃稼行、本溪湖で製煉し、盛時年産精鑛八百噸を出したが目下休山、盤嶺は昭和四年以來、精鑛年額約八百噸を鎮南浦に送つた。磐石を除く他は日滿合辦である。

◎ 黄鐵鑛業

片麻岩或は古期變成岩中の石英脈に隨伴するものと古生代炭層中に扁桃狀或は細脈狀をなすものとある。前者に屬するもので從來稼行せられたのは安奉線楊木溝(草河口の東三十軒)及び林家臺(同林家驛の西方三軒)で、後者に屬するものは煙臺、本溪湖等である。何れも小規模で生産年額數百乃至二—三千噸で、撫順、本溪湖、鞍山の硫酸工場に送られてゐるが、之等硫酸工場所要黄鐵鑛の大部は岡山縣柵原、愛媛縣菅生産で夫々年額數千噸を用ひ、尙ほ一部淄川、博山からも來てゐる。従つて目下の處、滿洲の大硫酸工場はその原料を滿洲産で自給する見込は全く無い。然し日本内地は黄鐵鑛及び硫黄では世界有數の資源地であつて朝鮮に於ても成興の朝鮮窒素會社は柵原の鑛石を用ひて居り原料に就いては滿洲は不便ではあるが不安ではない。尙ほ滿洲に於ける現在の硫安産額は撫順シエール工場一萬三千噸、モンド瓦斯工場六千噸、鞍山製鐵所五千五百噸である。又、自然硫黄の産地が黒龍江省及び吉林、熱河兩省に報告されてゐるが詳細は不明である。

[325]

◎ 天然ソーダ



[326]

四洮及び洮昂線方面にある。その産地及び最近産額は次の如くである。

玻 璃 山	一、〇七五
タプスノール	八、〇〇〇
龍江(チチハル)	八、二〇〇
ハイラル	八、〇〇〇
計	二五、二七五

就中タプスノール(洮南の南東)は最も著名である。新帯氏に依れば、ソグ湖は徑八軒、その内ソグ分布區域は半分の二十五平方軒、ソグの厚さ平均一〇軒、比重一、五にして地表のソグ量三十七萬五千噸、又地下一米以内の泥土中に埋藏するゲリユサイトの三分の一をソグとし約百萬噸、合計百三十七萬噸の埋藏量がある。昭和三年頃の計算に依ると精製費を加へ山元原價三十三圓、前ダプスー大連間運賃二十六圓、計六十九圓(大連著)の見込であると云ふ。

◎ 滑石

大石橋及び海城附近マグネサイト地域には三十餘箇所に亘り分布してゐる。鑛床の規模雄大且つ品質良好で一時歐洲に輸出せられた事もある。成因は上昇熱水による深處のマグネサイト及びドロマイト中の交代鑛床と信ぜられる。品質は硅産六一・六三%、マグネシア三一・三二で殆んど純粹である。主要産地は大嶺、聖水寺、香子谷、宗家堡

買家堡、藤耳谷、近年各所合計年産額二一四萬噸である。

◎ 石 綿

金州和尚屯にある。新原生代苦土質石灰岩と斑蝟岩の接觸部に脈状をなし、極良質であるが鑛床の規模は小さい。年額百噸内外を産する。

◎ 重晶石

關東州普蘭店附近の花崗質片麻岩及び中生代礫岩層中の小鑛脈である。

◎ 柘榴石

關東州海洋島の片岩にある、風化崩壊して海濱の砂層中に堆積せるものを採集する。

◎ 黒 銀

仙人洞(吉林省磐石縣煙筒山の南西五軒)にある。古生代變質岩中の鑛層で、嘗て五〇一六〇噸を採掘販賣したことがある。又、達營溝(吉林省樺甸縣)には花崗質片麻岩中の脈をなせるものがある。何れも土狀黒鉛に屬する様である。

第七節 工業

一 序 説

[327]

古來滿洲に興り、現に工業の中心をなすものは農産加工業であるが、林、鑛産加工の粗工業及び右工業に附隨しての化學工業も、日露の滿洲經營以來、殊に歐洲大戰後漸次勃興して來た。



滿洲の工業を原料別、企業形態別に概別すれば次の如くである。

◎ 原料別

- (一) 農産工業……大豆加工業(豆油、豆粕)。同附属の化學工業(豆油よりはグリセリン、脂肪酸、石鹼を、豆粕よりは豆粕の蛋白質利用、ペイント、ソーライト)。製糖業。製粉業。澱粉業。製麻。紡績。柞蠶等の纖維工業。
- (二) 林産工業……製紙及びバルブ工業。燐寸工業。
- (三) 畜産工業……皮革、骨粉、毛織工業。
- (四) 水産工業……食鹽を原料とする曹達灰工業。
- (五) 鑛産工業……石炭の加工業——硫安。骸炭。コークライト。粗油。粗蠟。油母頁岩の加工業(粗油。粗蠟)。製鐵業及び附隨工業としての硫安、クレオソート油、ピッチ、ベンゾール、ナフタリン等の精製工業。

◎ 企業形態別

- 手工業……(職人工業)——鞋舖(靴屋)、成衣局(洋服屋)、蹄鐵舖、鐵匠(鍛冶屋)等
  - 家内工業……(問屋工業)——土布製造、染坊、アンペラ製造等
  - 在來式工場工業……(工場手工業)——燒鍋、油坊、磨坊、框絲坊、磚坊、純坊等
  - 新式工場工業……電氣、瓦斯等の動力工業、鐵道工場、セメント、製麻、製材、製粉、煙草の諸工業等
- (註) 家内の工業は滿洲各地に散し、近代的工業は關東州及び滿鐵附屬地、哈爾濱に集中してゐる。

今日迄の滿洲は資本、技術の欠けたると、治安の維持せられざりしと、更に政權横暴により、豊富な資源を有し

ながらも、之が工業化を見なかつたのであるが、滿洲國成立せる今後には漸次、優秀且つ豊富な資本及び技術を有つ日本と、低廉且つ無限な勞力及び資源を有つ滿洲國とが、相互依存の關係に於て、滿洲産業は一段と開發せられるであらう。又滿洲國富の増進、民力の涵養の事にも資源の工業化は必要であらねばならぬ。

今後企業化有望なりとせらるゝものも多いが、既にその企業又は計畫に着手したのものもある。即ち製鋼業、硫安工業、アルミニウム工業、マグネシウム工業及び曹達灰工業、大豆製油業等で概ね鑛産の加工業である。

併しながらこゝに考ふべきことは、政策の如何によつては滿洲の工業が日本内地に重壓を加へるといふことである。即ち滿洲工業と内地工業との間に適當な統制策が講ぜらるれば、共存共榮の工業として發達するが、無方針に企業發展を計ると、日本の同種工業に對する重大なる脅威となることである。

これが滿洲の新工業は、大體粗工業中心主義の下に、本邦日本工業に對する原料供給工業を起すことを主眼とすべしと唱へられる所以である。幸にして滿洲の資源の性質上、現在有望事業と見られてゐる大豆製油業、マグネシウム工業、製糖業等多數のものは、内地工業と衝突する虞のない事業である。

尙ほ又石炭加工業、製鐵事業等の如く事業計費の如何によつては、日本工業の競争者となるものについては、次のやうな方針で進むべきであらうと云はれる。

[329] 即ちこれらの滿洲に於ける競争工業は、其の製品の種類又は生産品、販路等に就て分野協調をすればよい。昭和製鋼所を例にとれば、その鋼製品の種類をシート・ブアー、小型鋼、線材等、内地製會社の餘り生産してゐない種類のものゝ生産に主力を注いで兩者の競争を避けることである。或は將來の本邦需要高の自然増加分の一部を滿洲工業



の市場として分割提供するといふものも、日滿工業協調の一方法として考へられてゐる。兎も角、滿洲新工業は其のコストに於いて内地工業の同種のものより大體安いのであるから、出来るだけ其の點の利用に重きを置いて滿洲新工業の開發に努力すべきであらう。

二 各種工業の態様

◎ 農産加工

(一) 大豆工業

大豆搾油工業 大豆搾油工場は一般に油坊と呼ばれる。油坊は全滿各地に分布してゐるが、大連と哈爾濱とを二大中心地とする。

地方別	工場數	一晝夜製造能力	昭和七年度全生産高に對する百分比
大豆			
大連	五二	二一四、七二六	一、〇七三、五八〇 (千枚) 三〇、九二四 五四%
哈爾濱	三九	九五、〇〇四	四七五、〇二〇
營口	二〇	二四、七七五	一二三、八七五 五、七三二 九
安東	二〇	四七、〇五四	二三五、〇二七 四、九一六 九
北滿各地	三一	四四、〇〇五	二二〇、〇二五 一一、三九三 二〇

製油法としては次の如くである。壓搾式でやるものは豆粕中に油分が多く、肥料としても、飼料としても、品質が劣る。化學式のもの油は殆んど完全に抽出し得られるが、薬品が高價の爲め餘り有利ではない。

滿洲油坊搾油法

壓楔式	螺旋式	水壓式	抽
式粕丸	式粕丸	式粕板	ペンデン式
南滿各地 二三八	式粕丸 八八、一八七	式粕板 四四〇、九三五	
合計 四〇〇	式粕丸 五二一、七四一	式粕板 二、五六八、四六二	
	式粕丸 二、五七、七四四	式粕板 五七、七四四	
	式粕丸 一〇〇	式粕板 一〇〇	

楔は用ひ大豆を壓搾する方法で、作業は全然人力及び畜力による原始的で小規模なものである。現今奥地にはこの式によるものが尠くない。

螺旋の代りに螺旋を用ひるもので、搾油の作業は人力によるが、其の他の作業は機械力によることが多い。數から云へば滿洲の油坊は此の式によるものが多い。

螺旋に代ふるに水壓式を用ふる新式の製油法で、現在大連其の他に於ける大規模油房は此の式によつて居る。

壓搾式としては最も進歩したもので、丸粕水壓式に比し遙かに強力な壓力を加へて製油するもので粕は板状である。大連の日清油房と、哈爾濱のカバルキン油房の二者は之を採用する

大豆中の油分を、ペンデンによつて抽出する新方法で、滿洲でこの方法を用ふるものは大連の豊年製油のみである。



出 式 アルコール式

右ベンチン式を改良したのが滿鐵中央試験所の酒精式である。此の方法の特色は従来の抽出式製油方法よりも豆油が完全に抽出され、且つ油及び豆粒共に品質が非常に良くその上にレシチンといふ副産物がとれることである。即ち油は食料油に、豆粕は飼料及び食料に適當し（小麦粉混入用としてパン其他の製造に用ひられ、その他調味料製原料として使はれる）又レシチンは人造バター、醫藥、製菓等の原料として貴重な用途を有するのである。

滿洲の油坊は先づ營口に發達したが、滿鐵の亦大連中心主義の影響を受けて斯業も大連に移り、華々しい發達を遂げた。その後、哈爾濱を中心とした北滿油坊が豆粕豆油の需要増大と採算の有利なに乗じて著しいテンポでたい頭して來た。

營口、大連、哈爾濱油坊消長表

地方別	明治四十二年	大正二年	大正七年	大正十三年	昭和三年	昭和五年	昭和六年
營口	三三三	一三三	一〇	二九	二二	二〇	二〇
大連	三五	四八	五七	八二	五九	四八	五二
哈爾濱	五	三	一九	四二	四〇	三九	三九
安東	一〇	一二	一五	二五	二六	二〇	二〇

搾油工業はその原料が豊富なること、粗工業だから資本設備にそれ程の巨費を必要とせず、比較的簡単に工業化し得たこと、製品たる豆油及び豆粕が廣い需要を持つこと等より今日の發達を見、又將來とも有望視さるゝものである。しかるに近年化學肥料硫酸の壓迫による豆粕需要の減退、銀安並に歐洲搾油工業の勃興による豆粕輸出の殆んど

杜絶せること等により、近年一途不振の歩を續けて來た。豆粕の飼料化が提唱せられ、技術的、經濟的に行詰つた油坊の一大變革が叫ばれる所以である。

大豆油加工業 主として日本人の手により行はれる。即ち大連油脂工業會社は大豆硬化油を、日清製油會社は豆油を精製して食料油を製造してゐる。

硬化大豆油はその成分牛脂と大差なく石鹼原料、バター代用品、蠟燭原料として有用のものであり、現在は主として石鹼原料として南支方面に輸出せられてゐるが、將來は本邦輸入高年五百萬圓に達する外國牛脂の輸入を防禦するの使命を持つものである。

(二) 大豆工業附屬の化學工業

石鹼製造業 石鹼が一般滿洲國人間に使用せらるゝやうになつたのは僅々十數年前のこと、而も最初は舶來品の輸入に俟ち、外國より極めて粗悪、低廉な下級品を輸入した。以後年々其の數量増加の傾向を示めて居たのであるが、歐洲戰爭の勃發と共に歐米品を驅逐して本邦品が之に代ることゝなつた。

滿洲に於ては化粧石鹼の主要原料たる牛脂及び洗濯石鹼の原料たる豆油の殘滓が比較的安價に求めらるゝところから、從來邦人間に屢々その製造が試みられたが、孰れも内地品に押されて所期の成功を收めず、多くは中止廢業し現存せるものは滿洲石鹼、萬玉洋行、大連油脂工業等二、三に過ぎず、その生産高も合計一箇月六萬六千斤の程度である。近來滿洲人側石鹼製造業者の進出は著しく、其の中比較的見るべきものに大連三、奉天八、新京五、安東二、哈爾濱十二を數ふるも、殆んど總て小資本に依るもので、洗濯石鹼の生産を主とし、兼ねて洋臘の製造を營む



ものが多い。

[334]

**塗料製造業** ペイントは亞鉛化に豆油、其他油類を混入して製造するもので、亞鉛化の原料たる寒水石粉は州内に豊富であり、又關東州が關稅上の自由地帯なる關係から、本工業發達の上に種々の便宜を有するも、現在會社として存立するものは、滿洲ペイント株式会社のみである。會社の原料は主に豊富な滿洲大豆より仰ぎ、固練、調合ペイント、塗料油、水性壁塗料、ワニス、パテ、光明、亞鉛華等の生産に當り、南北滿洲は勿論、支那全土に販路を有する。同社の生産高は塗料數約一三二萬疋、顏料四六萬疋である。

(三) 食糧品工業

**製粉業** 製粉工場には工場手工業に屬する磨坊と、近代工場に屬する火磨とがある。前者は古より土着資本により營まれ、規模も極く小さいが、各地に散在して居り、滿洲製粉事業の上に重要な地位を占めてゐる。殊に世界大戰による外國製粉の輸入杜絶は之が急激な繁榮を促した。後者は歐米式機械による製粉工場であるが、其の發生は露國の極東進出以後のことである。これ等工場は現在北滿、殊に哈爾濱を中心として存在し、南滿には僅に新京に五工場あるのみである。

**製糖業**

滿洲では輸入糖がその消費糖と見做されてゐる現状で、製糖業として全く見る可きものがない。滿洲の氣候風土が甜菜栽培に適してゐると云ふことから再三計畫されたこともあるが、總て失敗に歸してゐる。即ち北滿に於ては波蘭人の發超でロシア資本により資本金一〇〇萬留の阿什河製糖廠が設立され(後佛人の所有となる)同年哈爾濱製糖廠が支那人により經營せられたが共に經營困難で目下休業中である。南滿に於て日本の有力な

資本家の發起の下に大正五年奉天に南滿製糖會社が設立せられ、同年十二月より工場の運轉を開始し、大正十一年鐵嶺に分工場を設立して事業の擴張を計つたが、昭和二年より事業不振の爲め工場を閉鎖してゐる。

**醸造業**

滿洲に於ける醸造業は高粱酒、清酒、酒精、火酒、麥酒及び醬油、味噌に分れる。

(イ) 高粱酒 高粱酒醸造工場は燒鍋と呼ばれる。本工業は油坊、磨坊と共に古來滿洲の三大工業として有名で、滿洲如何なる邊陲の地と雖も存在する普遍的な家内工業で、其の生産額は到底正確を期待し得ないが、年約一千八百萬圓と推算せられる。規模は極めて小さく、工場資本の大なものでも十萬圓の程度を超えない。遼陽はその名産地で營口、大連、安東にも移出される。

(ロ) 清酒 在滿邦人の増加に伴ひ、日本酒の需要は年々増加し來り、從來は其の全部を内地から輸入してゐたが、當業者は滿洲に於ける醸造業の比較的有望なのに着目し、斯業に着手するもの漸次増加の傾向を示したけれども、原料を朝鮮又は内地に仰ぐの必要があり、殊に氣候不順にして、技術の點に於て遜色あり、優良品の産出は不可能であつた。従つて一般の嗜好を喚起するに至らず、總需要年三萬五千石に對し地場醸造高二萬二千石、殘部を内地より輸入してゐる。

[335]

(ハ) 其他清酒 酒精は主に北滿殊に哈爾濱に集中し、主に高粱、玉蜀黍、小麥等を原料として醸造するもので、大小十六の該工場は北滿シンヂケート(加盟十四工場)に統轄せられて販賣統制を保ち、滿洲の外、アムール・バイカル方面にも販路を有し、工場設備も優秀であるから、何れも相當の成績を擧げてゐる。工場の分布は哈爾濱八工場一日生産能力二百七十八石八斗富拉爾基、一面坡、海拉爾、馬橋河、黑河、阿什河に各一工場、三岔河に二工場



之等の一日生産能力百七十七石八斗と云ふ。(一)火酒は酒精工場の附帯事業となり、多くは哈爾濱に於ける酒精工場の生産するところで、近來購買力が減退し、業態は餘り振はない。(二)麥酒は哈爾濱に五(露人四滿洲人)一面坡、横道河子、綏芬河、滿洲里に各一工場あり、主に北滿一帶殊に哈爾濱を消費地とするも、近年何れも經營困難の状態にある。(四)其他滿洲各地に粟を原料とする黃酒、北滿各地方にリキニール、果物酒等の醸造者あるも、何れも小規模で云ふ可き程のものない。

(ニ) 醬油 滿洲には固有の醬油があり、農家は各戸之を製造し、自家用に供してゐたが、其の消費量は大でない。元來支那人は食料の調味には多く鹽を用ひてゐたが、近年漸次日本醬油が滿洲人間に愛好せられ、其の消費額は頗る増加して來た。現在南滿洲に於ける邦人の斯業を經營するもの約二十に及び、その生産量は毎年二、三萬石に達せんとしてゐる。滿洲は原料たる大豆小麥及び鹽が豊富にあり、更に又石炭廉價なるを以て醬油製造業には有利である。

(ホ) 味噌 需要者が邦人に限られてゐる爲め、未だ大なる發展を來たすに至つてゐない。原料としては醬油と同様低廉な滿洲産品を使用し得る關係上、需要さへあれば相當將來あるものである。

#### (四) 纖維工業

柞蠶絲廠は機械工業とは稱し得ないが、既に工場工業の域に入れるものと農家が副業としてなす家内工業的のものと二種がある。後者に就きては確數を得ないが、前者に就き昭和五年調によれば壹平十四、海城十二、安東五十一、西豊四十四、計百二十一工場である。尤もこの數字は其の後の日本に於ける斯業の不況により餘

程減退せるものと思はれる。

著名な工場としては富士瓦斯紡績安東工場がある。同社は曩に(大正十一年)日華紡績株式會社安東縣所在の工場を合併し、次で大正十二年工場の規模を擴張し、斯業の發展を期しつゝあつたが、同社製品の三十%乃至四十%の販路を有する印度に於ける外貨排斥と人造絹絲及び内地産絹絲の壓迫とにより、近來少からざる打撃を受けた。但し銘仙の材料としては尙ほ相當の活路を有してゐる。

(イ) 絹紬機業 柞蠶絲の加工業たる絹紬機業は近年勃興したとは云へ、未だ振はず支那産額の僅か五、六分に足らぬ状態である。工場の現勢を見るに滿洲に於ける絹紬機業も近來需要の増加に伴つて安東を中心に稍發展しつゝあるが、奉天の純益巢織公司(一日生産能力製絲百斤、織布四十疋)を除いては何れも小規模で、製品も良好ならず支那本部のものに比して極めて幼稚なものである。加ふるに近來採算不良から沈衰状態にあり、人造絹絲の技術の進歩せる今日、此儘推移するならば、滿洲機業の將來には多く期待を置き難い。

(ロ) 家蠶絲工業 滿洲の土地及び氣候は桑の栽培に適し、且つ大氣乾燥せるを以て家蠶の飼養容易にして、その上病害も非常に少ないのである。然るにこの好條件に恵まれながら、滿洲に於ける家蠶絲業は微々として振はず、目下關東廳が助成に力めてゐるが、邦人側工場としては旅順の滿洲蠶絲會社(資本金二十五萬圓)が生絲三萬斤餘の生産に當つてゐる位のものである。

紡績業 滿洲の人口三千四百萬人その九十%以上が悉く綿布を纏ふものである以上、紡績業の沿革の古く且つ旺盛なるは想像に難くないところであるが、然しそれは手織業に就てあつて、近代工業としての機械紡績工業



[338]

の沿革は極めて新しく而も微々たるものである。

滿洲に近代工業としての紡績業が勃興したのは大正十年前後のことである。その兩三年間の企業熱は甚だ隆盛を極め、多數工場計畫或は創業を見たが、其の後今日に至る趨勢は概して振はず、現在僅に奉天紡紗廠(滿人側)滿紡内外棉、福紡及び營口紡織の五社が存続するけれども業績良好ではない。

滿洲主要綿絲布工業の狀況

會社名	所在地	錘數	綿糸生産能力 (二番手換算)	織布機	綿布生産能力 (粗布に換算)
内外棉金州工場	金州	六三千錘	五六千捆	ナシ	ナシ
滿洲福紡會社	遼陽	二二千錘	一八千捆	ナシ	ナシ
滿洲紡績會社	大連	三一千錘	二八千捆	五〇五臺	四九九千疋
奉天省紡紗廠	奉天	三〇千錘	二七千捆	二五〇臺	二四七千疋
營口紡織有限公司	營口	五千錘	四千捆	二〇九臺	二〇六千疋

手織業は(一)割安な原絲の供給、(二)生産費の低廉、(三)品質の粗雑ながら強靱なること等により相當古くより需要せられてゐたが、近年國貨提唱、日貨抵制に影響せられて愛國布の產出旺盛を極め、輸入日本大尺布と競争しつつある。現在の生産總額は之等手織業が全滿各地に散在してゐる關係上、正確な數字を得ることが出来ぬが、その中比較的大規模に製織しつつある綿布工場を示すと次の如くである。

主要都市手織業現勢

地方別	工場數	織機數	年生産高	職工數
營口	二七	一、〇九七	一八〇、〇〇〇 <sub>疋</sub>	五五五
安東	四二	約一八〇	二六、八三〇	三一四
奉天	一七四	三、三〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三、四〇〇
鐵嶺	二五三	一、一〇七	三三二、四六〇	不詳
長春	二六〇	一、四〇〇	二五〇、〇〇〇	同
哈爾濱	三六	不詳	八三〇、〇〇〇	同
計	七九二	七、〇八五	二、六一九、二九〇	

製麻業

滿洲は東洋一の麻の消費地であるが、同時に亦その生産地である。由來滿洲は氣候風土の關係上、麻の栽培には最も適し、その生産額は大體四、五千萬斤と稱せられてゐる。然しながら今日滿洲産麻は大部分生産地方で生産者自ら消費し、市場に搬出せられるものは至つて少く、其の數量一千万斤程度に過ぎない。而して大豆其他滿洲特産物の運搬包装用として麻袋類の需要は夥しきものがあり、且つ滿洲産麻は麻袋原料としては品質不良なるが故に、印度より多量の黄麻が輸入せられてゐる。しかし滿洲に於ける麻袋の生産は全需要の一割にも達しない爲め、年々約五千萬枚を印度其他から輸入してゐる状態である。

[339]



現在邦人經營の製麻會社は大连に滿洲製麻會社、奉天に滿蒙纖維工業會社の二があるが、後者は目下工場閉鎖中であり、前者のみ作業を持續してゐる。同社原料は主として印度より輸入せる黃麻を使用し、其の生産高は年額九十三萬圓で、製品の約三、四割は臺灣米包装用として輸出され、残りは自場消費に充てられる。

尙ほこの外滿洲には古來手工業的滿洲人側の小工場が各地に散在し、麻袋、帆布、口縫絲、玉卷絲は勿論炭鑛用、油坊用、馬車用及び船具用細引並に麻網等の製造に従事してゐる。

(五) 煙草製造業 滿洲に於ける煙草は各地到る所に栽培せられてゐるが、その主要産地は奉天省の東部及び吉林省一帯で、奉天省産を東山煙、吉林省産を南山煙と云ふ。全國作付面積は五萬町歩を突破し、年産額奉天吉林省の分のみで五千萬斤と推算せられ、尙ほ將來も漸次増加の傾向を示しつつある。從來滿洲に於ける需要煙は殆んど刻煙草であつて、滿洲の農村に於ては在來種を原料として手揉み、水煙等が盛んに行はれ、卷煙草も漸次普及しつつあつたが、一般に下級煙草が歡迎される。

現在滿洲の煙草需要は年々逐増の傾向にあるから、需要方面から見ると相當有望のやうであるが、これ等煙草製造に用ふる原料は主として支那山東米種及び米國葉を使用してゐる状態であるから(尙ほこの外巨額の製品輸入がある)、滿洲の煙草工業そのもの、將來は只その原料如何に懸つてゐるものと言へやう。

◎ 林産加工

(一) 製紙業 滿洲に於ける紙の生産は約七割五分が鴨綠江製紙(安東)及び滿洲製紙(大連)の兩社、即ち新式機械製紙工業により、殘部が從來の舊式製紙業即ち滿洲至る處に散在する紙坊と稱する家内工業によつて生産されて居

る。製品は舊式製紙の全部が支那紙毛頭紙で、新式機械製紙と雖も大部分之等支那紙代用品であり、隨つて需要先も全部支那人と言つてよい。又其の販路も新式製紙の一部が山東天津方面に向けらるる外は殆んど滿洲内各地の地方消費である。

今日滿洲製紙業(機械工業)不振の原因としては在來の製紙工業が何れも彼の財界好況時の計畫にかかり極めて基礎薄弱なこと、又滿洲に於ける企業要素自體が不良なこと、即ち(一)イバルブ原料木材は豊富であるが、之を經濟的に入手することは現在に於ては不可能な状態にあり、(二)藥品諸材料は多く外國に仰がざるを得ず、(三)其の他の企業條件も、勞銀の低廉を除いては何れも内地に比して不利で、(四)資本金融は素より用水、動力、燃料、運賃、悉く惡條件であること等が考へられる。

尙ほ滿洲には多量の高梁稈を産し、之を原料とするバルブの工業的製造法については滿鐵中央試験所に於て目下研究中である。現在に於ては未だ多量の漂白剤を必要とするの缺點があるけれども、之が研究完成の上は製紙原料の缺乏を叫ばれつつある今日、重要使命を果すこととなるであらう。

(二) 製材業 新業の經營は近代的生産様式による外國資本の争になり、日露戰前迄はロシアが、戰後は主として日本がその經營に當つてゐる。經營數は歐洲大戰中非常に増加し、大正八年には正に絶頂に達したが、翌年の恐慌以來漸次減少し、現在迄事業を經營してゐるものは極めて少ない。今その主要なるものを擧ぐれば左の如くである

滿洲製材工場一覽

工場名	所在地	生産額	工場名	所在地	生産額



[342]

鳴綠江製材株式會社	大連	一二〇	滿鮮製函株式會社	安東	一〇七
秋田商會木材株式會社	同	三五〇	安東挽材株式會社	同	二四八
宮本材木製材工場	同	一〇五	鳴綠江製材無限公司製材工場	同	三四〇
大連製材株式會社	同	三八	蛭子井製材所	同	二九

(三) 燐寸製造業 滿洲の燐寸工業は明治三十九年吉林に於ける軸木材料使用の目的を以て、新京に創設された日清燐寸株式會社に始まる。其後吉林、營口に漸次燐寸會社の設立せらるるものあり、歐洲大戰中我が國內地の燐寸業者が南洋印度の需要に追はれて滿洲を顧る暇なかつたのを楔機として斯業は更に一大發展を遂げた、即ち安東が鴨綠江白楊材の供給豊富なるところから日本燐寸會社は此處に工場を設けて製軸業に着手し、吉林、營口には之に對抗して支那人經營の燐寸會社が設立された。大戰終結して世界財界の反動期に入るや、其の波動は滿洲の斯業にも影響した。茲に於て日支斯業者は販路協定生産制限の必要を感じ、大正十二年北滿大柴公司を設立、更に同年南北聯合會を組織し、互に協調に努め來つたが、大正十五年來奉天惠臨公司の如き協定を破つて販路を擴張し、此間瑞西燐寸會社の滿洲進出と共に未曾有の混亂状態を呈出するに至つた。

是より先日本燐寸業界を征服して滿洲燐寸界に君臨し來つた瑞西燐寸は日清燐寸、吉林燐寸、大連燐寸の三社を買収して自己の支配下に置くに至つて、市場の獨占を謀り、盛にダンピング政策を以て他社の攪亂を行つた。ここに於

て支那同業者は東三省火柴聯合會を設立して團結を固め、瑞西燐寸に對抗するところがあつたが、超えて昭和三年純日本系として寶山燐寸長春洋火廠が設立され、更に支那側にあつて阿什河、呼蘭に新工場が設立を見、再び市場獲得戦が行はるゝに至つて、之等新設工場を加へて新東三省火柴聯合會組織の議が起つた。然るに瑞西燐寸は斷然該案に反対し、自由競争を以て群小諸會社の混亂を策し、翌四年設立した聯合會(後に東北燐寸同業會に改稱)を以てしても如何んともする事が出来なかつた。即ち舊東北當局は課税方法によつて瑞西燐寸に壓迫を加へんとし、遂に東北燐寸專賣制の實施となつて瑞西燐寸トラストに死活の打撃を與へた。かくて瑞西系燐寸の燐寸同業會への妥協申入となり、同業會側又之を承認して漸く小康を保つこととなつた。而して今回の滿洲事變は專賣制度(現在は公賣制度と改稱)の基礎を動搖せしめた、新國家の成立と共に斯業の基礎は安定した。

滿洲燐寸會社概況

工場名	所在地	一晝夜生産能力	生産高	備考
長春寶山燐寸會社	長春	一五〇箱	一九、二五五箱	純日本人經營
長春洋火工廠	同	一二〇	一六、九六六	同
大連燐寸會社	大連	八〇	—	日本人經營、但資本の九割は瑞典燐寸所有
日清燐寸會社	長春	一二〇	六、六七七	日本人經營、但資本の六割は瑞典燐寸所有

[343]



[344]

吉林燐寸會社	吉林	三〇〇	三三五	同
同長春工場	長春	八〇	一四、五一八	同
圓華公司	安東	一五〇	一一、五一七	支那人經營
三明火柴公司	營口	二〇〇	二二、五〇五	同
生々火柴公司	同	一八〇	一八、〇二六	同
關東火柴公司	同	一八〇	一一、二四八	同
惠臨火柴公司	奉天	三六〇	八、九四九	同
金華火柴工廠	吉林	七〇	七、九八二	同
泰豐火柴工廠	同	七〇	三、七五八	同
衆志火柴工廠	同	一三〇	八、六四四	同
魯昌火柴公司	齊々哈爾	八〇	四、六一八	同
振興火柴公司	黑龍江省呼蘭	一六〇	六五三	同
明遠火柴公司	吉林省阿什河	一五〇	一、八二八	同
計	一七箱	二、五八〇	一五七、四七九	

(註) 一箱八十箱二百打二千四百個ナリ。

◎ 畜産加工

(一) 皮革工業

滿蒙の地は牧畜に適し、畜産資源極めて豊富である。殊に原皮の一大産地として知られてゐるが、最近に於ける産出高は牛皮二十五萬枚、馬皮三十枚、驢皮三萬五千枚、緬羊皮百五萬枚、山羊皮五萬枚、犬皮四十六萬枚と推算されてゐる。斯の如く原皮は豊富であるに拘らず、皮革工業は萎靡として振はず、獸皮は大部分生皮のまま輸出され滿洲に於て使用する様革は外國品の輸入に埃たねばならぬ状態である。

輸入	皮革及毛皮	二、〇〇三、千圓
輸出	豚毛	一、三九二、千圓
	皮革及毛皮	五、九二九、千圓

尙ほ皮革工業不振の原因としては(一)背皮が蛇の爲め無數の孔を有すること(二)皮革製造技術の幼稚なること等が挙げられる。斯業は初め日本人で之に従事するものもあつたが、近年漸次減少してその反面に支那人斯業者が擡頭し來り、現在は殆んど支那人の手に依つて營まれつつあると云ふも過言でない。

(二) 骨粉工業

由來骨粉は(一)過磷酸其他の肥料に比し相場割安にして(二)磷酸分のみならず、有効なる窒素分をも含有し(磷酸分約二五%、窒素分約五%)、(三)鹽基性反應を呈し、土壤中の酸を中和せしむる作用を有してゐる。且つ(四)不溶

[345]



解性のもだから雨水によつて流出されることなく、又(五)他肥料と混用して悪作用を呈せず、(六)使用容易にして危険性少きを特徴とする。故に目下疲弊せる我が國農村には誂向きの肥料である。且つ傾斜地の多い我が國に於ては、普通の過燐酸肥料は雨水の爲め流出する虞あるに反して、骨粉の如き遲放性の肥料にはこの様な缺點を有ないから、我が國に於て骨粉原料たる獸骨と合せて年々六百萬圓以上の輸入をなす必然性を持つてゐる。翻つて滿洲を見るに錦州、奉天、大連は滿洲に於ける有数の獸骨集散地とせられ(特に錦州がその首位を占めてゐる)全滿に出廻る獸骨數量は大約七、八萬噸と推定せられてゐるが、大連出廻數量について見ても少くとも年々二萬五千米噸を下らない。

斯く滿洲は日本の骨粉需要の現状から見ても、骨粉製造工業地として相當有利な條件に置かれてゐるのであるが、現在に於ける在滿斯業としては只一つ大連の滿蒙殖産株式會社あるのみである。同社の昭和五年に於ける骨粉生産高は八千噸、價額四萬四千圓と稱せられ、兼ねて膠の製造にも従事してゐる。

上記の如く滿洲の畜産物工業は未だ原始的の域を脱してゐない。そして皮革の如きも今後は近代化學を應用するタニンングの方法を適用し、小工業を集めて大量生産の工業に改造することにより優良な皮を安價に作ることも出来るであらうし、又骨の方も單に蒸して粉にするやうな程度に止まらず、骨に附着してゐる骨油を抽き取り、又はゼラチン膠の如きものを採取して十分に副産物を利用した上、残りの骨は骨粉用に供すると云ふ如き合理的化學工業に迄進歩發達せしめねばならぬ。

(III) 毛織工業

滿蒙は羊毛の産を以て名あれども、未だ文化進まず、随つて高級品たる織物に對する需要極めて尠く、羊の飼養目的の如き肉皮の採取を主とし、羊毛の採取は寧ろ附隨的目的に過ぎず、近年滿鐵に於て其の改良に努力しつつありとは云へ、滿蒙の羊毛は品質極めて粗悪にして、毛布、毛絲及びカーペット・ヤーンの原料とするに足るのみで、未だ羅紗類の原料に適せず、その原毛は勢ひ、濠洲に需めざるを得ないので、其の工業條件は日本其他に比して決して有利でない。現存する滿蒙毛織會社は正七年關東廳滿鐵助成の下に、日支合辦の組織として奉天に設立せられたが、財界の不振と製品の販路豫期の如く開拓されず、爾來經營困難を續けてゐる。

滿蒙毛織會社生産高

(昭和六年度)

種別	生産數量	生産價額	種別	生産數量	生産價額
羅紗	一九三千碼	四一七千圓	毛絲	一一七 <small>封度</small>	一四七千圓
毛布	七七枚	四一五千圓	サージ	二七八 <small>千碼</small>	四六一千圓

滿蒙毛織を外にしては遙かに小規模であるが、滿洲人側工業として奉天に裕華毛織工廠、哈爾濱に裕慶德毛織廠、安裕大磨公司(副業)及び吉林に中國人民毛織公司等があるが、これ等は經營難から殆んど全部休業中である。

◎ 水産加工

(一) 曹達灰工業



曹達工業は一般化學工業の資料を供給するもので、その自給自足如何は一國産業の自主化の上に重大な關係を有するわけである。由來本工業は原料たる鹽が安價で得らるか否かが企業採算の良否を決定する第一條件であるが、關東州内に於ては鹽田七千町歩、産鹽四億萬斤で、將來の増産も容易であるし、生産費も極めて低廉である。それに石灰石、硫安及び所要燃料等曹達工業に必要な條件が好都合に得られるから、是非共この地方の發達を必要とし、製鹽業者の基礎を確定せしむる事が緊急である。

滿鐵は夙に斯業に着目し數來年研究中であつたが、最近關東廳は關東州曹達灰工業株式會社の創設を發起し、資本金五百五十萬圓、曹達灰年産五百四十千噸の工場設立計畫を進めた。不幸英國曹達のダンピングを受け未だ實現するに到らない。

#### ◎ 鑛産加工

#### (一) 金屬工業

#### 製鐵業

滿洲に於ける斯業は鞍山製鐵所及び本溪湖煤鐵公司の二つに限られてゐる。

鞍山製鐵所は大正五年中日合辦鞍山鐵礦振興無限公司が組織せられ、鞍山一帶の鑛業權を獲得し、滿鐵之と買鑛契約を結び、原鐵供給の基礎を確立したのに初まる。原鑛の大鑛分は含鐵量三五%程度の貧鑛であつて從來採算上頗る不利な立場にあつたが、所謂鞍山式磁化還元焙燒法の完成はこの貧鑛をして人工的に五五%以上の富鑛化せしめ一時滿鐵の痛と稱せられた本製鐵所の救済策に成功した。爾來數度の擴張を経て、今日に於ては處理鑛量年九十六萬噸の大選鑛場、一日出鉄量三百噸、三百五十噸及び五百噸の焙鑛各基一を有し、一箇年製造能力四十萬噸の年々、

二十七、八萬噸の鉄鐵を生産してゐる。

尙ほ本製鐵所は右の外副産物製造設備として硫安工場(一箇年産六千噸)タール蒸溜工場(一萬四千噸)ベンゾール工場(三千五百噸)ナフタリン工場(六百噸)硫酸工場(七千六百噸)耐火煉瓦工場(七千噸)を擁してゐる。

本溪湖煤鐵有限公司は明治三十八年一月大倉組が始めて本溪湖炭山に手を着け、同四十三年五月日清合辦本溪湖煤鐵有限公司を組織し、その翌年十月製鐵部合辦の調印と共に、現在の本溪湖煤鐵有限公司と改稱、更に大正三年増資して、大洋七百萬元の製鐵所となり今日に及んで居る。

同公司設備の熔鑛爐として、百五十噸熔鑛爐二基及び二十噸爐二基があり、年十二萬噸の製造能力を具備し、年々七十八萬噸の鉄鐵を製造してゐる。又該炭工場(能力約一五萬噸)副産物工場(硫酸製造能力五十度硫酸一日四噸)を擁する。特に其種骸炭を以て製する低磷鉄は、兵器磷鉄として本公司獨特の強味である。

尙ほ所謂土法製鐵としては秦馬集、城廠、杉松崗、鑛銅子等に行はるゝも、何れも年産百萬噸前後にして、現在採算合なざる爲め、殆んど休止状態にある。

又我が國鐵鋼國策根本方針確立の爲め數年前から懸案であつた昭和製鋼所が愈々敷地を鞍山に決定、設立さるる運びになつた。同所は資本金一億圓、鉄鋼一貫作業で鞍山製鐵所を中心とし、鉄鐵年産額四十萬噸、鋼片三十三萬噸(内地に輸出額は鉄鐵四萬噸、鋼片二十萬噸)、今後二箇年間に完成の豫定である。

#### 輕金屬工業

アルミニウム、マグネシウム等の輕金屬が單なる實用品原料たるに止まらず、自動車、航空機原料として重要な軍需品たることは既に多言を要しない。不幸にも我が國には全然これを産出しなかつた爲め



輸入は年々増加しつつある勢にあつたが、滿洲に於ては大石橋附近のマグネサイトと撫順、煙臺、本溪湖、田師附溝及び復州等にアルミニウム原料たる優良粘土を無盡蔵に産生し、且つそれが工業化に緊要な電力は之を豊富に得ることが可能であるから、近い將來に於て斯業の旺盛な發展を見るであらう。現に滿鐵は最近撫順アルミニウム工場の設置を計畫してゐるから、遠からず之が實現を見るであらうと想像される。

◎ 窯 業

(一) セメント工業

滿洲、特に關東州はセメント原料たる石灰石及び粘土の産頗る豊富にして、滿洲文化の向上と併せて、本工業發達の必然的素質を有してゐる。滿洲に於ける本工業の先驅を爲すものは、明治四十年周水子に設立せられた小野田セメント株式會社である。其後同社は滿洲建築界の發展と南支南洋のセメント需要とに迎へられ、大正八年工業を擴張すると共に、年産高七十五萬樽の製造能力を有するに至つたのであるが、其の後世界的不況により日本内地斯業者と同様、四、五年前は五、六割方の限産を行ひ、六十萬樽程度の年産高を示して居たが、昭和六年には九十四萬樽の成績を擧げてゐる。

外に大正八年奉天に設立せられた奉天石灰セメント株式會社があり、年産約三千五百萬斤の成績を擧げたが、近年は全く石灰の生産のみに従事し、セメントの製造には當つてゐない。

關東州は同時に珪白セメント原料たる苦灰石の産多く、これに着眼して大連に珪白セメント合資會社の設立を見、大正八年大連ドロマイト工業合資會社と改稱せられた。同社製品は品質優良にして白色ポルトランドセメント同様

に使用せられ、各種人造石其他化粧工事の材料に好適し、年生産約五百萬樽である。

最近滿洲の需要増加を見越して小野田セメントは鞍山に鞍山礦滓利用のセメント工場を目論見、既に工場建設中にて、この外遼陽、哈爾濱、吉林の各地にもセメント會社設立あり、滿鐵又撫順に油頁岩を原料とするセメント製造計畫を有するから、斯業の將來は多忙と見られる。

(二) 耐火煉瓦製造業

滿洲には耐火材料たる耐火粘土、硅石、苦灰石、麥苦土礦の産出豊富にして現在之に基いて耐火煉瓦の製造に當つてゐる工場は、大連三、旅順二、普蘭店二、鞍山一、本溪湖一、撫順三、合計大小十一工場である。この中耐火煉瓦のみの製造販賣に従事するものは、大連窯業株式會社一工場のみであり、主たる事業に關する附帯事業としては鞍山化學耐火煉瓦工場、本溪湖窯業工場耐火煉瓦工場の二工場があり、之に準ずるものには撫順窯業會社東ヶ岡工場がある、他の兼業又は副業として耐火煉瓦の生産に當つてゐる。

大連窯業會社は大正十四年滿鐵窯業試驗工場を分離設立したものであるが、現在資本金百二十萬圓、一箇年生産能力一萬五千噸を有し、斷然斯界に君臨してゐる。大連窯業以外のものを一括表示すると次の通りである。

工 場 名	所 在 地	製 品 種 目
撫順窯業株式會社東ヶ岡工場	撫 順	耐火煉瓦、土管、石灰
鞍山製鐵所化學工場耐火煉瓦工場	鞍 山	同 同
本溪湖煤鐵公司窯業工場耐火煉瓦工場	本 溪 湖	同 同



[352]

復州粘土窯業公司耐火煉瓦工場 普蘭店 同 土管  
 小林耐火煉瓦工場 旅順 同 裝飾煉瓦、土管  
 山崎土器製造所 同 煉炭、土管  
 大陸窯業株式會社 大連、旅順 同 空洞煉瓦、土管、セメント製品  
 伊賀原組窯業部 旅順 同 黒煉瓦、土管  
 滿洲耐火煉瓦工場 同 土管、坩堝  
 奥野製陶所 大連 同 磚子磚管、セメント、敷瓦

(三) 硝子製造業

硝子製造は從來微々たるもので、僅に硝子屑を原料とする埴類、ランプホヤ製造する程度のものであつたが、滿洲は元來硅石等の原料に恵まれ、原料低廉且つ氣候寒冷等の好條件を具備してゐるので、歐洲大戰を轉機として勃興し、今日の隆盛を見るに至つた。

(四) 其他窯業

以上の外普通煉瓦、土管、瓦、陶磁器等の製造業が、邦人側の主なるものを列擧すれば次の通りである。

會社名	所在地	製品種類目
吉長窯業株式會社	新京	各種煉瓦、日本瓦、陶磁器販賣等

安東窯業株式會社	安東	煉瓦、瓦、其他窯業品製造販賣
大陸窯業株式會社	大連	土管、煉瓦
滿洲坩堝株式會社	同	黒鉛、坩堝、耐火品
滿洲窯業株式會社	奉天	煉瓦
奉天窯業株式會社	同	煉瓦、セメント瓦、瓦、土管、磁器
開原窯業株式會社	開原	煉瓦、土管

(五) 油母頁岩工業

本工業は専ら撫順炭層の上部に覆はれた油母頁岩を乾餾することにより、重油、パラフィン等の析出を目的とするものである。撫順油母頁岩の埋藏量は五十四億噸に及ぶと稱せられ、日本に於ける石油缺乏の缺陷を補ふものとして夙に滿鐵はこれを原料とする採油事業に着目、多年研究の結果、内燃法に依る獨特の撫順式乾餾法に成功し、昭和五年五月資本金八百五十萬圓を以て、一晝夜五〇噸能力の乾餾爐八十基を擁する工場を設置を完了、六月より操業を開始することゝなつた。現設備に依る生産能力は年額一、三八〇、〇〇〇噸の油母頁岩を乾餾して次の諸品を生産するものである。

[353]

一、原油年産	六八、〇〇〇噸
重油	四八、〇〇〇噸



右原油より

粗 蠟

一五、〇〇〇 觔

(此粗蠟は山口縣徳山の日本精蠟會社へ輸送の上次の粗蠟と重油とに分製する)

右粗蠟より  
精 蠟

七、〇〇〇 觔

重 油

六、〇〇〇 觔

二、骸 炭 年 産

四、八〇〇 觔

三、硫 安 年 産

一八、〇〇〇 觔

尙ほ本工業は近き將來に於て第工次擴張が計畫され、又重油を輕油化することに研究が進められてゐるから、之が完成の時は石炭液化の前提ともなり、我が國液體燃料問題の解決に貢獻するであらう。

(六) 硫安製造業

滿洲に於ける硫安製造は凡て副産物としての生産に係はるものであるが、昭和六年度各社の生産高は、撫順炭礦五、九二三觔、撫順オイルセール工場一五、八〇二觔、鞍山製鐵所五、四四一觔、本溪湖煤鐵公司一、一二〇觔、南滿瓦斯會社一三二觔、計二八、四一七觔である。然るに日本内地に於ける硫安消費高は年々六十萬噸を突破し、その五割張を英、獨より輸入してゐる状態にあるが、本來本工業は國防上産業上密接な關係あり、我が勢力圏内に於ける斯業の確立は喫緊事と言ふ可きである。滿鐵もこの點を考慮し、安價にして豊富な石炭を利用して硫安工場建設の計畫を有し、相當前より研究されてゐたのであるが、本年遂に具體化して大連市に滿洲化學工業會社の設立を見

昭和十年より操業開始の豫定であるが、その生産能力は年額十八萬觔と稱せらる。

(七) 藥品製造業

滿洲の藥品製造業は殆んど云ふに足らない状態である。只熱河省に産する甘草を原料として甘草エキスを製造する滿蒙興業株式會社大連工場があるのみである。同社の甘草エキス生産高は七萬觔餘、價額五萬七千圓であるが、その殆んど全部は日本向である。

火藥製造業としては安東に滿洲鑛山藥株式會社(大正八年創立、資本金百萬圓)があり、硫黃、硝石以外の原料は之を滿洲に仰ぎ、火藥、導火線、煙火、獵用實包の生産に當つて居り、その年額二十五萬圓内外に及ぶ。滿洲は現在鞍山、本溪湖、撫順等の主要鑛區二十四を有し、他方鐵道、道路の開墾工事の擴張等に連れて、鑛山藥の需要は今後益々増大するの趨勢にある。

(八) 染料製造業

滿洲に於ける染料としては従來北滿産及び支那内地産の藍、槐、楓等を原料として小規模に製造せられてゐたが、大正八年大連に資本金二百萬圓の大和染料會社が設立せられ、滿洲に需要を喚起し着々實績を收めたが、大正十二年獨逸品の進出によつて相當の打撃を受け、年々製造高の漸減を餘儀なくせられた。即ち同社最近の一箇年生産高は硫化染料約十五萬觔である。然し乍らベンゾール、鹽、石炭、芒硝原料の豊富な天恵を有する滿洲は、斯業の將來に大なる望を残してゐる。

◎ 動力工業



(一) 電気工業

日本側電気會社(日滿合辦を含む)は全體の三四%を占め滿洲國側社數の五三%に劣るけれども、發受電容量は八〇%、點燈數は六七%、投資額は八七%で、施設方面に絶對的勢力を有し、其中滿鐵及び其の傍系たる南滿電気株式會社の地位は事業數二二%、發電容量約七〇%、點燈數約五二%、投資額約六四%を占め、斷然壓力的である。邦人電気事業は之を事業別にすれば、電気供給業二六、電気鐵道事業三(内二は電気供給業と兼營)となり、全資本總額は三千一百七十五萬圓、其中滿鐵及び南滿電気はその九割、二千七百〇五萬圓と言ふ割合である。滿洲は地勢概ね平坦なる爲め水力による發電の適地少く、石炭産出が豊富な關係から發電設備は大部分火力によるものであり、其の他は瓦斯力、重油による。從來は各地共孤立的發電設備を設けてゐたが、近年經濟的見地から次第に送電系統の連絡行はれ、事業者間に於ける電力授受の便が多くなつた。現在使用の最大電壓は四萬四千ヴォルトで、周波數は五〇サイクルが最も多いが、撫順及び本溪湖の系統に屬する各地は六〇サイクル、鞍山系統二五サイクルで、これ等統一の必要が論ぜられてゐる。

(二) 瓦斯工業

滿洲に於ける瓦斯工業は滿鐵が撫順炭利用の一方法として明治四十年十月之を計畫し、大連に一晝夜三十萬立方呎の發生爐及び容量十五萬立方呎の瓦斯溜一臺を設備したるに始まる。爾後滿鐵附屬地の發展に伴ひ、大正十四年十月滿鐵より分離して大連に資本金一千萬圓の南滿洲瓦斯株式會社が創設せられた。撫順は炭鐵の附帶事業として、明治四十二年十月より營業開始せられたものであり、鞍山は製鐵所餘炭爐過剩瓦斯

の市街供給の目的を以て、大正九年四月より操業着手せるものである。

第十章 滿洲の商事と金融機關

第一節 貿易

一 貿易の消長

滿洲の貿易は牛莊(營口)の開埠に始まる(一八六〇年天津條約)。爾來、日露、殊に日本の資本技術による鐵道及び港灣の完成は、漢人移民による國內經濟の發展と相俟つて進展の歩を早めた。しかも國內消費力の弱小と世界的市場を持つた大豆の輸出増加との爲めに滿洲貿易は年々出超を續けて來たので今明治四十年以來昭和六年までの間に於ける滿洲貿易の消長表を示せば左の通りである。

滿洲貿易消長表 (單位千海關兩)

年別・類別	貿易總額	輸入	輸出	出(入)超			
	金額	指數	金額	指數			
明治四十年(一九〇七)	五、九六	三三	三五、五六	四〇	二四、四二	二六	〇一、〇九五
同四十三年(一九一〇)	一八、四三	一〇〇	八八、八五七	一〇〇	九三、五五	一〇〇	四、七九
大正四年(一九一五)	三六、一〇六	二三	一〇八、一一	三三	三〇、〇八四	一三	三、九七



同 九 年 (一九〇〇)	四二、〇五五	三六	二五、二九	三三	三五、九六	二四	二〇、六九七
同 十 四 年 (一九一五)	五七、〇二九	三〇五	二四、七二	二五	三三、三六	三九	六七、六四七
昭 和 四 年 (一九一九)	九五、二五五	四四	三九、六三	三七	四三、六五一	四三	九六、〇四八
同 五 年 (一九二〇)	七三、七三	三五	三六、九九	三四	三九、七四	四四	八九、七五
同 六 年 (一九二一)	七〇、九五	三四	三三、四三	二五	四六、五三	五二	二五、二二

開埠以來貿易總額は一路上向きつゝある。即ち昭和六年度に於ては日露戦争直後の明治四十年に比較して實に十一倍の貿易増加を示してゐる。

然しながら之は銀を基礎とする海關兩を以て示された價額であり、銀其のものが騰落常ないものであるから、この増加傾向を以て直に貿易の實體を表示したものと断じ得ない。寧ろ比較的騰落の少ない米弗に換算して、明治四十年以降の貿易發展の狀況を觀察するが便であつて、即ち左の通りである。

年 次	滿洲貿易總額 千米弗	指 數	一海關兩の相場 米弗
明治四十年(一九〇七)	四七、三五一	四一	〇、七九
同四十二年(一九一〇)	一一四、九二〇	一〇〇	〇、六六
大正四年(一九一五)	一四七、六八一	一二八	〇、六二
同 九 年(一九二〇)	五三四、五〇九	四六五	一、二四

同十四年(一九二五)	四六七、九五五	四〇七	〇、八四
昭和四年(一九二九)	四八三、三六三	四二〇	〇、六四
同 五 年(一九三〇)	三二三、七〇八	二八一	〇、四六
同 六 年(一九三一)	二三八、六七五	二〇七	〇、三四

◎ 地方別港別

滿洲に於ける貿易は殆んど南滿に於て行はれつゝあるが其の貿易港としては断然大連が群を抜いてゐることは次の表に見るも明かなる事實である。

地 方 別	輸 出	輸 入
哈爾濱	千海關兩 四六、八二八	千海關兩 一六、〇二六
北 滿 愛 琿	未 詳	未 詳
計	四六、八二八	一六、〇二六
大 連	二八二、五七〇	一四一、九九九
	五九	六五
	一〇	七
	一〇%	七%



[360]

南	營口	九四、九三五	二〇	三〇、七四〇	一四
滿	安東	四五、七四三	一〇	二五、八一六	一二
	計	四二三、二四九	八九	一九八、五五八	九一
東	龍井村	二、〇三三	〇、五	三、二〇二	一、五
	滿	一、七五八	〇、四	一、一六一	〇、五
	琿春	三、七九一	一	四、三六三	二
合	計	四七三、八六八	一〇〇	二一八、九四八	一〇〇

◎ 貿易の振展

滿洲事變勃發後一時滿洲は戰時状態に陥つたので貿易も全く停頓の有様であつたが、滿洲國成立し國內の秩序回復するや他の諸經濟活動と共に貿易は忽ち盛り返して事變前にも優る状態となつた。即ち全滿貿易のパロメーターである大連港の輸出入統計について事變前の昭和五年と事變勃發の昭和六年と事變後の昭和八年(大同二年)の比較を示せば左の如くである。(單位千金圓)

	輸	出	輸	入
五	年	二二三、三七七	四〇一、八五五	
六	年	一九二、八七三	二九〇、八〇七	

八 年 三三〇、一五一

三七四、七八〇

日本との關係が政治的、軍事的に密接となると共に經濟的にも「日滿經濟ブロック」といふ言葉を生む程、切つても切れぬ間柄となつた。滿洲國は農業を以て立ち各種天然資源に富む國であり、日本は非常な勢ひで各種工業に進出しつゝある國である。この兩國が相提携して互にその長短を相補ふことは共存共榮の原則に適合したものといはねばならぬ、輸出の大宗は大豆で、これにその製品たる豆粕と豆油を加へれば全輸出額の約六割を占めるといふ絶對優勢を示してゐる。

今後滿洲國內の産業開發と共にこれ等の貿易情勢も多小は變化して來るであらうが諸資源の開發、棉花、羊手生産の奮勵三千萬民衆の購買力増加、世界各國の滿洲國認識是正等に件つて貿易は増進こそすれ減退の恐れは全くないといつてよい。特に我が國との間は計畫的にも及自然的にも相互依存關係はますます深まるばかりであるから「日滿經濟ブロック」の實はいよゝ舉がる一方で兩國の貿易は誠に前途洋々といはねばならぬ。

◎ 各國別

滿洲貿易に於て首位を占むるは日本であり、支那之に次ぐ。兩者の占むる割合は總額の約七〇%である。日支に次いで接壤地蘇聯(太平洋岸)であるが、之には同地を通過する日本又は歐洲諸國との貿易品が多分に包含せられてゐる。

[361]

昭和六年全滿洲國別輸移出入額

(但本表は愛理海關管内の分を含まない)



國名	金額	割合	合計	金額	割合	合計
日本	一八二、七一一	三八、六%	三、八	九四、〇六六	四三、〇%	
支那	一四七、七八一	三一、二	六六、二九六	三〇、三		
極東ロシア	四五、四七六	九、六	一四、四六二	六、六		
英國	一六、四四三	三、五	四、三七六	二、〇		
米國	六、一二〇	一、三	一二、六二四	五、八		
和蘭	三八、五九六	八、一	五六四	〇、三		
香港	七、五八八	一、六	八、五四二	三、九		
獨逸	五、五八八	一、二	四、八八二	一、二		
蘭領印度	六、七四一	一、四	一、三五一	〇、六		
其他	一六、八二一	四、五	一一、七七九	五、三		
計	四七三、八六八	一〇〇、〇	二二八、九四八	一〇〇、〇		

三 貿易の將來

滿洲帝國の發展に伴つて、同國の經濟狀勢がどう展開して行くかは、世人の齎しく注目する所であるが、恐らく各資源の經濟化の擴大は、自然、滿洲經濟を世界經濟の一環たらしめ、國民生活を向上せしむべく、更に、合理的な關稅問題の解決と相俟つて、滿洲貿易は更に一段と發展するであらうと見られる。

現に昭和六年一月以降の大連港月別貿易を見ると、七年に入つて輸出も輸入も著しく膨張してゐる。

昭和七年 一月—六月	輸出 一六一、三九三、二七七圓	輸入 七九、四五二、七九三圓
昭和六年 一月—六月	輸出 一一〇、二五四、二五二	輸入 四九、九三七、五二五
増加額	五一、一三九、〇二五	二九、五一五、二六八
増加率	四六、五%	五九、二%

殊に從來滿洲貿易に於て、獨占的地位に立つ日本は、更に今後日滿相互依存の原則下に、關稅問題が有利に解決せられ支那商品との不均等なる競争がなくなるに至れば輸出入共に面目を一新して、大發展に向ふことであらう。最近の大連港の貿易を掲げて、日本の今後の對滿貿易の趨勢を窺はう。

關東州に於ける對日貿易の膨張割合は大きく、昭和七年上半期の累計で、輸出は五割五分、輸入は七割九分の増加である。

昭和七年 一月—六月	輸出 八一、九三三圓	輸入 四九、一七五圓
昭和六年 一月—六月	輸出 五二、七二六圓	輸入 二六、九二三圓



[364]

増加額  
増加率

二九、二〇七千圓  
五五%

二二、二五二千圓  
七九%

關東州の貿易に於て、日本との貿易は全體の半分を占める状態にある。従つて日本からの輸入の八割近くも増加したことは取りもなほさず事變後日本から、多額の商品が流れ込んだことを示すものに外ならぬ。次に如何なる商品が滿洲の貿易で増加を示したか。輸出では特産物の増加が、目醒しく、大豆以下落花生至る七品目に於て昭和七年は一億一千八百萬圓、六年同期は六千八百萬圓で差引五千萬圓の激増である。割合にして七割三分の激増で、輸出總額の増加五百萬圓の殆んど全部に相當する。特産品以外の輸出では、野蠶米毛、石炭が減少し、鐵、皮革等は増加した。次に輸入の方では減少したものは殆んどない。主要品は皆増加を示した。即ち小麥、砂糖、煙草類の食料品關係では七百五十萬圓の増加、棉花、綿糸、綿布の紡織品關係では九百十萬圓の増加、麻袋以下、石油に至る油脂、紙類の化學製品では二百二十萬圓の増加となつてゐる。滿洲の輸入貿易の斯る激増は、云ふ迄もなく、日本品の輸出増加を反映したものである。特に小麥、砂糖、綿布、紙類等に於てこの傾向が強く見られる。

四 昭和六年に於ける我が關東州貿易

昭和八年度に於ける關東州海路貿易成績を示せば左の如し

(單位十圓)

八年度

七年度

輸 出	三三〇、一五一	三〇五、〇六八
輸 入	三七四、七八一	二〇七、五八七
合 計	七〇四、九三二	五一二、六五五

即ち前年度に比し輸出は八分二厘、二千五百八萬三千圓の増加、輸入は八割一分、一億六千七百十九萬四千圓の増加、輸出入合計において三割八分、一億九千二百二十七萬七千圓の増加を示し、貿易尻においては前年の九千七百四十八萬一千圓の出超に對し、八年は四千四百六十二萬九千圓の大出超となり、輸出入共大連開港以來の新記録を示し未曾有の活況を呈した、今主要輸出入品につき前年と比較増減の主なるものを見るに、輸出にありては大豆が對支輸出不振に拘はらず對歐輸出未曾有の活況を呈したため、一千九百七十四萬一千圓の著増を示したのを筆頭に石炭對日輸出好調に五百六十五萬八千圓増、落花生二百七十七萬三千圓増、鐵及び鋼鐵二百七十四萬圓増、毛及び毛糸百七十二萬五千圓増、小麻子百二十三萬一千圓増、その他小豆、蘇子、綿織糸、皮革等いづれも著増を示し、一方輸入にありては一部商品を除く外、一齊軒並に著増を示し、就中建設關係材料の輸入は未曾有の活況を示した即ち建築材料(金屬製品)は前年の一千三十六萬圓に對し三千九十七萬四千圓と約三倍の激増、車輛及び部分品千三百八十一萬一千圓増、鐵及び鋼鐵五百七十二萬五千圓増、機械器具四百三十三萬六千圓増、その他軌條、木竹材、セメント等異常な増加を示した。建設材料に次いで一般商品の輸入も大いに振ひ小麥粉の如き前年の千六百餘萬圓に對し三千六百六十三萬七千圓と二千六十二萬二千圓増、綿織物一千五百九十二萬六千圓増、綿織糸六百六十一萬六千圓増、油脂六百三十四萬一千圓増、絹織物五百七十三萬二千圓増、タバコ五百六十一萬二千圓増、藥材藥品四百

[365]



[267]

品名		八年度	七年度
毛	及	三、一六一	一、四三六
鐵	及	九、六九〇	六、八六九
皮		三、三〇一	二、九七二
豆		一四、五九一	一九、二四一
洋		三八二	七六四
石		二五、九三四	二〇、二七六
豆		三九、四五四	五六、五八〇
主要輸入品			
小	品	二、八一五	一、六〇二
砂		三六、六三七	一六、〇一五
砂		一一、二五五	九、〇六九
煙		一一、一四五	五、五三三
綿		九、〇七八	一三、三九六
綿		一五、〇七八	八、四六二
織			
目			
粉			
糖			
糖			
草			
花			
糸			

[366]

三十八萬一千圓増、紙二百八十三萬二千圓増、以下石油、砂糖、皮革、毛織物等桁外れの増加を示したが、八年度重要輸出入品の内譯を示せば左の如し (單位千圓)

品名		八年度	七年度
大	品	一四二、一八三	一二二、四四二
小		六、三八二	五、四九九
高		二、五九三	八、四二七
玉		五三七	一、二五八
落		八、三六五	五、七九二
蘇		二、七〇九	一、八五九
製		三、〇一一	一、七八〇
小		三、二二八	三、六二三
麻		七〇一	一、〇二二
綿		七、九〇八	七、三一九
野		二一四	九七三
蠶			
織			
目			
豆			
豆			
梁			
黍			
生			
子			
子			
鹽			
草			
物			
米			







[370]

代フルニ現行輸入税率表中金單位ヲ以テ示セルモノハ一律ニ一海關金單位ヲ一・九五ノ率ヲ以テ國幣ニ換算シ現行輸出及ビ轉口税表中海關兩ヲ以テセルモノハ一海關兩ヲ一・五六ノ率ヲ以テ國幣ニ換算シ徵稅ス（稅率換算ニ當リテハ現稅率小數點以下二位ノ數字ヲ以テ示セルモノハ三位迄計算シ第三位ノ數字ハ之ヲ四捨五入ス、現稅率小數點以下三位迄ノ數字ヲ以テ示セルモノハ四位迄計算シ第四位ノ數字ハ四捨五入ス）

從來海關金單位若クハ海關兩ヲ以テ規定セル關稅以外ノ諸徵收金モ亦右ノ例ニ依ル

昭和八年四月十六日ヨリ申告書面ノ價格ハ國幣ヲ以テ表示スヘシ。

昭和八年四月十四日

大連稅關長

福本順三郎

註一、海關兩とは輸出税或は轉口税(内國貿易に課する關稅)を納入するに際して使用する徵稅單位であるが、實在する貨幣でなく假定の品質數量の銀塊を意味するものである。實際に於ては一定の比例に依り有形の銀塊、銀貨、又は手形を以て納稅する。大連に於ては正金銀行發行の鈔票一元五六八を以つて一海關兩の換算比率としてゐたのであるが、今回全滿海關に於て一・五六の比率を以て國幣に換算することゝなつた。

註二、金孫兩も海關兩と同様に假定の金塊を意味するものであつて輸入税の徵收單位として使用する。銀價暴落に伴ひ海關收入が減少せる結果、輸入税を金單位にて徵收することによつて右の減收を填補せんとしたのである。

一孫金兩は〇・四〇米金貨非にして之を基礎として各國の貨幣に換算し、昭和八年四月頃に於ける日本金圓との換算比率は一孫金兩一・九五圓であつたが滿洲國政府は四月十六日より上記の如く一孫金兩を國

幣一元九五に換算することゝした。

◎ 滿洲に於ける稅關

稅關名	設立地	開設年月	原	因	備考
大連	關東州大連	明治四十年七月	明治四十年日支大連海關協定		大連關は普蘭店に監視所を置く
牛莊	奉天省營口	元治元年五月	安政五年英、伊、支天津條約		
安東	同 安東	明治四十年三月	明治三十六年米支通商條約		
濱江	吉林省濱江	同四十二年	明治三十八年滿洲に關する日支條約		
延吉(龍井村)	同 延吉	同四十二年一月	同右		
愛琿	黑龍江省愛琿	同四十二年一月	同右		
大東溝分關	奉天省大東溝	同四十年十月	明治三十六年日支通商條約		安東溝に屬す
滿洲里分關	興安省滿洲里	同四十年二月	東支鐵道契約		濱江關に屬す
綏芬河分關	吉林省綏芬河	同四十一年二月	同右		同右
三姓分關	同 三姓	同四十二年七月	自ら開放		同右 但し民國十七年に撤廢
拉哈蘇々分關	吉林省同江縣境	同四十二年七月	同右		濱江關に屬す

註 支那では稅關を海關または單に關と呼ぶのであるが、滿洲國接收後全部稅關と稱することゝなつた。

[371]



◎ 關東州の特殊關稅制度

租借地關東州に於て日本は、關稅制度上原則として、自由港主義を採用してゐるが、一方滿洲側稅關を大連に置き關東州通過貨物に對する關稅行政を司らしむると共に、他方關東州品の對日輸出に對し、特惠關稅を適用してゐる大連稅關 元來日本は關東州の商工業的繁榮を期して、自由港主義を採用したのであつたが、接壤地滿洲との經濟的關係を考慮して、支那政府と相謀り、便宜上、大連に特異な大連海關を設置せしめたのである（明治四十年五月三十日大連海關設立及び内水航行に關する協定參考）

右協定により設立された大連海關は支那の一海關で、關東州通過貨物に對する關稅行政を司るものであつた。然しながら同海關の職員は全部日本人たることを要し、關稅率の改正、海關長の任命等に對しては關東長官の承認を必要とし、尙稅率の適用に特殊な方法を採つてゐた。而して既述の如く大連海關は從來の制度の儘滿洲國に接收せられ、日本の滿洲國承認と日と同じくして大連稅關と改稱せられたのである。

關東州特惠關稅制度 關東州は我が國の關稅區域外にあるから、一般には關東州仕出の商品は我が國に於て輸入税を支拂ふことを原則とするが、後述の特殊商品に對しては、我が輸入税を免除し、又は低減する。（大正十四年六月十七日法令第五十一號公布、昭和二年及び昭和四年改正）

此の特惠待遇を享けんとするものは、當該物品の產出地、又は製造地を管轄する民政署長、又は民政支署長の證明した生産原地證明書を要する。（大正十四年六月十七日公布勅令第二百三十二號、昭和二年四月勅令第九十三號、昭和四年五月同第一百一號により改正）現行特惠關稅品目は次の如くである。

輸入稅表番號	品名
一	輸入税を免除されるもの
三一の内	生果
七二の内	綿羊革及び山羊革(塗りたるものを除く)
一四一の二	甘草越幾斯
一四五	阿膠
一四六	ゼラチン
一五一	ブローム
一六五の内	曹達灰
一六九の内	硫酸曹達(精製のもの)
二二〇の内	硫酸マグネシウム
二三〇の内	コールドールを主要原料としたる消毒劑
二七二	綿織絲
二七八の内	苧麻絲及び苧麻線
二八〇	黄麻織絲
二八一の内	黄麻絲及び黄麻線



二八三	毛織絲
二八四	毛綿織絲
二八九の内	野蠶絹絲
二九六の内	苧麻線、苧麻繩、黃麻線及び黑麻繩
二九九の内	黃麻布(關東州の生産に係る黃麻絲を原料としたるもの)
三〇一の内	天鵝絨、ブラッシュ其他のバイル織物以外の毛織物及び毛綿交織物 (關東州の生産に係る毛織絲又は毛綿絲を原料としたるものを)
三二六の内	毛製又は毛綿製のフランクネット(關東州の生産に係る毛織經又は毛綿織絲を原料としてるもの)
三三九の内	ガンニー囊(關東州の生産に係るガンニー布を原料としたるものにして長九十五センチメートル、副六十センチメートルを超えたるもの)
三四三	別號に掲げざる布帛製品
四三二の内	二の内、内地、朝鮮、臺灣樺太又は關東州の生産に係る綿布及び關東州の生産に係る油を原料としたるもの
四三五	ポートランドセメント 別號に掲げざる礦物及び礦物製品

毛織絲

毛綿織絲

野蠶絹絲

苧麻線、苧麻繩、黃麻線及び黑麻繩

黃麻布(關東州の生産に係る黃麻絲を原料としたるもの)

天鵝絨、ブラッシュ其他のバイル織物以外の毛織物及び毛綿交織物  
(關東州の生産に係る毛織絲又は毛綿絲を原料としたるものを)

毛製又は毛綿製のフランクネット(關東州の生産に係る毛織經又は毛綿織絲を原料としてるもの)

ガンニー囊(關東州の生産に係るガンニー布を原料としたるものにして長九十五センチメートル、副六十センチメートルを超えたるもの)

別號に掲げざる布帛製品

二の内、内地、朝鮮、臺灣樺太又は關東州の生産に係る綿布及び關東州の生産に係る油を原料としたるもの

ポートランドセメント

別號に掲げざる礦物及び礦物製品

五三六	煉瓦(セメント製のものを除く)
四三七	瓦(粘土製のもの)
四三八	耐火性粘土製品(別號に掲げざるもの)
四四一	硝子塊
四四二	硝子粉
四四四	硝子板
四六二の内	特殊鋼
四七六の内	一の内全重量百分中クロム、タングステン又はモリブデンの重量の五以上を含有するもの(關東州に於て製煉したる塊及び錠並之を原料としたる條、竿及び板)
五七〇の内	ニッケル及びクロムを含む電気抵抗材料(關東州に於て製煉したる塊及び錠並に之を原料としたる紐、帯及び線)
	ゲージグラス

二其他

乙の内マグネサイト又はドロマイトを主要原料としたる建築材料  
(粉狀のもの)

煉瓦(セメント製のものを除く)

瓦(粘土製のもの)

耐火性粘土製品(別號に掲げざるもの)

硝子塊

硝子粉

硝子板

特殊鋼

一の内全重量百分中クロム、タングステン又はモリブデンの重量の五以上を含有するもの(關東州に於て製煉したる塊及び錠並之を原料としたる條、竿及び板)

ニッケル及びクロムを含む電気抵抗材料(關東州に於て製煉したる塊及び錠並に之を原料としたる紐、帯及び線)

ゲージグラス